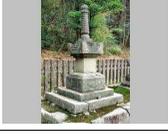


国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 朝産屋 1棟 能舞台(附橋掛及び能楽屋) 1棟 揚水橋 1棟 長橋 1棟 反橋 1棟	いつくしまじんじや	5棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	朝産屋/桁行八間、梁間四間、一重、右側面切妻造、左側面入母屋造、檜皮葺能舞台/桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、妻正面、檜皮葺揚水橋/長さ三間、幅二間、長橋/長さ十八間、幅一間四尺、反橋/擬宝珠高欄付、長さ十一間三尺、幅二間二尺		【朝産屋】もとと勤番神職が祭典時の参集及び鐘撞の所で、明治から昭和30年代までは社務所になっていた。平安時代(794～1191)の建築様式を伝えているが、現在の建物は、江戸時代前期(1615～1660頃)の建築である。 【能舞台】創建は永禄11年(1568)ごろ。毛利元就が京都の観世(かんげ)太夫を招いて法楽(ほうらく)したと伝わる。現在の建物は、延享8年(1680)の建築であるが、屋根の正面妻、畜産、地留産、後産、橋掛などに江戸幕府の式表が制定した形式とは異なる古式を伝えている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 本殿 附 宮殿 1基 渡廊 1棟 棟札 1枚	いつくしまじんじやせつしゃてんじんしゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	本殿/桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、妻入、背面庇付、檜皮葺宮殿/一間社流見世柳造、檜皮葺渡廊/桁行四間、梁間一間、一重、切妻造、檜皮葺		別名遣歌堂と言ひ、明治の頃までここで遣歌(れんが)の会が催されていた。弘治2年(1556)毛利隆元に建てられた。舟造(にぶり)の建物群の中で素木(しらき)造の繊細な木割をもつ住宅風建築で、またこの建物だけが板壁でなく漆喰壁であることから、この時代の住宅風工法の影響を受けたと思われる。室町時代(1333～1572)に盛行した遣歌会所(かいしよ)の遺構としても珍しい。 ※遣歌(れんが) 短歌の上部(5-7-5)と下部(7-7)を交互に読み連ねる文芸の一種。鎌倉時代(1192～1332)以後発展し、室町時代から戦国時代(14～16世紀)に最盛期を迎えた。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 大鳥居 附 棟札 2枚	いつくしまじんじやおおとりい	1基	廿日市市宮島町	明32.4.5	木造両部鳥居、檜皮葺、舟造、高さ16.8m		本社から109m離れた海中に立つ。本社に計4本の控え柱を持つ「両部大鳥居」の形式である。現在の鳥居は明治8年(1875)建立。本柱は1本のクノキを使用している。木造の鳥居としては高さ・大きさともに日本一である。 創建についてはつまびらかでないが、最古の記録がある平清盛の仁安3年(1168)の造営のものを初代とすと、現在のものは8代目となる。厳島神社を描いた「一遍聖人聖絵」には社殿前に明神(みょうじん)鳥居が描かれている。現在の形式になったのは天文16年(1547)大内義隆等が中心になって行った再建時と言われる。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 本殿 附 棟札 1枚	いつくしまじんじやせつしゃおおおくにじんしゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明32.4.5	桁行三間、梁間四間、一重、切妻造、妻入、檜皮葺		戦国時代、元亀2年(1571)建立と伝えられる。西廻廊にほぼ接して建てられ、優美な曲線の屋根を持つ社殿群の中で、ほとんど直線に近い屋根のそりを持つ建物である。拝所は廻廊と長根とをつなぐ廊下の役も果たし、かつては本社裏の御供所から運ばれてきた神饌(しんせん、おそなえ)を、一度この御殿に納めたという。 大内主命を祭神とするこの社の起源についてはよくわかっていないが、天文6年(1537)には既にこの社が祀られていた。大内神社と称されたのは明治以後と思われる。それ以前は「大黒堂」と言われていた。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 五重塔	いつくしまじんじやごじゅうごのとう	1基	廿日市市宮島町	明33.4.7	三間五重塔婆、檜皮葺、高さ27m		和様と禪宗様が融合されて、みことな構成をなす五重塔である。室町時代の応永14年(1407)創建と言われ、寛永(くわんえい)下品軒渡の数珠掛鉤から戦国時代の天文2年(1533)に改修されたことがわかる。丸輪を銚造した廿日市鎮物師(しんじょう)山田善守の名もあがられている。 初重の柱は上部を金欄巻(きんらんまき)とした朱漆塗で、それぞれ彩色の寄附者の名が記されている。内陣の天井は雲竜、未迎壁は表に蓮池、裏に白衣観音、周囲の壁は瀟湘(しょうそう)八景を添景とした真言八相の壁画である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 多宝塔 附 棟札 1枚	いつくしまじんじやたほうとう	1基	廿日市市宮島町	明34.8.2	三間多宝塔、こけら葺、高さ15.6m		この塔はほぼ純和様を基調としており、戦国時代の天永3年(1523)創建と伝えられる。重層で屋根は上下とも方形であるが、下層方形の屋根の上まにまじゅう形の亀腹(かめぼら)があり、それにつれて上層は柱が円形で配列されている。輪郭まわりの組物まで円形で、それから上の大仏様の組物手先は放射状に配され、軒折で方形に取り合せている。 多宝塔はインドにおける仏の墳墓であるスツパ(卒塔婆)から発した塔の一形式で、この塔を特色づける亀腹は墳丘の名残りである。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 末社 荒胡子神社 本殿 附 棟札 1枚	いつくしまじんじやまつしやあらえびすじんしゃほんでん	1棟	廿日市市宮島町	明37.2.18	一間社流造、檜皮葺		美しい小建築である。棟札には室町時代の嘉吉元年(1441)に島田三郎左衛門宗崇氏が造立した旨が記されている。 室町時代(15世紀前半)建立の例として和様と禪宗様が混交しており、その中でも破風の曲線、扉口上の鳥股(かえるまた)の殿内彫刻絵様(えいさま)が左右対照をわずかに中心でずらしたところ、向拝(こうはい)の丸柱と遊離した手挟(たばさみ)の工法等にこの建物を特色づける手法が見られる。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社 末社 皇国神社 本殿(千畳間) 附 棟札 2枚	いつくしまじんじやまつしやとよ(に)じんしゃしょうかく	1棟	廿日市市宮島町	明43.8.29	桁行正面十三間、背面十五間、梁間八間、一重、入母屋造、本瓦葺		豊臣秀吉が毎月一度千筋の転読供養をするため、天正15年(1587)発願、安国寺惠瓊(あんこくしえい)に造営奉行として同17年(1589)ほぼ完成した大経堂である。文様・地元の由来、秀吉の死去などの理由により天井板もはられず、正面の階段もない未完成状態であるが、規模広大、木割雄大で軒丸瓦・唐草瓦に金箔をおすなど、よく桃山時代(16世紀末)の気風を示している。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺 阿弥陀堂	じょうどじあみだどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14	桁行五間、梁間四間、一重、寄棟造、本瓦葺		浄土寺本堂(国宝)の裏側に立つこの建物は、南北朝時代、康永4年(貞和元、1345)再建と伝えられる。本堂、多宝塔(国宝)が再建された後に建てられたものと思われる。復れた和様建築と評面されている。本堂は阿弥陀如来坐像(仏重文)である。 浄土寺は尾道有数の古刹(こさつ)で、尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代(1192～1332)以後、西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

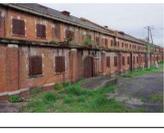
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	西園寺金堂 附 厨子 1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大2.4.14	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、向拝一間、本瓦葺		西園寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹(こさつ)である。金堂は、延暦3年(1386)建立で、和様を基調とした建造物である。厨柱上が二手先で蛇腹支輪及び小天井付に、向拝(こつはい)は三ツ斗組である。それに虹梁(にりょう)が掛けられ中供(なかすゐえ)に基段(かえりまた)があり、虹梁の柱外には華鬘(くわしぼ)が、また主屋の方へは手挟(たばさみ)が出て威厳が示されている。入母造(いりもやつり)の妻飾(つまざり)は二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりょうたいへいづか)で、屋根に重畳感があり、規模壮大で手法雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子(ずし)、須弥壇(しゅみだん)も秀麗である。木造家師如来坐像(盧文)が本尊である。		
国	重要文化財(建造物)	西園寺三重塔	さいこくじさんじゅうのとう	1基	尾道市西久保町	大2.4.14	三間三重塔婆、本瓦葺		この三重塔は、永享元年(1429)足利義教によって建立された。室町時代(1333~1572)によく行われた復古建築の純和様で、和様と禅宗様の混交の風に飽き足らず、奈良時代(710~793)への復讐をめざしたものである。どっしりとした美しい塔で、回縁がなく、石製基壇の上立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財(建造物)	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうさんじゅうのとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭2.4.25	石造、花ご岩製		この塔は、鎌倉時代、永仁2年(1294)建立であり、基壇に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性(にんじょう)が建立したと伝えられ、基壇は作者の名の刻もみえる。軒は厚く、力強い反りを示し、初層四面の仏の種子(しゅじ)は薬研(やげん)形で、雄健な鎌倉時代(1192~1332)の代表的な作品である。光明坊は、生口島南岸のほぼ中央にある、真言宗の古刹(こさつ)である。		
国	重要文化財(建造物)	安国寺釈迦堂 附 柱廊 1双	あんこくじしゃかどう	1棟	福山市鞆町後地	昭2.4.25	桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、本瓦葺		旧金宝寺仏殿と伝えられる建物。金宝寺は暦応2年(1339)足利尊氏によって備後安国寺とされた。慶長4年(1599)安国寺善蓮(えんり)が大修理を加えた。鎌倉時代末期から南北朝時代初期(14世紀前半)の、質実な禅宗様仏殿の形式をよく残している。		
国	重要文化財(建造物)	福山城 伏見櫓 1棟 筋鉄御門 1棟	ふくやまじょう ふしみやぐら すじがねごもん	2棟	福山市丸の内	昭8.1.23	伏見櫓／三重三階、隅櫓、本瓦葺 筋鉄御門／扇戸付櫓門、入母屋造、本瓦葺		福山城は元和8年(1622)水野勝成(みずのかつなり)の命によって築かれた近世城郭である。伏見櫓や筋鉄御門など築城当時の建物が残されている。【伏見櫓】将軍徳川秀忠の命によって伏見城から移された櫓。もと伏見城「松の丸東やぐら」であった。本瓦葺・白塗の三重三階櫓で、横長・窓2階の上正方形の望楼を乗せたような外観である。慶長年間(1603)に補修建造物である。【筋鉄御門】伏見城からの移築と伝えられるが、築城時の新造とも考えられている。柱のかどに筋鉄を施し、とびらに十数本の筋鉄を打ちつけてあるためその名が生まれた。		関連施設: 福山城博物館 (084-922-2117)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社摂社大元神社本殿 附 宮殿 3基 銘札 2枚	いつくしまじんじしゃせつやとおも じんじはんてん	1棟	廿日市市宮島町	昭24.2.18	本殿／三間社流造、板葺 宮殿／各、一間社流見世棚造、柿葺		戦国時代、大永3年(1523)造営。屋根が異例の長板葺で、中世の絵巻物には見られるが、他に類例を見ない日本唯一の「六枚重三段葺」の建物である。本殿内陣にある玉殿(ぎょくてん)には嘉吉3年(1443)の墨書があり、現在の社殿より古い。また、社殿の彫刻の一部も現在の社殿以前の建物からの再利用と考えられている。大元神社は本社の厳島神社より古い鎮座と伝えられている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	厳島神社宝蔵 附 棟札 1枚	いつくしまじんじしゃほうそう	1棟	廿日市市宮島町	昭24.2.18	桁行二間、梁間一間、校倉、寄棟造、檜皮葺		室町時代初期(14世紀ごろ)の造営と思われる。天正16年(1598)に毛利輝元が、慶長15年(1610)に福島正則が修理している。昭和9年(1934)に現在の宝物館(登録有形文化財)ができるまで、国宝平家納経はじめとする神社の宝物が収蔵されていた。五角形の断面をした木材を組み合わせた校倉(あざくら)としては最古の建物である。境内にはこの校倉の外に、室町時代(1333~1572)造立と伝えられる熊野神社宝蔵(三次市)、江戸時代初期(17世紀)の造立である多家神社宝蔵(府中町)の3棟がある。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(建造物)	佛通寺舎摩院地藏堂 附 須弥壇 1基	ぶつとうじがんまいじんじょうどう	1棟	三原市高坂町許山	昭24.2.18	桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、本瓦葺		佛通寺は応永4年(1397)に小早川春平が愚中周及(ぐちゅうしゅうきゅう)を迎えて開いた臨済宗の大寺である。その後、火災が相次ぎ、創建当時の建物は今では禅師の塔所舎摩院だけとなった。地藏堂は応永13年(1406)の建築で、内部に純禅宗様のすこぶる優秀な須弥壇(しゅみだん)を持つ、小規模な禅宗様の仏殿である。現在は内部に木造床が張り巡らされているが、もとは磚敷床(せんじきゆか)で、柱間もかなりの変更がなされているようである。		
国	重要文化財(建造物)	天翠寺塔婆 附 銘札 1枚	てんさいじとうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆(元五重)、本瓦葺		天翠寺は貞治6年(1367)に足利義詮が建て、普明国師を開山とした曹洞宗の大寺である。のち本堂などは雷火で焼失し、この塔だけが残った。塔婆は嘉慶2年(1388)の造立で、元禄5年(1692)上の二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当初のものをよく伝えており、和様を基調に禅宗様が濃厚に入り入れられ、規模雄大で手法もまたすぐれている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	不動院鐘樓	ふどういんしやうろう	1棟	広島市東区牛田新町三丁目	昭27.7.19	桁行三間、梁間二間、白壁塗の袴腰付鐘樓、入母屋造、柿葺		室町時代、永享5年(1433)建立。解体修理の結果、安国寺恵理(えけい)が住持であった天正16年(1588)頃に、修理・移築されたと推定されている。白壁塗の袴腰(はかまこし)付鐘樓で、外観は各部の釣合が整っている。細部は和様三手先(あてまき)の組割(くみわり)を用いているが、軒は二軒雁柱(にけんおうぎばしら)で、隅木(すみぎ)も禅宗様の手法をとっているのは珍しい意匠である。二階の頭貫鼻等には文様(1592～1596)とみえてい手法が混じっている。後補の痕は少ない。内部に銅製梵鐘(重文)を納める。 本動院は、中世、安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが、安国寺恵理が再建に尽力し、現存する建物の多くが恵理によって建てられたといわれる。江戸時代初め(17世紀初頭)に禅宗から真言宗に変わり、寺号も青珍(ゆうちん)が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺納経塔	じやうどじのうきやうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造、宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年(1778)10月、尾道の富商・光阿弥陀仏のために、子息の光阿吉近(こうあよしちか)が建てた。供養塔。光阿弥陀仏は、浄土寺が定証(じやうしやう)によって再興される以前に、現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。 塔身に胎藏界四仏の種字をきざみ、法華経・浄土三部経・梵網経(ぼんもうきやう)などを奉納したものである。基壇に格状間(こうざま)をつけ、塔身の上に高欄を設けるなど整備した形を示すが、堂の上に露盤をおき蓮花・宝珠にしてあることは古調で、大きい基壇とあいまって重厚豪快な感じがある。鎌倉時代(1192～1332)の石造宝塔の中では年代が古く、形もよく整った良品である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じやうどじほうきやういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修(ぎやくしゆ)や光孝らの造善のため、南北朝時代の貞和4年(1348)10月1日に建立された。 みごとな格状間(こうざま)つきの基礎の上を美しい反花(かえりばな)とし、金剛界四仏の種字をきざんだ塔身を安置し、突起には八方天を種字で現している。格状間には造立の趣旨が刻まれている。基壇と塔身の間に受台を入れていることは、伊予や備後南部の宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	宗光寺山門	そうこうじさんもん	1棟	三原市本町	昭28.11.14	四足門、切妻造、本瓦葺		小早川隆景の居城である新高山城(豊田郡本郷町)内の門を移建したと伝えられている。規模の大きい木割の太い四脚門で、基股(かえりまた)などの細部に桃山時代(16世紀末)を思わせる豪快な手法が見られる。 宗光寺はもとは匠真寺と言い、毛利元就が新高山城内に建立したが、後に隆景が三原城へ移った際に隆景によって三原へ移され宗光寺と称するようになったという。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺山門附 棟札 1枚	じやうどじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11(県指定) 昭28.11.14 平6.7.12(露滴庵(附中門)分割)	四脚門、切妻造、本瓦葺、両袖階付		浄土寺の表門で、南北朝時代(1333～1392)に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手になつたか、本堂と同様の規矩と同一規矩もつことは、あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板蓋股(かえりまた)に足利氏の家紋である「二引門」が表されている。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	沼名前神社能舞台	ぬなまじんじゃのうぶたい	1棟	福山市朝町後地	昭28.10.20(県指定) 昭28.11.14	桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、妻入、柿葺、屋根はパネル式		もと伏見城にあった組立式能舞台を水野勝成が福山へ移したと伝えられる。万治年間(1658～1661)、水野氏が神社に寄進し、元文3年(1738)現在のよう固定式とされた。仕口はすべて柿差し込打。屋根はパネル式であり、各部に番号・符号が残るなど、随所に組立式であった当時の様式がみられる。桃山時代から江戸時代初頭(16世紀末～17世紀前半)の他に類例のないものである。		
国	重要文化財(建造物)	米山寺宝篋印塔	べいざんじほうきやういんとう	1基	三原市沼田東町納所	昭31.6.28	高さ2.5m		沼田小早川氏の墓所の北東隅にあり、墓地内ではひときわ大きい石塔である。鎌倉時代、元応元年(1319)「大工念心」によって造られた。温雅の感が美しい意匠であり、鎌倉時代末期(14世紀前半)の宝篋印塔の秀作である。塔身に「大工念心 元応元年己未十一月日 一結衆敬白」の刻銘がある。米山寺は沼田庄地頭小早川茂平が嘉禄元年(1235)に建てた氏寺で、小早川氏歴代の墓(石造宝篋印塔20基)が立ち並ぶ。		
国	重要文化財(建造物)	磐台寺観音堂附 棟札 3枚	ばんだいじかんのんどう	1棟	福山市沼隈町能登原	昭30.9.28(県指定) 昭31.6.28	桁行三間、梁間二間、背面一間、通庇、一重、寄棟造、庇葺おろし、本瓦葺		安土桃山時代の元亀元年(1570)に毛利輝元によって建てられたと伝えられる。阿伏兎(あぶと)岬の高さ10m余の岩頭に建ち、自然と調和して見事な景色をつくりあげている。 禅宗伽藍には珍しい和様で、外観は丹塗(にり)で、内部格天井には彩色で藤井松林が百花園を描いている。当初の平面は正四角形であるが、寛文年間(1661～1673)に堂後方の奥行一間を付け足したという。 ※藤井松林(ふじいしようりん)…江戸時代後期の画家		
国	重要文化財(建造物)	不動院樓門	ふどういんろうもん	1棟	広島市東区牛田新町	昭29.9.29(県指定) 昭33.5.14	三間一戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺		室町時代末期から安土桃山時代(16世紀後半)の頃に建立された門。 禅寺の山門に一般的だった禅宗様の二重門で、上層には十六羅漢像が安置されている。この時代の建物としては、ほとんど和様を交えていないのはかえって珍しい。上層の勾欄(こうらん)は親柱だけ禅宗様の逆蓮柱とし、他は和様である。 善伝による安国寺恵理(えけい)が朝鮮半島から持ち帰った材木で建てたと言い、上層の尾垂木(おだる木)に「朝鮮本文祿三」の刻銘や斗供(とく)と、縁長押などの「朝鮮」の墨書から、一部の材料に朝鮮半島の本を用い、文祿3年(1594)頃に建立したと思われる。ただし、細部にそれより少し滞った室町時代末期の様式手法が見られるので、文祿のは修理かとも思われる。 本動院は、中世、安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが、安国寺恵理が再建に尽力し、現存する建物の多くが恵理によって建てられたといわれる。江戸時代(1603～1867)に禅宗から真言宗に変わり、寺号も青珍(ゆうちん)が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり、「足利尊氏の墓」と称されている。非常に洗練された姿の塔で、各部分の彫成つりあいよくれた引き締まった堅実な姿である。最下層の反花座(かへりはなざ)にある複合の蓮弁及び基礎側面の格狭間(こうざま)は大きくみこことである。塔身には金剛界四仏を種子(しゅじ)で彫し、笠の隅飾はやや外にわたかまき、二弧の内側に八方天の種子をあらわしている。相輪を完備した。南北朝時代(1333～1392)における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西郷寺本堂	さいこうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間、梁間八間、寄棟造、本瓦葺		南北朝時代の文和2年(1353)に二代目住持の託阿(たくあ)が発願して造られた建造物である。角柱上に角材木を置く(け)の高床形式であるが、方三間の内陣の周面を外陣がめぐる形式の平面は浄土教に特徴的で、時宗本堂最古の遺構として貴重である。西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。臨念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	西郷寺山門	さいこうじざんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	様門、本瓦葺		室町時代の貞治年間(1362～68)の建築で、板葺段(かえるまた)や破風などに室町時代の様式がみられる。西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。臨念仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	龜山八幡神社本殿 附 棟札 3枚	たつやまはちまんじやほんでん	1棟	山県郡北広島町新庄字 矢免	昭32.2.5(県指定) 昭37.6.21	三間社流造、銅板葺		戦国時代の永禄元年(1558)造営。内陣の柱に「此宮永禄元年戊午歳建申候、琢融」という墨書銘がある。近畿地方の有名な工匠を招いて建てられたものと思われ、彫刻を主として木割は鎮にみこことである。また、本殿の正面向って左の間の葺段(かえるまた)は、時代特徴をよくあらわし、その変遷を知るうえで好資料である。龜山八幡神社は鎌倉時代末期(14世紀前半)に吉川氏が大郡庄地頭として入封した時、本貫地の駿河国入江庄吉川邑(静岡県)から勧請と言われる。		
国	重要文化財(建造物)	円通寺本堂 附 厨子 1基	えんつうじほんどう	1棟	庄原市本郷町甲	昭33.3.13(県指定) 昭37.6.21	本堂ノ桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、銅板葺 厨子ノ一厨子		戦国時代の天文年間(1532～55)に山内直通が再建したと伝えられる。三間三面臨仏壇付の禅宗様本殿として一応の形を整えている。扉は榎(かまち)の中央に縁線があるもので古式である。厨子もまた整然とした禅宗様の優秀なもので、おそらく当初からのものであろう。 円通寺は、地頭庄(じゆりやう)地頭として鎌倉時代末期(14世紀前半)に入部した山内首藤(やまのうちず)氏が本殿の甲山嶺中腹に建てた菩提寺である。		
国	重要文化財(建造物)	吉備津神社本殿	きびつじんじやほんでん	1棟	福山市新市町宮内字上 市	昭40.5.29	桁行七間、梁間四間、入母屋造、向拜付、檜皮葺		江戸時代初期の慶安元年(1648)福山藩主水野勝成によって建てられたと伝えられる。比較的大きいことと備後・安芸地方によくある「余間造り」の平面を持つことを地方的特色としている。正面に千鳥破風・軒唐破風を持った堂々とした江戸時代初期の建築でありながら、室町の風格と桃山彫刻を具備した優秀な葺段(かえるまた)を備えている。勾欄(こうらん)の擬宝珠(ぎぼし)の刻銘及び文書により慶安元年建立が分かるなど、時代考証の尺度としても価値がある。		関連施設: 備後一宮吉備津神社宝物館 (0847-51-3395)
国	重要文化財(建造物)	旧木原家住宅 附 鬼瓦 1個	きゅうきはらけじゅうたく	1棟	東広島市高屋町白市	昭34.7.15(県指定) 昭41.6.11	桁行12.6m、梁間15.5m、切妻造、一部二階、本瓦葺		江戸時代初期の町屋建築。寛文5年(1665)建築と推定される。表通りに沿って横長に建てられ、正面右側に入口と土間、左側に店と座敷、裏に居住空間が設けられ、土間が表と裏をつないでいる。入口には大戸(おおと)が付付けられ、店の表側には格子戸(こうじど)が入られている。町屋形式の古い形態を保存する数少ない例である。 木原家は西条盆地の東方の白市に居住し、江戸時代(1603～1867)は醸造業や両替商を主とする豪商であった。		
国	重要文化財(建造物)	堀江家住宅	ほりえけじゅうたく	1棟	庄原市高野町中門田字 城山下	昭41.12.5	桁行19.8m、梁間10.5m、一重、入母屋造、茅葺		創建時期は明らかでないが、17世紀後半から18世紀前半とも伝えられる。古い農家の間取であった三間取りの良跡がとれる貴重な遺構であり、古い農家の形態をよく保持した数少ない例である。後年、底割と納戸のあり、それに引き続いて中の中が再度付加されてきていることなど変遷の跡が見えるとともに、素朴さと力強さがある。また釘を使っていないことなど民俗文化財としても貴重な資料となっている。		
国	重要文化財(建造物)	荒木家住宅	あらかけじゅうたく	1棟	庄原市比和町森脇	昭43.4.25	桁行20.6m、梁間10.9m、入母屋造、茅葺		構造及び細部の手法から江戸時代中期、17世紀末から18世紀初めの建築と考えられる。比婆郡高野町の堀江家住宅(重要文化財)と梁の組み方は似ているが部材の形はやや新し。平面は全体の半分を占める土間及びびた上五室からなっていて、その中のたかまは、床を一段高くて神を祀った部屋であり、神官の家としての特性を示している。 荒木家は中世末(16世紀)からこの地へ住み、神官であった。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	林家住宅 主屋 1棟 表門 1棟	はやしげじゅうたく	2棟	廿日市市宮島町	昭53.1.21	主屋ノ入母屋造。妻入。椽瓦及び鉄板葺表門ノ一間葉門		表門に元禄16年(1702)の折鐮札があり、主屋と表門ともに江戸時代(1603～1867)の建物と考えられる。 主屋正面妻には家叉首(さす)に梅鉢懸魚をつけ南側正面の千鳥破風のついた玄関には式台をもうけ、木蓮格子、から懸魚を備えて社家らしい風格を感じる。 表門は小さな葉門で正規の手法で作られている。建築年代も古く、全国的にも数少ない社家の遺物の一つで、屋敷割や石垣などもよく残っている。 林家は古くから飯島神社の神官を勤め、神官団の上層部のひとりであった。		
国	重要文化財(建造物)	旧藤山家住宅	きゅうはたやまげじゅうたく	1棟	三次市三良坂町灰塚	昭53.1.21	桁行15m、梁間9.1m、入母屋造、茅葺		建築年代を示す資料はないが、手法から江戸時代、18世紀中頃の建築と考えられる。平面は整形田開取で、入口を入った左手にかなり広い土間をもち、右手に床上部が連なる。上層柱は適当な間隔で比較的整形に残存しており、それは土間では太い多角形の曲がり材を多用しているが、床上部では整形された籠(かんな)仕上げのものを用いている。美年代はさして古くないが、構造手法に相当古風なものを残しているのがこの家の特徴である。 平成12年(2000)、現在地に移築された。		内部見学は事前に連絡が必要 (三次市教育委員会 電話 0824-64-0082)
国	重要文化財(建造物)	奥家住宅 主屋 1棟 附 本宅普請万覚帳 1冊 土蔵 1棟 附 本宅普請萬覚帳 1冊 附 家相簡図 1枚 宅地 1,889.25平方メートル	おくけじゅうたく	2棟	三次市吉舎町敷地	昭53.1.21 平28.7.25(追加指定)	桁行16.1m、梁間9.2m、入母屋造、茅葺、両面庇付、椽瓦葺、台所部ノ桁行6.3m、梁間10.0m、両下造、両面主要部に接続、椽瓦及び鉄板葺		江戸時代、天明8年(1788)の建築で、建築年代の明確な民家としては数少ないもののひとつである。普請帖(ふしんちょう)と、小屋裏棟末(こやうらむねつか)に棟札が残されている。 間取りが六間並みである形で、規模の大きい当初の形をよく残している。構造は内法をすべて差懸居でため、柱数も少ないと等な構である。主屋内に入ると見応えがあるのは土間上の梁組みで、太い梁が互いに重なりおよび、頑丈に組み上げられた姿は圧巻である。建築年代も明らかである。この地方の民家を代表するものである。		
国	重要文化財(建造物)	旧真野家住宅	まのやしのけじゅうたく	1棟	三次市小田幸町大平 広島県みよし風土記の丘構内	昭49.4.25(県指定) 昭55.1.26	木造平屋、入母屋造、平入り、茅葺、桁行14.9m、梁間8.9m		構造がきわめて古く、各所に古式を残しており、江戸時代、17世紀後半頃または更にさかのぼるとの説もある。妻構は梁行が二通間で、二ヶ所だけ梁受桁を用いて柱を抜いているほか、すべての柱が原型どおり整然と並んでいる。奥のいでいと言われる室にはこの時代としては珍しい床の間があった痕跡がある。 この建物とは世羅郡世羅町戸建てしていたのをみよし風土記の丘構内に移築したものである。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
国	重要文化財(建造物)	桂濱神社本殿 附 宮殿 3基 棟札 1枚	かつらはましんじやほんでん	1棟	呉市倉橋町宇宮の浦	昭56.11.6 昭57.6.11	本殿ノ三間社流造、こけら葺 宮殿ノ各一間社流見世棚造、板葺		戦国時代、文明12年(1480)再建の神社建築。桂が浜に面した小高い丘陵上に建っている。 前室付の三間社流造、こけら葺で、庭(前室)の三方に縁を巡らす。身舎(もや)、庇はいずれも丸柱からなり、身舎、庇とも板張の床で、身舎は一段高くなっている。 身舎正面に祭壇を構え玉殿三棟を安置している。この玉殿は一間社見世棚造(いつけんしやみせだなくり)、薄長板葺の珍しいもので、本殿建立と同時期のものと考えられる。 本殿は地方色が濃厚な建物で、全体に木細く、簡素な作りではあるが意匠的にも優れた建物である。		
国	重要文化財(建造物)	竹林寺本堂 附 厨子 1基 棟札 1枚	ちくりんじほんどう	1棟	東広島市河内町入野	昭42.5.8(県指定) 昭57.6.11	本堂ノ桁行三間、梁間三間、一重、寄棟造、向拝一間、こけら葺 厨子ノ桁行一間、梁間一間、入母屋造、妻入、板葺		標高535mの墓山(たかむらやま)山頂に建つ16世紀の建物で、永正8年(1511)に屋根や柱組みが造られた後、天文14年から17年(1533～1536)須弥壇などを造って完成した。須弥壇腰板裏に天文14年の墨書があり、高麗や入野の木工が工事にあたったことが分かる。 規模の大きな方三間の堂で、軒先など当初の材がよく残されている。木割が太いので比較的しっかりした感がある。16世紀の瀬戸内地方の寺院建築の好例である。 竹林寺は真言宗寺院で、中世には平賀氏の祈願寺のひとつであった。		
国	重要文化財(建造物)	春風館頼家住宅 ※頼は旧宇 主屋(附幣串2本) 1棟 長屋門 1棟 裏座敷(附 裏座敷建築諸筆記1冊) 1棟 納戸蔵(附 棟札1枚、幣串1本、納戸蔵并隣屋諸請帖1冊) 1棟 米蔵(附幣串1本) 1棟 附 土庫 4棟 臼場 1棟	しゅんぷうかんにらいけじゅうたく	5棟	竹原市竹原町	昭62.3.30(県指定) 昭63.12.19	主屋ノ木造、切妻造、本瓦及び椽瓦葺		春風館頼家住宅と復古館頼家住宅は江戸時代末期から明治時代の住宅で、竹原市竹原地区重要伝統的建造物群保存地区内にある。 春風館は、頼山陽の叔父で広島藩の儒医であった頼春風の居宅として建てられた。現在の主屋は安政2年(1855)に再建されたものである。座敷構は道路に面して長屋門を建て、その奥に主屋を配して、武家座敷に似ている。主屋の背後には裏座敷、納戸蔵、米蔵などの附属屋をもち、主屋の座敷の前には飛石や手水鉢を配した庭をつくるなど、規模の大きな上層の町屋の特徴をよく示している。		
国	重要文化財(建造物)	復古館頼家住宅 ※頼は旧宇 主屋(附幣串1本) 1棟 表屋及び玄関(附棟札1枚、幣串1本、酒場改築普請帖1冊) 1棟 米蔵(附幣串1本) 1棟 臼場(附幣串1本) 1棟 附 土庫 3棟	ふっこかんにらいけじゅうたく	4棟	竹原市竹原町	昭62.3.30(県指定) 昭63.12.19	主屋ノ二階建、切妻造、椽瓦葺、差屋造		復古館は、春風館の西隣にある。江戸時代後期の文人、頼春風の孫の三郎が分家独立して現在の座敷を構え、酒造業や製塩業を営んだ。 主屋は安政6年(1859)の建築である。春風館と異なり、道路に面して表屋(店舗)、その奥に主屋を配し、両者を玄関で接続する。いわゆる表屋造で、大きな商家にみられる形式になっている。主屋、表屋の西側や背後に臼場、米蔵などの附属物が建っており、酒蔵などの一部は現在なくなっている。主屋の座敷の前は庭園をつづけている。復古館は建物の質がよく、家業を反映して表屋造となっており、武家屋敷風の構えの春風館と好対照をなしている。		
国	重要文化財(建造物)	吉原家住宅 主屋(附便所1棟) 1棟 納屋(附棟札1枚) 1棟 附鎮守社 1棟 家相図 5棟	よしはらけじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30(県指定) 平3.5.31	主屋ノ桁行20.1m、梁間9.1m、寄棟造、茅葺、西面下層附葺、本瓦葺 納屋ノ桁行9.9m、梁間4.0m、切妻造、本瓦葺 鎮守社ノ一間社流見世棚造、鉄板葺		向島の家業であった吉原家の住宅で、周家に伝わる折鐮札などから江戸時代、寛永12年(1635)の建築と思われる。規模の大きい整形六間取りの土間を持ち武家の威風凛々たる建物である。土間の中央には柱を建てず、二重の梁組で大きな空間を構成しており、当時としてはかなり上等な構造である。土間間に建具はなく、ごく初期段階では土間に格子(こうし)戸や格子窓、その上部に小壁もない時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていると想像され、瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	太田家住宅 主屋 1棟 炊事場 1棟 西蔵(附棟札1枚) 1棟 釜屋 1棟 南保命酒蔵 1棟 北保命酒蔵(附棟札1枚) 1棟 東保命酒蔵(附棟札1枚) 1棟 北土蔵 1棟 新蔵 1棟 附 茶室 1棟 高塀 1棟	おおたけじゅうたく	9棟	福山市朝町朝	平3.5.31	主屋ノ桁行14.7m、梁間12.9m、二階建、南面入母屋造。北面切妻造。東南西各面庇付。本瓦葺。 炊事場ノ桁行4.1m、梁間6.0m、北面庇付。二階建、南面入母屋造。北面切妻造。本瓦葺。 西蔵ノ土蔵造、桁行7.3m、梁間6.0m、二階建、切妻造。本瓦葺。 釜屋ノ土蔵造、桁行6.0m、梁間5.0m、二階建、切妻造。本瓦葺。 南保命酒蔵ノ土蔵造、桁行13.8m、梁間5.9m、二階建、切妻造。妻入。本瓦葺。 北保命酒蔵ノ土蔵造、桁行15.1m、梁間5.9m、二階建、切妻造。本瓦葺。 東保命酒蔵ノ土蔵造、桁行14		竊の名産品・保命酒の製造を行っていた中村家の旧宅で、後に太田家の所有となった。江戸時代、18世紀後半から19世紀前期までの建物で構成される。敷地の東西隔に南向きに主屋が建ち、通の沿いに敷地を囲むように附蔵屋が建ち、主屋の北側に新蔵が建ち、その間を高塀でつなぎ、南側は主屋の西に炊事場、湯殿が、西側は南から西蔵、釜屋、土庫、南保命酒蔵、北保命酒蔵が、北側には北保命酒蔵と北土蔵が並び、敷地を囲むように土蔵が並び並ぶ姿は壮麗で、江戸時代中期から後期(17世紀後半～19世紀前半)にかけて酒造業で栄えた商家の構えをよく残しており、竊の歴史的町並みを成す町屋として貴重な民家である。		内部公開(有料、問合せ先:084-982-3553)
国	重要文化財(建造物)	太田家住宅朝宗亭 主屋 1棟 門屋 1棟 離屋 1棟	おおたけじゅうたくちようそうてい	3棟	福山市朝町朝	平3.5.31	主屋ノ桁行13.8m、梁間10.0m、一部二階、西面切妻造。東面入母屋造。妻入、南東北各面庇付。本瓦葺。 門屋ノ桁行5.9m、梁間2.6m、二階建、切妻造。西面庇付。本瓦葺。 離屋ノ桁行6.0m、梁間7.9m、二階建、入母屋造。北面切妻造。西面庇付。本瓦葺。		太田家住宅朝宗亭は、本宅と道路をはさんで東側に建てられた別宅で、藩主の来訪の際に使用されていた。敷地の西側道路に面して門屋と離屋が並び、門屋の奥に主屋が建てられている。主屋、門屋とも江戸時代、享和元年(1801)頃の建設と考えられる。主屋の裏と前は港に面した庭となっており、前庭が開けている。座敷などの造りも良く、本宅とともに竊の町並みの主要部を構成する町家として価値が高い。		
国	重要文化財(建造物)	國前寺 本堂 1棟 庫裏 1棟	こくぜんじ	2棟	広島市東区山根町	平5.12.9	本堂ノ桁行24.0m、梁間14.0m、二重、寄棟造。唐破風造向拝一間、背面仏閣突出。桁行5.3m、梁間9.8m、一重、寄棟造。本瓦葺。 庫裏ノ桁行17.7m、梁間13.2m、一重、切妻造。妻入、東側面庇付。本瓦葺。正面庇。本堂間廊下及び正面東方土庫附属。		本堂は寛文11年(1671)建立。寄棟造りの二重屋根で、向拝(こうはい)は唐破風造り、鏡(こころ)置き屋根をつつ仏閣(ぼんかく)に突出している。全体的には住宅風な悪意で造られている。庫裏(くら)は切妻造りに破葺きの屋根をもち、破風を漆塗で塗り込められている。 いづれも広島藩の日蓮宗寺院の中でも大規模なもので、藩を代表する近世の社寺建築として価値が高い。 國前寺は、暦応3年(1340)日蓮宗寺院・曉忍寺として開かれたが、明暦2年(1656)、広島藩二代藩主の浅野光胤(あさののみつあき)夫人の誓願寺(ぼんがい)となり、現在の寺名となった。 ※経葺(しろうき)…屋根の途中で葺がつかず葺方		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺 方丈 1棟 唐門 1棟 庫裏及び客殿 1棟 宝庫 1棟 裏門 1棟 露滴庵 1棟 附中門 1棟 棟札 2枚 旧食堂厨子及び須弥壇 1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26(県指定) 平6.7.12	方丈ノ桁行16.0m、梁間13.0m、一重、寄棟造。本瓦葺。 唐門ノ一間向唐門。本瓦葺。 庫裏及び客殿ノ角屋付き庫裏と客殿の複合建築。切妻造。本瓦葺。 宝庫ノ土蔵造。桁行6.0m、梁間3.9m、二階建、切妻造。本瓦葺。 裏門ノ長屋門。桁行14.9m、梁間5.0m、切妻造。本瓦葺。 露滴庵ノ三畳台目茶室。水屋及び西屋・四畳半の勝手よりの一重、入母屋造。茅葺。		浄土寺は鎌倉時代(1192～1332)に始まり、尾道を代表する古刹(こさつ)の一つである。境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。 庫裏(くら)及び客殿は享保4年(1719)建立。方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。 露滴庵(ろてきあん)は、三畳台目の奥に庫裏と後補の勝手を付属させた茶室である。豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝え、文化11年(1814)向島の天満屋が浄土寺に寄進したといわれる細部(おりべ)好みの風格のある建物である。 唐門は鈴ヶヤキ作りの小さな一間の向唐門で正徳2年(1712)建築。宝庫は二階建て土蔵で、宝暦9年(1758)建築。裏門は長屋門で18世紀後頃の建築である。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	旧呉鎮守府司令長官官舎(呉市入船山記念館) 洋館1棟、和館1棟	きゅうくれんしんじゅうふしれいちようかん らんかんしゃくれいしうふねやまきねんかん	2棟	呉市幸町	昭43.1.12(県指定) 平10.12.25	洋館ノ木造、建築面積223.0㎡、一階建、スレート葺。 和館ノ木造、建築面積304.1㎡、一階建、檜瓦葺。		明治38年(1905)の建築。木造平屋建てで、和館と洋館を接合した建物である。表に洋館、奥に和館があり、洋館正面中央に門子と玄関、玄関奥に広間公室がある。 入船山はゆるやかな丘陵地で、旧海軍呉鎮守府施設にあり軍政会議所が建てられた。明治38年(1905)6月2日の地震の後の現存の建物が発見され、以後、歴代の呉鎮守府司令長官官舎として使用された。 戦後、和館は改造されたが、洋館はよく残されており、明治時代末期の建築技術を示す貴重な例となっている。		関連施設:呉市入船山記念館(0823-21-1037)
国	重要文化財(建造物)	本庄水源地堰堤水道施設 堰堤(堤体本体、取水塔よりの)1基、丸井戸1基、第1重水井(錆鉄製配管、仕切2基を含む)1基、階段1基	ほんじょうすいげんちえんしういすいどうしせつ	1構	呉市焼山北三丁目 水道用地1542番1の一部	平11.5.13	重力式コンクリート造堰堤		呉へ給水するため海軍が建造した水道施設。大正元年(1912)着工、同7年(1918)2月に完成した。完成当時は東洋といわれた大規模なもので、本庄水源地の完成により、軍用水の余りが呉市に分けられ、市民への水道給水が始められることとなった。 緩やかなカーブを描く堰堤の表面は、現場で採集された花こう岩の切石で覆われ、厚重な印象を与えている。 当時の土木技術の水準を示すとともに、完成当時の関連施設が残されている貴重な例である。		
国	重要文化財(建造物)	福成寺本堂内厨子及び須弥壇 附 鬼板 1点 板敷(応永二十一年)10枚	ふくじょうしほんどうないずいしおよびしゆみだん	1具	東広島市西条町下三永字西谷	平12.12.4	入母屋造、妻入り。一間厨子、禅宗様須弥壇		須弥壇とその上に置かれた厨子1具で、厨子内部には福成寺本尊の千手観音菩薩が安置されている。15世紀前期に造られたと推定される。 厨子は入母屋造、庇葺。妻入りの宮殿(くうでん)形式であり、また、垂木(たるき)木口(こぐち)の飾金具に、瀬戸内西部地方の大守護大名・大内氏の家紋である唐花菱紋(からはなびしもん)があり、その形が応永27年(1420)大内盛見(おおうちもりはる)の寄進の豊前国(大分県)宇佐八幡宮所蔵の御興の唐花菱紋飾金具に酷似していることから、当時の大内氏当主・大内盛見が造園して造られたと考えられる。 なお、附の板敷は応永21年(1414)頃の製作である。 福成寺は東広島市の東部端に位置する真言宗寺院である。中世には西条盆地を政治的拠点とした大内氏により、この地域の宗教的拠点として保護された。		関連施設:福成寺宝物収蔵庫(082-426-0523、082-423-3486)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考	
国	重要文化財(建造物)	旧澤原家住宅 主屋 1棟 前座敷 1棟 表門 1棟 元蔵 1棟 三角蔵 1棟 三ツ蔵(上蔵、中蔵、下蔵) 3棟 新蔵 1棟 附 中門 1棟 社 1棟 土塀 1棟 塀 1棟	きゅうさわはらけしゅうたく	9棟	呉市長ノ木町	平17.7.22	主屋/桁行17.8m、梁間15.4m、二階建、西面入母屋造、東面切妻造葺棟、妻入、四面庇付、北面廊下、南東隅切妻所附属、本瓦・椽瓦及び鉄板葺、西面突出部 桁行6.7m、梁間4.8m、入母屋造、併所及び門廊附属、椽瓦葺 前座敷/桁行18.3m、梁間8.7m、入母屋造、東面便所、南面門廊、北面渡廊下附属、西面突出部、桁行3.9m、梁間5.2m、入母屋造、北面突出部 桁行0.9m、梁間5.8m、両下造、椽瓦及び鉄板葺 表門/一間薬師門、切妻造、椽瓦葺、左右屋根塀、南方築地塀附属 元蔵/土蔵造、桁行11.5m、梁間4.8m、二階建、切妻造、本瓦葺 三角蔵/土蔵造、桁行5.5m、梁間3.8m、二階建、切妻造、西面及び北面庇附属、鉄板葺 三ツ蔵/上蔵、中蔵、下蔵よりなる上蔵、土蔵造、桁行9.5m、梁間4.8m、二階建、切妻造、本瓦葺 中蔵、土蔵造、桁行6.7m、梁間4.9m、二階建、切妻造、東面前室、桁行5.9m、梁間2.6m、片流れ、本瓦葺 下蔵、土蔵造、桁行9.5m、梁間4.8m、二階建、切妻造、本瓦葺 新蔵/土蔵造、桁行7.6m、梁間4.8m、切妻造、本瓦葺 附・中門 1棟 一間薬師門、切妻造、潜戸付、椽瓦葺 ・社 1棟 一間社流造、椽瓦葺 ・土塀 1棟 三角蔵東方折曲り延長27.4m、椽瓦葺 ・塀 1棟 主屋北方5.9m、椽瓦葺 宅地 2222.88㎡ 地域内の石段、石垣を含む			澤原家は、屋号を澤田屋と称した商家で、代々庄屋などの要職を務めた。 宅地は、街道を挟んだ東と西に構える。主屋等は東側にあり、主屋南に前座敷、表門、三角蔵、北に元蔵を配する。街道の西側には三ツ蔵と新蔵がある。建資年代は主屋が享和6年(1756)、前座敷と表門が文化2年(1805)、三ツ蔵が文化6年(1805)、元蔵が安永4年(1833)である。 主屋は、主体部が妻入の二階建て、西面に下屋を廻した形式である。前座敷は藩主の休憩所、宿所として建てられたもので、御成間がある。また、三棟並列型の三ツ蔵は、類例が少ない特徴ある建物である。旧澤原家住宅は、中国地方を代表する大規模商家の一つとして重要である。		
国	重要文化財(建造物)	広島平和記念資料館	ひろしまへいわきねんしりょうかん	1棟	広島市中区中島町	平18.7.5	鉄筋コンクリート造、二階建、一部三階、高さ16.8m		広島平和記念資料館は、平和記念公園の中心施設である。 案設計は丹下健三(たんげけんぞう)が行い、昭和26年2月に着工し、昭和30年8月24日に開館した。 広島平和記念都市建設法に基づき最初に着手された平和記念施設で、都市と一体化した建築物として構想されており、ピロティの造形やルーバーの意匠などに丹下健三の建築的特徴がよく示されている。また、国際的に高い評価を受けた最初の戦後建築であり、丹下健三の出発点となる建築として重要である。		関連施設: 広島平和記念資料館 (082-241-4004)	
国	重要文化財(建造物)	世界平和記念聖堂	せかいへいわきねんせいどう	1棟	広島市中区備前	平18.7.5	三廊式教会堂、鉄筋コンクリート造、地上三階、地下一階、銅板葺、塔屋付		世界平和記念聖堂は、原爆犠牲者を弔い、世界平和の実現を祈念する場として企図された教会堂で、被爆都市広島における戦後復興建築の先駆的建築である。 設計は村野藤吾(むらのとうご)が行い、昭和25年(1954)8月6日定礎、同29年(1950)8月6日に献堂された。 堂、塔、小聖堂等の構成や重畳の比例も優れており、鉄筋コンクリートの柱梁フレームにセメントモルタルレンガを充填する新しい手法により、日本的性格と記念建築の荘厳さを持たせつつ、戦後の新しい時代に対応した新建築を表現したことで評価される。また、戦後村野藤吾の宗教的空間や公共的建築の原点となる作品としても重要である。			
国	重要文化財(建造物)	常務寺 本堂1棟 観音堂1棟 鐘樓堂1棟 大門1棟 附 墓処門1棟	じょうじょうじ ほんどう かんのどう かねつどう だいもん	4棟	尾道市西久保町	平19.12.4	本堂 桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺 観音堂 桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺 鐘樓堂 桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、本瓦葺 大門 四脚門、切妻造、本瓦葺 附・墓処門 一間薬師門、本瓦葺		常務寺は、鎌倉時代後期の正応年間(1288~93年)に、時宗二代、真教によって創建されたと伝えられる寺院である。本堂は室町中期、観音堂は室町後期、鐘樓堂は江戸前期、大門は室町前期の建築とみられる。それぞれの建物は、後世の改修を受けながらも多くの当初材を残しており、往時の姿をよく伝えている。 本堂は、外観を和様、内部構成を禅宗様とし、内陣・外陣と協隆を一体的空間とするなど、中世時宗本堂の特徴をよく表している。また大門は、現存する常務寺の建造物のなかでは最も高く、その重厚な構えは当時の寺格の高さを体現している。観音堂や鐘樓堂も、各時代の尾道周辺地域の意匠的特徴を備えており、当地域における建築文化の様相を示す貴重な遺構である。 中世時宗寺院は全国的に遺存数が少なく、そのなかでも室町時代の遺構が3棟も残っている例は希少である。また、室町前期から江戸前期にわたって建てられた諸堂は、それぞれの時代的・地域的特徴をよく備えており、時宗寺院の加層構成の歴史的展開を理解する上で、学術的な価値が高い。		関連施設: おのみち歴史博物館 (0848-37-6555)	
国	重要文化財(建造物)	紅葉谷川庭園砂防施設 本堂 観音堂 鐘樓堂 大門	もみじだにがわいえんさぼうしせつ	1所	廿日市市宮島町	令和2年(2020)12月23日	石造及びコンクリート造、延長688.2m	延長688.2m	弥山から厳島神社の背後に流れくだる紅葉谷川に架かる。昭和20年の枕崎台風で被災した「史蹟名勝厳島の災害復旧事業として、昭和23年に着工、25年に竣工した。 砂防と庭園の専門家の協働により、土石流によって堆積した巨石を巧みに利用しながら、紅葉の名所として知られる紅葉谷公園の風景や厳島の歴史の風致の調和が図られ、砂防施設である終戦直後の混乱期に、国及び地方政府と連合国最高司令官総司令部が連携して実現した。文化財の災害復旧事業としても貴重なものである。なお本件は、西海橋と並び戦後土木施設として初めての重要文化財指定である。		関連施設: 宮島歴史民俗資料館 (0829-44-2019)	
国	重要文化財(建造物)	旧広島陸軍被服支廠倉庫施設 10番庫 11番庫 12番庫 13番庫	きゅうひろしまりくぐんひんくししょう そうこしせつ	4棟	広島市南区出沙二丁目	令和6年(2024)1月19日	柱や梁、スラブなど主な構造を鉄筋コンクリート造(そうじ)とし、外壁などを煉瓦造(れんが)そうじとする		日露戦争後、陸軍における兵站施設の充実のため大正3年に建設された。陸軍本省が設計を掌り、陸軍大臣の令達により第五師団が実施設計と工事を行った。柱や梁、スラブなど主な構造を鉄筋コンクリート造(そうじ)、外壁などを煉瓦造(れんが)とする希少な建造物で、鉄筋コンクリート造として現存最古級、特異な形状の鉄筋を用いるカーブス鉄筋コンクリートの遺構としても希少。基礎に場所打ちコンクリート杭の噴出で形するコンクリート杭を採用し、屋根はモルタル製の椽に引掛椽瓦(ひっかけがら)を葺くなど、先駆的な技術を用いる。戦後後に臨時教護所となり、以降も継続して使用されてきた被爆建物である。旧陸軍被服廠の関連施設のうち、現存唯一の遺構としても歴史的に価値が高い。		(参考URL) https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hihukushisyu/	

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	旧大浜崎通航海流信号所施設 通航信号塔 昼間潮流信号機 夜間潮流信号塔(大浜崎灯台) 附・園障(上段・下段) 検潮器浪除塔 附・旗竿 石壇(上段・中段・下段)	きゅうおいはまさきつこうちょうりゅうしんごうしよせつ つうこうしんごうとう ひるまちょうりゅうしんごうき やかんしやうしんごうとう(お おはまさきとうだい) けんちやうきなみよけとう	1棟3基	尾道市因島大浜町	令和6年(2024)8月15日			瀬戸内海の狭水道・布刈瀬戸に面した因島の北東端に位置する。航行船舶に交通状況や潮流の方向を告知するための設置した通航海流信号所施設。明治43年の設置時に、通航信号塔及び昼間潮流信号機、検潮器浪除塔を新築し、明治27年建設の灯台を転用して夜間潮流信号塔とした。通航信号塔は屋根上に3つの角塔を並び、木板で○△□の記号を表示して対向船舶の位置を知らせた。現存唯一の木造信号塔として貴重。夜間潮流信号塔は信号所の停止後、灯台として再度点灯した。近代交通標識の主要な施設が集約された本施設は、船舶の安全航行を支えた施設群として近代海上交通史上、価値が高い。		
国	重要文化財(絵画)	絹本紺地金彩弥陀三尊来迎図	けんぽんこんぢきんさいみださんぞ んらいこうず	1幀	廿日市市宮島町	明32.8.1	絹本紺地金彩	縦69cm、横36cm	来迎図とは、往生者を浄土へ引接(いんじよう)する阿弥陀等の姿を描いたもので、浄土教の影響により平安時代中期(10~11世紀)以降に盛行した絵画である。 本図は室町時代(1333~1572)の作で、笠後光(かきごう)を背負った立姿の阿弥陀三尊来迎図である。各尊とも踏割蓮華座(ふみわりれんげざ)に立ち、右斜めから雲に乗って飛来する様を描いており、肉身は金泥塗で、着衣は敷金(きりかぬ)で雷文・七宝文など美しく繊細な装飾を施している。背光は装飾的に真正面から描かれている。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色大通禪師像 附 紙本墨書大通禪師消息1幅(丁亥四月一日トアリ) 紙本墨書大通禪師消息1幅(十二月十五日トアリ)	けんぽんちやくしよくだいつうぜんじ ごう	1幅	三原市高坂町許山	明43.4.20	絹本着色	縦103cm、横41cm	大通禪師息中周及(くちゅうしゅうきゅう)は、室町時代(1333~1572)の禅僧で美濃(みの、現在の岐阜県)の人。はじめ京で夢窓疎石などについて修業したが、五山の禅風にあきたらず、中国の元(げん)に渡って空山の仏通禪師の法嗣をうけ、帰朝して五山の外にあって清新な茶風をおこし、応永16年(1409)87歳で没した。 この画像は禅僧の肖像画すなわち頂相(ちやうさう)であり、小早川春平が描いた像に、周及び贊を書いて修業旨伝の証としたもので、脱俗ひょう逸の禅師のすがたを目のあたりに見るようである。 附の墨蹟(ぼくせき)は、応永14年(1407)周及晩年の筆で、病僧周及と署名がある。同じ附の消息は、応永15年(1408)京で将軍足利義持(在任1394~1423)に教えを説いたころのものと思われる。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色小早川隆景像 文禄三年ノ賛アリ	けんぽんちやくしよくこばやかわたか かけぞう	1幅	三原市沼田東町納所	明43.4.20	絹本着色、軸装	本絹縦104.7cm×横42.2cm	安土桃山時代(1573~1602)の文禄3年(1594)に描かれた小早川隆景の肖像(しやうぞう)。京都大徳寺の隆頭(たつちゆう)黄梅院の玉仲が贊を記している。中宮(ちゆうけい)を持ち黒の袍(ほう)をつけて座した東帯の姿である。 この画を伝える米山寺(べいざんじ)は小早川氏の氏寺であった。 ※肖像(しやうぞう)…生前に描かれた肖像画。 ※小早川隆景(1533~1597)…毛利元就の三男、小早川氏の養子となり、後、毛利氏領国支配の一翼を担った。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぽんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明45.2.8	絹本、八相涅槃図	縦152.4cm、横140.7cm	涅槃図は、釈迦の入滅つまり涅槃の態様を描いた図で、涅槃会(ねはんえ)の本尊として用いられたため、遺品は11世紀から鳥羽の数が次第に増加しその形状も横長構図から縦長構図に推移している。 本品は、ほぼ正方形の形状をした鎌倉時代、13世紀中頃の作である。元は大坂の神楽山寺に伝来したとされている。 八相涅槃図と称され、釈尊のこの世における主要な事跡八種を入涅槃会を中心に構成した図である。浄土寺本(ま)では八相を別の区画の中に描いているが、この図では区画を設けず配置しており、明恵上人作の涅槃講式の説と一致し、宋、元の涅槃図の影響を受けて成立したと推定される。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	紙本着色三十六歌仙切 佐竹家伝来	しほんちやくしよくさんじゅうろっかせ んざんれ	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.5.6	紙本、幅仕立	縦35.5cm、横78.2cm。	鎌倉時代(1192~1332)に流行した歌仙絵巻の一部分である。元来上下2巻であったが、京都賀茂神社から佐竹家に移管された際、1人ずつ切りはなし掛幅仕立とした。類品中でも最も傑出したもので、書は京極良経(きょうごくらよつね)。絵は藤原信実(ふじわらののぶざね)の筆になると伝えられる。 本寺所蔵の貫之(つらゆきの)書部分は、室町時代(1333~1572)に補筆されたものである。 三十六歌仙とは、平安時代中頃(10世紀頃)に藤原公任が選んだとされる代表的歌人36人のことである。 ※藤原信実(1177?~?)…鎌倉時代の絵師・歌人 ※紀貫之(868?~945?)…平安時代初期の歌人		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色山姥図 長沢声雪筆	けんぽんちやくしよくやまうばのず	1面	廿日市市宮島町	昭31.6.28	絹本着色	縦150cm、横83cm	江戸時代後期、寛政9年(1797)作の長沢声雪(ながさわうせつ、1755~1799年)の画である。近松村左衛門の浄瑠璃(じようり)「福山姥」(おなやまうば)から面題をとり、随怪な老婆を迫力のある筆致で描いた産雲晩年の傑作である。 産雲は広島地方に遊び、寛政6年(1794)の紀年のある「絹本淡彩宮島八景図」(重文)など多くの作品を残している。本図も広島滞留時の作品で、類裏の寄進銘によると、寛政9年5月に、広島町人三国屋栄治郎他9名が神社に奉納したことが記されている。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色千手千眼観音像	けんぽんちやくしよくせんじゆせんが んかんのんぞう	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭35.6.9	絹本着色	縦124cm、横54cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。千手観音の図像のほとんど唯一といってよい実例で、正確に千臂(ひ)千眼が描かれている。おそらく鎌倉時代初期、13世紀に日本列島にもたらされた中国の宋代の原本を、忠実に模写したものであろうかと思われる。筆法の厳格さと構図の巧妙さは類例のないうすくした作品と言える。 千手観音の千とは無量と円満の意味であり、その造像にあたっては、十八や十四に略して描られ、千手の実例は唐招提寺に見られるのみである。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図 左右下の各縁に涅槃の諸相がある 附 旧軸木 1本 文永十一年粉河寺僧随覺房云々の記がある	けんぽんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市東久保町	昭43.4.25		縦174.5cm、横133.5cm	鎌倉時代、文永11年(1274)製作。 本図のように涅槃に關係の深い多(おほく)の説話を図のまわりに廻らしている例は少ない。図の左側八段には主として涅槃前の事蹟を、右側には涅槃後摩那夫人に対する再生説法の場面を中心に描いている。 本図は古典的涅槃図の構成を脱して次第に数多くの高僧を描きこむ過程を示している点にも注目され、人物描写にも新派(しんと)の宋画の筆(ぼく)とりを用いている。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(絵画)	紙本白描遊行上人絵巻第二、第五、第六、第八	しほんはくびょうゆぎょうしょうにんえ	4巻	尾道市西久保町	昭53.6.15	巻第二／本紙々継24枚、詞4段、絵4段 巻第五／ 巻第六／本紙々継19枚、詞4段、絵3段 巻第六／本紙々継17枚、詞2段、絵1段 巻第八／本紙々継24枚、詞3段、絵3段	縦30.2cm 長さ／巻第二1,070.5cm、第 五920.0cm、第六861.5cm、第 八1,202.0cm	南北朝時代(1339～1392)の頃の作と考えられる。 時宗の一連関係の伝記絵巻は、聖戒編の「一連聖絵十二巻」と宗俊編「遊行上人絵十巻」の二系統が伝わっているが、本品は一連と他阿の伝記をあらわした宗俊系統の、全巻白描の画法による珍しい絵巻である。特に、技法として新しく渡来した水彩画の手法と大和絵との融合をはかった画風は独特である。 ※白描…絵の技法の一つ。墨線と墨の濃淡で表現する。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色両界曼荼羅図 附、旧軸木、2本 文保元年二月益円の銘がある	けんぼんちゃくしよくりょうかいまん だらす	2幅	尾道市東久保町	昭53.6.15	胎藏界／面絹四副一鋪 金剛界／面絹四副一鋪	胎藏界／縦263.0cm、横 183.5cm 金剛界／縦251.0cm、横 185.0cm 旧軸木／軸長各184.0cm、軸 径各5.0cm	鎌倉時代の文保元年(1317)の作。 両界曼荼羅図で、描写は伝統的な手法により、重厚な筆致と鮮やかな彩色で、きわめて精緻に描かれている。諸尊像には補筆や補彩がなく、描衣具や八双金具は当初のもので、軸木に墨書で「文保元年丁巳二月四日」の銘がある。 当時の曼荼羅の原形を伝える貴重な資料である。鎌倉時代末期の仏画で年紀のあるものが少ないことから考えると、制作年代が明確であり、基準作例としての価値は大きい。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(絵画)	紙本墨面淡彩四季山水図 六曲屏風	しほんぼくめんたんさいしきさんすい ず ろうきよびょうぶ	1双	甘日市市吉和 ウッドワ ン美術館	平12.12.4	紙本墨面淡彩、六曲一雙、各扇紙継5枚	各縦150.4cm、横347.0cm	室町時代中期(15世紀前半)の画僧・周文(しゅうぶん)の作。 六曲一雙の屏風に四季の移り変わりを描き出している。風景画の様式が定型化される狩野派以前の画風を伝える、美術史的にも貴重な作品である。 ※周文(生没年不詳)…京都相国寺の僧侶で画家。雪舟に影響を与えたとされる。		関連施設:ウッドワン美術館 (0829-40-3001)
国	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだにらいりやうぞう	1躯	甘日市市宮島町	明32.8.1	寄木造、漆箔	像高75cm 台座高さ49cm、光背高さ96 cm、厨子高さ178cm、幅 70cm。	光明院本尊で、来迎印を結んだ阿彌陀は、踏割蓮華座(ふみわりれんげざ)に立ち、迦陵(かりょう)、須伽(びんが)を左右に、笠後光(かさごこう)を背負い、雲に乗って来迎する形を示している。漆箔で玉眼入り、戴金(かりがね)彩色の精巧な作品で、大形の螺髪(らまつ)や衣文の様子から見て鎌倉時代末期(14世紀前半)の製作と思われる。 光明院は、戦国時代の天文年間(1532～1554)に以上八上人が開いた浄土宗寺院。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿耨尊者立像	もくぞうあなんそんじやりやうぞう	1躯	甘日市市宮島町	明32.8.1	寄木造、彩色	像高91cm	大願寺のこの仏像は木造釈迦如来坐像(伝僧行基作)、木造迦葉尊者立像(ともに重文)と一具である。江戸時代までは嚴島神社の大経堂本尊であったもので、阿耨尊者立像は動きの多い衣をまとい、岩座に立ち合掌している。銅製耳輪は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)の作。		
国	重要文化財(彫刻)	木造迦葉尊者立像	もくぞうかしやうそんじやりやうぞう	1躯	甘日市市宮島町	明32.8.1	寄木造、彩色	像高91cm	大願寺のこの仏像は木造釈迦如来坐像(伝僧行基作)、木造阿耨尊者立像(ともに重文)と一具である。江戸時代までは嚴島神社の大経堂本尊であったもので、迦葉尊者立像は動きの多い衣をまとい、手のひらを組み合わせ一歩足を踏み出す。鎌倉時代末期(14世紀前半)の作。		
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像(伝僧行基作)	もくぞうしゃかにらいぞう	1躯	甘日市市宮島町	明32.8.1	寄木造、彩色	像高85cm	大願寺のこの仏像は木造阿耨尊者立像・木造迦葉尊者立像(ともに重文)と一具である。江戸時代までは嚴島神社の大経堂本尊であったもので、木造釈迦如来坐像は玉眼入り像である。中尊釈迦は衣文などにやさやかな作品を示す。鎌倉時代末期(14世紀前半)の作。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像(伝僧空海作)	もくぞうやくしにらいぞう	1躯	甘日市市宮島町	明32.8.1	木造、漆箔	像高50cm	嚴島神社の修理動進をつかさどった真言宗大願寺の本尊で、檜材の漆箔像。衣文はやや太いが流麗であり、面相にはおだやかな温かみがある。この像の構造は、頭と胴体を一本で割り別(は)ぎし、該の部分には横木を用いて、内割(うちくり)はきれいにさげられている。平安風の強い鎌倉時代初期(12世紀末～13世紀前半)の作。		
国	重要文化財(彫刻)	舞楽面 寶徳1面、散手1面	ぶがくめん	2面	甘日市市宮島町	明32.8.1	木造漆地彩色		平安時代の承安3年(1173)8月、平家一門によって嚴島神社に寄進された7面の内の2面。その精巧な彫技、薄手の軽快さは後代に見られない。		関連施設:嚴島神社宝物館 (0829-44-2020)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	釈迦及諸尊箱仏	しゃかおよびしょそんはこぼとけ	1箱	廿日市市宮島町	明32.8.1		高さ21cm、幅17cm、厚さ4.7cm	中央の一群は如来を中心として十一尊を、左右は各五尊の像を各々一材の白檀から彫り出し、飛天や天王、花形のぶどう唐草文など簡簡古致(かんげいこち)な金銅金具で装飾された黒漆塗の箱に入れて、蝶番で接合した携帯用の厨子である。このような携帯用厨子(かぶね)は、7世紀頃中央アジアから中国にかけて盛んに用いられ、本品も晩唐期(9世紀後半)の作と考えられる。あるいは平安貴族の念持(ねんじ)であったものを寄進したのであろうか。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	14躯	廿日市市宮島町	明32.8.1	漆箔 小さい2軀は玉眼、極彩色	高さ21~61cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀~14世紀前半)の大小種々の狛犬で、野坂文書や具注暦(くちゅうれき)真書にその存在が記されている。嘉禄3年(1237)に作られた26頭の狛犬もこの中の一部をなしていると思われる。 この中で小さい2頭だけが玉眼入りの極彩色で、その彩色も塗りかえた形跡がある。胴部は漆箔、足の毛や立髪は緑青、舌や腹部は朱が塗られていたと思われる。21cmと小型であるところから、かつては玉殿(ぎょくてん)に置かれていたことも考えられる。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(彫刻)	舞楽面 二ノ舞2面、採桑老1面、納曾利1面、抜頭1面、環城楽1面、陵王1面	ぶがめん	7面	廿日市市宮島町	明32.8.1	木造漆地彩色		採桑老(さいそうろう)と陵王(りょうおう)を除いた5面は、承安3年(1173)8月平家一門によって厳島神社に寄進されたもので、その精巧な彫技、薄手の軽快さは後代に見られない。中でも抜頭(ぼつとう)は当時著名の仏師行命が「摩羅尊(まらうじん)の面を造って作ったもので、さすがに出色の出来である。二の舞の二面「盛國朝臣頭通」、納曾利(のぞり)に「台輪所頭通」、遠城楽(かんじょうく)に「政所御寄進」などその寄進者銘が史的興味をそそる。 採桑老には鎌倉時代の建長元年(1249)の銘がある。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(彫刻)	木造飾馬	もくぞうかざりうま	1軀	廿日市市宮島町	明32.8.1	寄木造、玉眼、彩色	高さ82cm	この飾馬はもと大國神社拝殿に置かれていたものと伝えられ、その姿勢は引力に対して抵抗しているような力強い姿で、鎌倉時代(1192~1332)の作風をよく示している。 檜材の寄木造で、すべてを白土の下地とし、彩色をほどこし、墨漆覆輪の鞍をおいている。眼は玉眼で、立髪には毛のようなものを植え付け、飾りの木製古葉は欠失し、それを止めていた釘のみが残っている。 武士が騎馬を神社に奉納した例は少なくないが、その最も古い優秀な作である。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	明32.8.1	檜材、一木造	像高1.6m	浄土寺本堂の本尊で、定証起請文(じょうじゅうきしょうもん)にある「本尊聖徳太子御作等身皆金色十一面観音像」と記されているのは、おそらく本像のことであろう。 檜材のこの像は、右手は施無畏(せむい)の印を、左手に開敷蓮華をさした花瓶(後補)をもつ。面相は童顔で、体軀は長大充実し、刀法も鋭く、全身を金色の釈光に包まれた雄大な尊容の像である。平安時代も初期に近い頃(9世紀)のすぐれた作である。		33年に一度開帳 関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像(伝安阿弥作)	もくぞうしゃかにらいりゅうぞう	1軀	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造、素木、玉眼	像高78cm	西園寺客殿脇間に安置されている仏像で、小柄ながらも秀麗な尊容に、よく調和のとれた彫りの深い流れのような衣文のたがにも、鎌倉時代(1192~1332)の安阿弥流の特色がうかがわれる。 寺伝によると、本像は快慶の作と言い、かつては「うしろ坂」の釈迦堂の本尊であったが、御堂の炎上後、西園寺に安置することになったという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにらいざぞう	1軀	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm、膝張り71cm	平安時代も初期に近い時期(9世紀)の秀作である。西園寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で、古来秘仏として伝承してきたものである。優麗ながらも森厳にして荘重な趣をたたえた、重量感のある仏像で、緩髪(らほつ)は切付け、彩色のない素木の古い高雅さが感ぜられる。 寺伝によると、讃岐普通寺(ぜんふうじ)から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1軀	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代(794~1191)の作。 千手観音で真鍮千手のものは数点しかなく、ほとんどが合掌手。宝鉢手の他に両脇に十九本の脇手がある四十二臂(しにじふにべ)像がごく一般的である。本像も四十二臂像で、彩色は剥落しているが、かえて木目が美しく効果的にあらわれている。 寺伝では行基菩薩(ぎんぎ)と言い、向島崎城主で村上水軍の将居資長が寄進したものと伝え、その念持仏として船中に選択し、風浪を凌いだので、「浪文観音」の俗称もある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像(伝僧最澄作)	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1軀	福山市草戸町	明32.8.1	一木造	像高142cm	一木彫り、平安時代初期(9世紀)の作品で、台座も平安時代(794~1191)の作と考えられる。 明王院本堂の本尊として厨子に納められる。伝教大師の「刀三乳」の作と伝承されている。 等身像で、頭上の十一面は後補が多いが、主体部は造立当初のものである。彩色は剥落しているが、深い彫り強い線、均整のとれた姿態、柔和な面相と優麗な気品、また天衣(てんね)の翻転(はんてん)も巧みである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置) 乾元二年/銘アリ	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造。玉眼。彩色。髪をみづらに結い、柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年(1303)、沙弥定証(じょうしょう)が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京の院派の仏師・院憲が作った。「孝養像」と称されるもので、玉眼で彩色され、髪はみづらを結い、両手に柄香炉(えごろう)を持った姿である。胎内頭部に「乾元二年法印院憲作」という墨書がある。定証起請文(じょうしょうきしょうもん)に「聖徳太子十六歳御葬、京都仏師院憲作」というのは本像と認められる。文献と銘文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)院派の佳作である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置)	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造。玉眼。彩色。左手に柄香炉、右手に笏を持つ。	像高1.05m	南北朝時代、暦応2年(1339)の作で、胎内に墨書銘がある。「撰政(せんせい)像」と称されるもので、玉眼で彩色されている。撰政像は必ず笏(しやく)を両手で持っているため、本像は左手に柄香炉(えごろう)、右手に笏を持っており、撰政像の影響を受けた孝養像の一変形と思われる。同種のものは南北朝時代(1333~1382)前後からその例があらわれる。同種の太子像中の秀作である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	木体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期、9世紀の作と思われる作品で、当時の造像によく見られる本体と台座を楕(かや)の一木から彫り出した。重厚森嚴な仏像である。もと伊勢神宮の神宮寺にあつたものといわれる。釈迦牟尼(むに)とは「釈迦族の聖者」の意味で、吾人の後に信りを得て慈悲と知恵(ちえ)により衆生(しゅじょう)を済度(さいど)した仏教の祖である。その釈尊は久遠常住(くおんじょうじゅう)の仏である釈迦如来として多くの経典の教主とされており、日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	三原市八幡町宮内	大6.8.13	一対	高さ80cm	室町時代、嘉吉年間(1441~43)の作ともいう。もとは御願八幡宮本殿に安置されていた。社伝では足利八代将軍義政の寄進と書いて、かつて狛犬の腹部に「嘉吉」の墨書が見えていたと書かれているが、今は見えない。もとは彩色されていたが、現在は剥落し、ところどころにその痕跡を残すのみである。御願八幡宮は奈良時代(710~793)の勧請といわれ、京都石清水八幡宮の別宮であった。		関連施設:御願八幡宮宝物収蔵庫(0848-65-8652)
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1軀	広島市東区牛田新町三丁目	大6.8.13	檜材。寄木造。漆箔	像高140cm	平安時代初期(9世紀)の作で、宝徳2年(1450)に修復されている。不動院金堂の本尊で檜材。漆箔塗り。火災二重門光を背にし、右手は施無畏(せむい)印。左手に薬蓋のせた面相が円満で、衣文の流麗な定朝様の仏像である。脇侍の日光・月光菩薩を欠いているが、その代わりに彫ったものであろうか、須弥壇の勾欄(こうらん)の中央に宝輪。その左右の臺上に日輪・月輪の彫刻がはこんである。会慶数童子(なす)の獅子裏に「源雅信助口の名なり宝徳二年十月日」の年号があり、光背(こうはい)の裏に朱書きで「大仏師右京左京」と記されており修復物語語っている。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1軀	尾道市瀬戸田町御寺	昭3.8.17	寄木造。漆箔。玉眼	像高83cm	真言宗光明坊の本尊で、漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結ぶこの仏像は、鎌倉時代(1192~1332)の作であるが、面相は丸味がありふっくらしており、衣文の縁もやわらかく、平安風の匂いを感じさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	2軀	世羅郡世羅町甲山	昭3.8.17	桜材一木造。樺材一木造	像高189cm、170cm	今高野山観音堂の本尊で、一軀(写真右)は桜材で造られ両肩から腕まで共木を用い、胸の環結(ゆうら)も同じ木で彫り出す古様な手法である。天衣(てんぬ)や腕の彫り出しの仕方など一部に地方作風が見られるが、面相姿勢がこぶる端正俊麗で、裳は赤、白、緑の草花文で美しく彩色されており、地方作としても中央に比較して遜色のない像である。昭和12年(1937)の修理の際、背面腹部の内割(うちご)から延喜通宝が発見され、像の製作年代を知る重要な手がかりを与えた。もう一軀(写真左)は樺材で、両肩で両手を柄(はぎ)着けており、彩色像であるが剥落がはなはだしい。簡潔で素朴な造りである。両像とも平安時代中期(10世紀)の作。		毎年8月20日のみ公開 関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
国	重要文化財(彫刻)	木造浄土曼荼羅刻出籠	もくぞうじょうとまんだらこくしゅつがふん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm、横14cm、奥行4cm	霞(が)んとは、本来は塔の下の室という意味で、厨子状に割(く)られたくぼみの中に納められた像を霞像という。小型のものは種福を運る僧侶が携帯していた物が多い。この霞は檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一木から宝楼閣や七宝の池などに、弥陀三尊をはじめ、十大弟子、二十五菩薩、四天、二力士など五十餘の諸尊や魔首の舟などを克明に彫り起して極楽浄土を表現しており、すべた技法による精巧で構成の巧みな作品である。平安時代、12世紀の作。厨子の裏面に「高野山無量寿院頼運」の朱漆銘がある。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(南無仏太子像) 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう(なむたいしぞう)	1軀	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造。玉眼。彩色	像高68cm	南北朝時代、建武5年(1337)の作。胎内頭部に「建武五年十月二十四日院勢作」の墨書銘がある。「南無仏太子像」と称されるもので、玉眼入りで彩色された像である。三尊の尊像と言われ、上半身は禪形で下半身に袈裟を着け合掌する姿である。同じ胎内から出た三尊仏の印仏(いんぶつ)には、本寺重修に尽力した道達。道性の名も見られ、本寺と太子信仰の関係も察せられる貴重な作品である。なお、作者の院勢は、孝養像の作者院憲と同じく京都院派の著名な仏師である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像 像内二藤原行光/願文及名号等ヲ納ム	もくぞうあみだにょらいりゅうどう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造、漆箔	像高60cm	鎌倉時代、天福元年(1233)の作。小像ではあるが、漆箔の上に精緻な鍍金(きりかぬ)を施した秀麗な阿弥流のおだやかな作品で、胎内の空洞を金箔ではつめた珍しい例の仏像である。 その胎内には承久元年(1219)に卒した藤原行光の自筆文書と千字の名号及び願文が納入されていた。願文は天福元年の年紀があり、木像は、行光の十五回忌にその真福を祈るために造られたものであると考へられる。 行光は源頼朝、義朝の縁につながる人物で、民部丞、政所執事、信濃守などの要職にあつた。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来及両脇侍像(古保利薬師堂安置)	もくぞうやくしにょらいおひよりよわきじょう	3軀	山県郡北広島町有田	昭17.12.22 昭37.2.2 (追加指定)	一木造	(薬師像)高122cm、膝張125cm (脇侍)高140cm	古保利(こほり)薬師堂は福光寺という大きな廃寺の跡にある。 薬師如来坐像は、いわゆる丈六の像で、膝の部分は別木であるが、体の主要部を一本の木から彫り出している。豊麗な顔、幅広い肩、厚みのある胸や腰、高い膝などが量感豊かに表現され、衣のひだは太く深く彫りこかれ、この像が平安時代初期(9世紀)の作であることを示し、その強い表現は貞観彫刻も早い頃の特色をそのまま残している。 脇侍の日光・月光菩薩は立像で、台座連内まで共木で彫った平安時代初期の作風を伝える仏像である。		関連施設: 古保利薬師取蔵庫(0826-72-5040(千代田歴史民俗資料館))
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及両脇侍立像(本堂安置) 中尊像内に金胎五仏等種子及び文永十一年二月九日始、大仏師覚尊の銘がある 附 像内納入品 紙本阿弥陀経 6巻(血書1、墨書5、包紙添)文永十一年三月六日覚尊の記がある 紙本墨書普光寺如来造立勸進帳 1通 紙本墨書念仏紙包紙添 1冊 紙本念仏記 3通(血書1、墨書2)内一通に文永十一年三月八日とある 紙本墨書願文 1通 装束 1領 横笛 1管 短刀柄付 1口 銅製鈴 1箇 紙胎漆塗箱 1合(以上中尊分) 紙本墨書仁王般若経 弘長二年寛観とある(左脇侍分) 珠数 1通(右脇侍分)	もくぞうあみだにょらいおひよりよわきじりゅうどう	3軀	福山市鞆町後地	昭17.12.22 昭43.2.25(像内納入品の一部を追加指定)	寄木造、漆箔、玉眼	本尊の高さ170cm、脇侍の高さ130cm	鎌倉時代、文永11年(1274)の作。 空蔵房寛光三人が新に入港した船の乗客乗員など多くの人たちから勧進、平頼影を大壇那とし、大仏師覚尊によって造られ、金堂寺(安国寺の前身)に納められた。 一光三尊形の巨大な舟形普光(高さ306cm)を用いた普光寺如来である。普光寺如来は長野普光寺の像を模して鎌倉時代に盛んに作られた。その多くは銅製の小像であり、この像のような大きなものは珍しい。 昭和24年(1949)に修理された際、中尊胎内から願文、勸進帳、血書も含む阿弥陀経6巻、般若心経1巻、念仏紙2枚、名号並びに和歌取入の冊子1冊、一貫種刀被蓋黒漆塗箱一合(中に毛髪3包あり)、紙包27包(1包は毛髪のみ、他は毛髪と舍利)などが発見された。また脇侍観音胎内からも王版若經上下2巻などが発見され、当時の熱烈な信仰心を明らかにした。		
国	重要文化財(彫刻)	木造法燈国師坐像 附 水晶五輪塔(小箱添)1箇 紙本墨書梵字真言並仏眼禅師偈文 1通 建治元年十二月十八日覚心トアリ 紙本墨書仏像修理記 1通 寛文四年三月十五日トアリ	もくぞうほうとうくしござう	1軀	福山市鞆町後地	昭17.12.22	寄木造、玉眼	高さ84cm	新安国寺に伝わる木像。寄木造、玉眼入り。 鎌倉時代(1192~1332)に盛んに作られた招師像のひとつである。法燈国師は禅宗の僧侶であり、安国寺開山とされている。この像は建治元年(1279)法燈8才の時の像で、極めて写実的である。なお、法燈の像は和歌山県に伝えられている。 像内には水晶五輪塔などが納められていた。水晶五輪塔は高さ6.7cm、鎌倉時代の作と推定されている。		
国	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	3軀	福山市新市町宮内	昭17.12.22	寄木造、漆箔	像高ノ(阿)78cm、(畔)80cm、82cm	平安時代(794~1191)の作と思われる。 狛犬は、宮中や神社に置かれた守護獣の像で、獅子と狼犬の組合せは平安時代前期に確立したと思われる。一対でそれぞれ阿(あ)畔(うら)をあらわしたものを一対とするのが一般的である。 本品はいずれも対をなすものではなく、かつて対をなしていたものは、何らかの経緯で失われたのであろう。 吉備津神社蔵(東京国立博物館に貸出中)		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像(観音堂安置)	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうどう	1軀	世羅郡世羅町宇赤屋	昭19.9.5	榿材、一木造	像高147cm	榿(かや)材の足部から運肉まで一木彫成(台座周囲は後補)という、平安時代初期(9世紀ころ)によく見られる技法の仏像である。 ずんぐりとした怒り眉の体躯に太い首、著しく奥行の深い頭部に眉目はやや鋭く、あごにつりりと割り(ク)の線をほどこし、上唇のつき出した表情など、重厚さと量感(りょうかん)性に富んだ像である。姿には翻波(ほんば)式衣文(えもん)が残り、天衣には旋転(せんてん)文がうづまいて彫り出され、9世紀頃から流行した埋地の趣が深く、黒ずんでいるがわずかに彩色のあとがうかがえる。頭上の化仏十圍は後補であるが、そのうち七圍は相当古いものである。貞観彫刻(9世紀ころ)。もと報恩寺観音堂に納められていた。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖観音立像(所在観音堂)	もくぞうしょうかんのんりゅうどう	1軀	世羅郡世羅町宇赤屋	昭19.9.5	榿材、寄木造	像高136cm	菩薩は如来の境地に達する前の段階にあるもので、具体的には、釈迦の出家する前の太子つまり王子の姿をかたどる。観音菩薩はその菩薩の代表的なもので、更にその中でも聖観音は観音の基本形とも言うべきものである。 十一面観音とともに今は廃寺となり、報恩寺仏像取蔵庫に安置されているこの聖観音立像は、榿材の寄木造で、容姿の優麗温雅な平安時代(794~1191)の作品である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうどう	1軀	尾道市鞆山田甲	昭24.2.18	一木造、上下二段の背割りがある、素木	像高190cm	平安時代(794~1191)の作。摩訶衍(まかえん)寺の本尊で、冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し、影眼の像は、糸巾(じょうけん)をつけ腕釧(わんせん)を彫り出している。すこぶる重量感のある堂々とした像であるが、天衣や裳の影は比較的浅い。背面の胸背部と腕部に内割(うちぐり)があるが、その納入品についての寺伝はない。この像は、たびたび災禍にあつたためか、彩色はほとんど剥落し、化仏、手足や天衣の先端は欠失し、現存のそれらは後補である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造仏涅槃像	もくぞうぶつねはんぞう	1軀	尾道市御調町	昭24.2.18	寄木造、漆箔、玉眼	像高150cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。 涅槃とは、一切煩惱の聲を脱して迷界に再生する業因を滅却した境地と言われ、釈迦の死の時を言う。釈迦が娑羅双樹(さろそうじゆ)の下で右脇を下にして横臥し、その両面をとりまいて、釈迦の弟子の僧達や俗人から鬼人、動物が悲嘆し痛哭して有る様を描いた涅槃図は多いが、技術的にむづかしい彫刻は少ない。 本像は玉眼入り漆箔の等身大の数少ない涅槃像のひとつである。「塚原通也」とも俗称されるこの像の現存する最古のものは、法隆寺五重塔の初重四重の壁像群で白鳳時代(8世紀)、奈良明日香村の岡寺のものも天平時代(8世紀中葉)、他には本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 像内に仁平四年造立の銘がある	もくぞうあみだにらいざぞう	1軀	広島市西区三滝町	昭33.2.8	檜材、寄木造、漆箔	像高85cm、膝張73cm	全体的に温和な風格が漂う定朝様の作風になり、像内の墨書銘で河内錦郡日野村(現在の大阪府河内長野市)の観音寺に、同寺の重徳である道俗男女が、平安時代、仁平4年(1154)11月に寄進したことが知られる。 容姿は肉髻は高く肉髻相は上部あり、白毫は比較的小さく眉間の上方にある。衣文は前期に見られる翻波式は見られない。いわゆる来迎印を結んでいる。温和な風格が漂う平安彫刻の標準形である。肉髻を大きく作っているところは河内・和泉あたりが地方特色である。 ※定朝様(じょうちょうよう)…11世紀に仏師定朝が完成した様式。寄木造りの手法により胸を平かに膝を広く低くし、顔は円満足の相を構つ。 ※来迎印(らいこういん)…往生、臨終の際、極楽浄土から迎えにくる阿彌陀如来のとる印相 ※肉髻(にづけい)…頭部の肉が隆起する部分 ※白毫(びゃくごう)…眉間に生えた白い巻毛		
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像(所在古保利業師堂) 木造十一面観音立像3軀、木造先手観音立像1軀、木造吉祥天立像1軀、木造四天王立像4軀	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうがうぞう もくぞうせんじゆかんのりゅうがうぞう もくぞうきしやうてんりゅうがうぞう もくぞうしてんのうりゅうがうぞう	9軀	山県郡北広島町有田	昭37.2.2	一木造	像高ノ千手観音像170cm、吉祥天163cm、四天王122cm	古保利業師堂に伝えられた、平安時代(794~1191)、貞観様式の仏像である。 千手観音像は千手と称するたくさんの脇手まで、胴体と共木から作り出されている点、わが国でも珍しく、面相麗しく、体軀は豊かに表現されている。 吉祥天は、重態にみえ、その重態な姿や衣服などは神像をわける。 四天王像は足下に踏まれた邪鬼までが本体と共木で造られ、怒りをまき出した面相や動きのある姿がすばしい。 このような、いづれおらぬ一木彫りの貞観彫刻が一堂に残っているさまは社観で、地方造像の注目すべき例として文化的意義が高い。		関連施設:古保利業師収蔵庫(0826-72-5040(千代田歴史民俗資料館))
国	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 像内に巧匠安阿彌陀仏、伊豆御山常行常御仏、建仁元年十月口日銘がある	もくぞうあみだにらいざぞう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造、漆箔、装懸座にのる	像高74.0cm	漆箔で装懸座(もかけざ)に坐るこの像は、銘文にあるようにもとは伊豆山権現(走湯山、神奈川県)常行堂の本尊であったもので、鎌倉時代、建仁元年(1201)快慶(安阿弥、あんなみ)の若い時代の作品である。形の整った安阿彌風のおたやかな作風のもので、宝冠をつけた、阿彌陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設:耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造獅子頭 下顎裏に正安三年九月彫刻の刻銘がある 附 木造獅子頭 1面	もくぞうししがしら	1面	世羅郡世羅町甲山 (大田庄歴史館寄託)	昭39.1.28	木造、漆塗及彩色	高さ25cm、長さ40cm	鎌倉時代の正安3年(1301)9月の作で、下顎裏に墨書銘がある。大型のもので、おだやかな刀法で作られており、風漆塗に金や朱の彩色がよび残っている。鎌倉時代の獅子頭の代表的なものである。付(つけ)たりの獅子頭は対をなすものであるが、時代は下る。 丹生(たんにじ)神社は今高野山の鎮守。		関連施設:大田庄歴史館(0847-22-4646)
国	重要文化財(彫刻)	木造観音菩薩立像 附 木造観音菩薩立像 1軀	もくぞうかんのんぼさつりゅうがうぞう	1軀	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一木彫像で、両幅広(量感豊かな体軀や翻波(ほんば)風の衣文には平安時代初期(9世紀)の余風を伝えてはいるが、総体におだやかなが顯著になっており、10世紀の製作と考えられる。堂々とした風格があり、保存も比較的良く、備前地方の平安古像を代表するすべからぬ作品である。 付(つけ)たりの菩薩像は本品と一緒に伝世したものであるが、作柄に地方風が強く、この地方の造像傾向の変遷の一端をつかう造像として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造不動明王坐像	もくぞうどうみょうおうざぞう	1軀	廿日市市宮島町	平5.6.10	檜材、一木造、彩色	本体像高98.7cm、光背高157.0cm	弁髪を緋い、両眼を開き、上歯牙を露わす大師様不動明王像の古例である。顔をわずかに右に向ける姿も、東寺講堂像(国宝)に似て古様であるが、整理された重態表現や装飾的な臂釧(ひせん)にみられる浅い刻出などから平安時代、10世紀後半の作と推定される。もと京都仁和寺(にんなんじ)塔頭(たこう)真乗院に祀られていた。 光背(こうはい)の周縁火焔(かえん)は後補とみられるが、二重円相部に浮彫りされた宝相華(ぼっそうけ)文は本体の臂釧の彫りと共通しており、本体と一具同作とみられる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造行道面	もくぞうぎょうどうめん	11面	三原市八幡町宮内	平14.6.26	檜材、旧は彩色あり	獅子頭:高さ30.0cm 馬頭:長さ53.1cm 菩薩面:縦20.0~20.5cm、横21.0~22.0cm 比丘面:縦29.0cm、横21.0~22.0cm 如来面:縦33.5cm、横20.0cm	行道(縁供養、わりよく)とは、仏像を牽じ行列を組んで練り歩くもので、この時に使用される面が行道面である。 13面のうち、獅子頭と馬頭(うまがしら)は平安時代後期(12世紀)、菩薩面8面及び比丘(びく)面2面は鎌倉時代前期(13世紀)、如来面は室町時代(1333~1572)の作である。獅子頭と馬頭は類例希な造像で、菩薩面及び比丘面は慶派風の上質な作である。胡粉が残っており、旧は彩色が施されていた。菩薩面の一部の面に金箔が残っている。 破損は著しいが平安時代後期の作である菩薩面3面が附指定となっている。		関連施設:御調八幡宮宝物収蔵庫(0848-65-8652)
国	重要文化財(彫刻)	木造僧形八幡神坐像 木造僧形神坐像 木造女神坐像 木造天部形立像	もくぞうそうぎょうはちまんしんざぞう もくぞうそうぎょうしんざぞう もくぞうしんざぞう もくぞうてんぶぎょうりゅうがうぞう	7軀	三原市八幡町宮内	平15.5.29			御調(みつぎ)八幡宮の本殿にまつられている神像である。製作時期は平安時代前期の9世紀から10世紀初めにかけてに求められ、八幡神が2神から3神へと変化していく歴史的経過を明確に示しながら、各時代の作がよく保存されている。仕上りの美しさと保存状態の良さもさることながら、神像の造形的変遷を如実に示す好例の作例である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造神像 11幅 木造隨身立像 4幅	もくぞうしんぞう もくぞうずいじんりゅうぞう	15幅	府中市元町 (府中市教育委員会 寄託)	平成29(2017)年9月15日		像高(神像)42.2~63.3cm(隨身)100.3~138.5cm	備後国府跡の近くにある南宮神社の本殿に御神体として伝来した神像群と、同社の門に安置される、隨身と称される左右一対の神像二組である。平安末期から鎌倉前期にかけての製作とみられる。男神4幅と女神3幅は同じ作者の手になるとみられるが、年齢や性格などを作り分けられているのが注目される。近年の調査で見出された作例である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造丹生明神坐像、木造高野明神坐像	もくぞうにうみょうじんざぞう もくぞうこうやみょうじんざぞう	2幅	世羅郡世羅町甲山	平成30(2018)年10月31日		像高(丹生明神)62.1cm、(高野明神)61.2cm	高野山が備後国大田庄の経営拠点として設けた真言宗寺院、今高野山の鎮守社に伝わる一対の男女神像。平安風をともめた作風より、大田庄の高野山寄進からさほど隔たらない鎌倉初期の製作とみられる。この時代の神像の像品である。		
国	重要文化財(工芸品)	銅製梵鐘(伝僧惠環将来)	どうせいばんしやう	1口	広島市東区牛田新町三丁目	明32.8.1		高さ160cm、直径65cm	不動院鐘樓(重要文化財)にあるこの梵鐘は、毛利・豊臣両氏に信頼の厚かった安国寺惠環(あんこくじえいけい)が、朝鮮半島から持ち帰ったと伝えられる高麗(こうらい)初期の名鐘である。蓮華文の鐘座(つぎざ)が4個跡出される。鐘座中央に菩薩坐像があり、「信相菩薩」の銘が刻まれている。鐘の身の上下両端に蓮華文球が彫り出され、四面には天女が衣をなびかせながら舞を舞う姿を刻んでおり、その文様はすぐれており美しい。 不動院は、中世、安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが、安国寺惠環が再建に尽力し、現存する建物の多くが惠環によって建てられたと言われる。江戸時代に神祭から真言宗に変わり、寺号も有珍(ゆうちん)が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。 ※高麗…10世紀初めに興った朝鮮半島の国家。1392年滅亡。		
国	重要文化財(工芸品)	梅唐草蒔絵文台硯箱(伝大内義隆奉納)	うめからくさまきえらみだいすずりばこ	1組	廿日市市宮島町	明32.8.1		硯箱縦24.3cm、横22.8cm、深34.8cm。 文台高さ8.4cm、幅54.4cm、奥行54.2cm。	硯箱・文台・墨柄ともに黒漆塗で、梨地に濃淡をつけ深い部分に薄肉高蒔絵の梅花を、浅い部分に同様の手法で梅唐草をあしらひ、ところどころ金と銀の敷金(きりがね)を点している。硯箱の内側に漆絵に梅唐草をあしらひ、漆絵の意匠・技法からみて室町時代末期(16世紀)の作で、大内義隆献納という伝も信じられる作品である。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	紺紙金泥法華経入蓮花蒔絵経函	こんしんきでいほけきやういりれんげまきえきやうばこ	1函	廿日市市宮島町	明32.8.1		縦33cm、横16cm、高さ11.5cm	函は長方形印箱蓋(いんろうふた)造りで、全面下地に布を張り、吉祥の大柄な蓮池の写生的文様が沃懸地(いりかけ)であらわし、流水などの一部に垂々(たれ)させ、蓮葉には金銀敷金(きんぎんさいきん)、蓮花には銀などの新しい手法が見える。平安時代後期(11~12世紀)の作。光明皇后法華経入建てである。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	藍韋肩赤威甲冑 大内義隆奉納	あいかわかたあかおとしかつやう	1領	廿日市市宮島町	明32.8.1		鎧高(胸板より草摺裾まで)59.5cm。 兜鉢高さ12.7cm、前後径23cm、左右径20.6cm。	この鎧の寄進状によると、戦国時代、天文11年(1542)5月20日に大内義隆が奉納したもので、奈良の甲冑(かつやう)師春田光信の銘がある。 鎧は黒漆塗鎧地盛り上げの鉄及び革の本小札(こざね)を一枚交ぜとして、前後の立穿は赤糸を、衝胴及び草摺(さずり)は濃い藍皮で威(おど)している。兜鉢は鉄黒漆塗、二方白六十四間総覆輪防泥鉢(てづらうしろ)に白うしろく(いり)がね(おん)す(う)す(か)文(は)け(う)で、巻巻取に威取をつけた高野山(たかのか)やま)形である。室町時代末期(16世紀)という甲冑の転換期で、当世具足が出現する時期に製作されたこの鎧は、甲冑研究史上の好資料である。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	木地塗螺鈿飾太刀	きぢぬりだんかざりたち	1口	廿日市市宮島町	明32.8.1		総長1.03m	横杖(ぎじやう)用の太刀で、柄には白の絞皮を張り、鞘(さや)は茶色がかつた朱色木目地塗で、鳳凰とらんどう唐草を表裏に巧みな構図で青貝螺鈿(あわがいでん)にしている。鞘の足金物、黄金、石突金物等は欠失している。鐔(つば)は唐篋で、巻形の巻金物をつり懸金(とせきん)をほどこしている。この飾太刀の伝来及び奉納者はわからないが、平安時代後期(11~12世紀)の風趣豊かな作品である。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	鍍金兵庫鎖太刀	ときんひょうごくりたち	5口	廿日市市宮島町	明32.8.1		総長97.5cm	兵庫鎖太刀は、帯鉄(おびとり)が細い針金で作られた三筋か四筋の鎖でできているところにその名の言われがあり、平安時代末期から鎌倉時代(12~14世紀前半)にかけて武将の間で流行した。その造りかいかめいところから蔵物(くらもの)造太刀とも、鞘(さや)や柄の表裏に板金を着せ、上下から長い覆輪(おほり)をかけるところから長覆輪太刀とも呼ばれる。 5口のうち1口は、鞘の板金に蓬萊(ほうらい)文と舞鶴園を毛彫りにし、帯鉄に三筋の鎖をつけた鎌倉時代中期(13世紀)の作で、13世紀後半の鎌倉将軍である久明親王(かみなり)が惟康親王(ゆいこう)がいつかの奉納であるという。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	鍍金長覆輪太刀	ときんちやうぷりんたち	1口	廿日市市宮島町	明32.8.1		総長92.4cm	この太刀は、帯鉄(おびとり)を欠失しているのは惜しまれるが、「蔵島回金」に他の兵庫鎖太刀と区別した書き方をしているところから見て、帯鉄は七ツ金を用いた革足(かわあし)の太刀であったと思われる。柄(こしらえ)は簡素で、鞘の表裏板金に松喰鶴文(まつくわん)を毛彫(けり)にし、その上下に銀(ぎん)とざん)の長覆輪をかけている。柄も同様である。鎌倉将軍九条頼朝(たより)が(在任1244~1252)の寄進と伝えられる。		関連施設: 広島神社宝物館(0829-44-2020)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	錆色藤巻太刀1、錆色藤巻腰刀1(刀身欠)	にしきつみつみとうまきたら つみとうまきこがたな	2口	甘日市市宮島町	明32.8.1 昭27.3.29(追加指定)		太刀ノ総長102.6cm 腰刀ノ総長36.3cm	太刀は鍔(つば)を欠いているが優れた作品であり、腰刀の製作も同様で、鞘(さや)・柄ともに木地に赤地の緒で包み、緒で荒く巻巻にしたさぶらる簡素で雅趣に富むこしらえで、平安時代(794~1191年)ないし鎌倉時代初期(12世紀前半)の優秀な製作である。この時代の腰刀こしらえで現存するものは稀であり、太刀と一対であることは一段と貴重である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	紙本墨書扇(伝高倉天皇御物)	しほんぼくしよおうぎ	1柄	甘日市市宮島町	明32.8.1		長さ39cm	紙はり扇の最も古い形式を示すもので、黒漆塗の5本骨の夏扇で、その料紙の表は大小の金銀の切箔(きりばく)、銀砂子(きんすな)などを用いた華麗なものであるが、裏はほとんど銀砂子を散らしたのみで、表とはかわた趣を出している。表裏には仁平元年(1151)に撰(せん)された「荷花集」巻三の歌の部から抄出した三条院や山内院の和歌が散ら書きにてある。また裏面右上方には金剛弁大日如來の種子が記されている。書は久我通親、高倉天皇(1161~1181)の寄進と伝えられている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	木製彩色楽器 奚妻、兆鼓	もくせいさいしよがつき けいろう、ふりづつみ	2箇	甘日市市宮島町	明32.8.1		奚妻(けいろう)径23.5cm、厚さ16.0cm、兆鼓(ふりづつみ)総高39.0cm	この楽器は両者とも舞臺「一曲」の舞人が用いる鼓の一種で、右手に撥(ばち)を持ってを奚妻(けいろう)打ち、左手に兆鼓(ふりづつみ)を鳴らすという風に、両者は一具として使用される。奚妻は檜製漆塗の胴に極彩色で宝相華(ほうそうげ)文を描き、紐で首に下げ撥で打つ楽器である。兆鼓は柄を回転させて糸の先の二個の小玉が鼓の支をつように造られた楽器で、胴に黒漆を掛け、朱地に金泥で雲龍を描いている。ともに鎌倉時代の嘉禎年間(1235~1238)の作と思われ、保存がよい。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	七絃琴(伝平重衡所用)	しちげんきん	1面	甘日市市宮島町	明32.8.1	全面漆塗	長さ121cm	表面は桐、底面は梓材を用い、全面漆塗で表面は丸味をつけ底面は平らにし、前方が広く後方は狭い。絃は生糸の麩糸を用い、前方の絃眼の下部に軫(しん)がついている。軫は玉や象牙製で、轆(き)(13個の小円)は螺鈿(らでん)である。七絃琴は、平安時代(794~1191)に盛行した楽器であるが、その完存品はほとんどなく、社伝に言う平安時代末期の武将・平重衡所用も時代的には指すに足らぬ作品である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	木製銅字扁額(後奈良天皇宸翰)	もくせいどうじへんがく	2面	甘日市市宮島町	明32.8.1		(厳島大明神)縦254cm、横148cm、(伊都岐島大明神)縦252cm、横150cm	海上に立つ大鳥居の表裏に掲げられていたもので、一には「厳島大明神」、他には「伊都岐島大明神」とあり、いずれの文字も銅板を切り抜いて板面に釘づけしてある。扁額の外面は木形で、その内側上下には唐草文様を、左右には上り龍・下り龍を銅板に彫りつけ文様としている。戦国時代、天文17年(1548)に大内義隆が社殿を修造したおりの奉納と伝えられている。現在は宝物館に収蔵されている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	銅製五鈴鈴(伝僧空海將來)	どうせいごこれい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm、口径5.5cm	五鈴鈴は金剛鈴と総称されるもの一つで、密教修法の時、諸尊を驚覚歡喜させ、眠っている仏心呼びさまするために用いられる。本品は鈴身に仏像を鑄出した五鈴仏像鈴で、その仏像の種類によって梵天帝釈四天神(ぼんでんいしやしてんがいに)と称されるものである。把柄(つかえ)は蓮華をかたどり、五鈴は獅子の爪の形をした精巧な細工の逸品で、寺伝に弘法大師將來という晩唐期(9世紀頃)の作品である。		
国	重要文化財(工芸品)	銅鐘 峻豊四年ノ銘アリ	どうしよう	1口	竹原市竹原町上市	明43.4.20		高さ47cm、口径41cm	峻豊4年(963)高麗(こうらい)の光宗の時代に作られた朝鮮製の鐘である。小早川隆景が朝鮮侵略の際に持ち帰り、幼時の学問所であった照蓮寺に寄進したという。		
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘光忠 附 革柄銅色鞘脇指拵 ※輓は旧字	たち	1口	甘日市市宮島町	明44.4.17	刃文丁字	刃長51.6cm、反り1.8cm	刃文は丁字。光忠は鎌倉時代中期(13世紀ごろ)の名工で、長船派の祖であり作風は豪放華麗である。この刀は光忠在銘の数少ない遺例であり、豊臣秀吉が用いていたものを毛利輝元が得て、神社に寄進したという。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 表二備州長船住(一字不明)長作 裏二嘉元二二年十月日ノ銘アリ (社伝則長作)	たち	1口	甘日市市宮島町	明44.4.17	鍛え板目、刃文直刃	刃長89.2cm、反り34.4cm	鎌倉時代、嘉元2年(1304)の作である。則長作と伝えられている。鍛えは板目、刃文は直刃である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘一附 糸巻太刀拵	たち	1口	甘日市市宮島町	明44.4.17	刃文丁字	刃長86.5cm、反り0.3cm	刃文は丁字。鎌倉時代(1192~1332)に一派をなした備前一字派の作である。拵(こしらえ)は安土桃山時代(1573~1602)以降大名の佩用(はいよう)とされた糸巻太刀である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	鐺杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	鐺杖は有聲杖とも言われ、頭部の輪形に遊鑲(ゆうかん)を通し、これを摺って音を出すものである。鐺杖の渡来は仏教初伝の頃と言われ、長さは等身丈で、字の如く杖として用いられていたが、後には柄を短くして手鐺杖とよばれ、杖としてではなく(法要の時の梵音具として用いられるようになった。この鐺杖も「手鐺杖」で、双竜の頭に蓮華をさした花瓶をおき、竜尾で鐺杖の輪をかたどり、頂上に定印(じょういん)の三尊仏を配し、朱色の短い杖をついた精巧な品である。寺伝では弘法大師傳來という晩唐(9世紀ごろ)の作である。		
国	重要文化財(工芸品)	太刀 中身久国ト銘アリ 附 糸巻太刀拵	たち	1口	甘日市市宮島町	明45.2.8	鍛え板目、刃文乱れ	刃長75.8cm、反り2.7cm	鍛え板目、刃文乱れ。鎌倉時代初期(12世紀末~13世紀前半)の粟田口(あわたぐち)派の最もすぐれた刀工であり、後鳥羽院の権鍛冶であった久国(ひさくに)の作である。堂臣秀吉の佩用であったものを毛利輝元が得て、後に寄進したといわれる。糸巻の太刀は安土桃山時代(1573~1602)以降用いられ、大名の儀杖と兵杖を兼用するものであった。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	革包太刀 中身貞和二年云々トアリ	かわつつみたち	1口	甘日市市宮島町	明45.2.8	刃文直刃	刃長91.2cm、反り3.3cm	南北朝時代、貞和2年(1346)の作である。拵(こしらえ)は鮫皮で包んである。刃文は直刃乱れである。備中国青江助次、助家両名の合作で、戦国時代(16世紀)の厳島神社の社家・御守房願(たなもりふさあき)の奉納と伝えられる。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘包次 附 黒塗半太刀拵	たち	1口	甘日市市宮島町	大3.4.17	鍛え板目、刃文直刃	刃長70.8cm、反り2.8cm	鐺(しのぎ)造りで鐺の高い庵棟、鍛は板目に大板目交り地張入り。刃文は小乱れに小丁字(こちょうじ)交り、大きな焼落しがある。腰反りの高く踏張った太刀姿である。包次は鎌倉時代初期(13世紀前半)の備前中江派の刀工で、大きな焼落しと太刀銘ある作は少なく好資料である。戦国時代(16世紀)の武將・百川元長の寄進と伝えられ、「新龍切(しんりゅうぎり)の号があるという。拵(こしらえ)は、室町時代(1333~1572)の半太刀拵の現存するものとして貴重である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	刀 銘談議所西運 附 打刀拵	かたな	1口	甘日市市宮島町	大3.4.17	鍛え板目、刃文乱れ	刃長69.4cm、反り2.5cm	鐺(しのぎ)造、庵棟で鍛は板目。刃文は大きいたれ交りに小乱れ交りの磨り上げながら、腰反りの形状を残している。鎌倉時代末期(14世紀前半)の作である。西談議所西運は、筑前国の談議所(裁判所兼役場)に勤めた人で、名を国吉と言ひ鎌倉時代末期の刀工である。この刀は堂臣秀吉の愛刀であったものを、毛利輝元が得て当社に寄進したものである。拵(こしらえ)は黒漆鞘で天正拵と称される作品中の機品である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	毛抜形太刀 銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日 吉備津宮奉寄進御太刀(二宇不明)次郎左工門尉忠吉拵付	けぬきがたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鑄造、庵棟、腰反り、鍛え板目、刃文直刃	刃長60.8cm、反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年(1555)の作で、尾道の刀工五阿弥長行の作である。室(なかご)に毛抜形の遺しをする平安時代(794~1191)の同種太刀の模古作である。鑄造(しのぎづくり)、庵棟、腰反りで鍛は板目、刃文は直(すく)刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設: 備後一宮吉備津神社宝物館 (0847-51-3395)
国	重要文化財(工芸品)	毛抜形太刀 銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日 吉備津宮奉寄進御太刀(以下不明)	けぬきがたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鑄造、庵棟、腰反り、鍛え板目、刃文直刃	刃長60.2cm、反り2.8cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年(1555)の作で、尾道の刀工五阿弥長行の作である。室(なかご)に毛抜形の遺しをする平安時代(794~1191)の同種太刀の模古作である。鑄造(しのぎづくり)、庵棟、腰反りで鍛は板目、刃文は直(すく)刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設: 備後一宮吉備津神社宝物館 (0847-51-3395)
国	重要文化財(工芸品)	毛抜形太刀 銘正光 拵付(長さ61.6cm)	けぬきがたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鑄造、庵棟、腰反り、鍛え板目、刃文直刃	刃長61.6cm、反り2.5cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代(16世紀)の作で、三原鍛冶のひとり・正光の作である。室(なかご)に毛抜形の遺しをする平安時代(794~1191)の同種太刀の模古作である。鑄造(しのぎづくり)、庵棟、腰反りで鍛は板目、刃文は直(すく)刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設: 備後一宮吉備津神社宝物館 (0847-51-3395)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	毛抜形太刀 銘正光 拵付(長さ61.5cm)	けぬきがたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鍛造、庵棟、腰反り、鍛え板目、刃文直刃	刃長61.5cm、反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。三原鍛冶のひとり・正光の作で、茎(なかご)に毛抜形の透しをする平安時代(794～1191)の同種太刀の模古作である。 鍛造(しのぎづくり)、庵棟、腰反りで鍛えは板目、刃文は直(すく)刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設: 備後一宮吉備津神社宝物館(0847-51-3395)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘備州長船住(一字不明)真 附 革包太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大7.4.8	鍛え板目、刃文丁子	刃長105.4cm、反り5.4cm	鍛造(しのぎづくり)、丸棟で鍛は板目、刃文は互の目に丁字交り足(あし)入り。表裏に棒樋(ぼうひ)を掻き、反り高く踏ばりのある太刀姿で、佩表(はいわもて)より長銘がある。社伝では国真と言うが、鎌倉時代末期(14世紀前半)から南北朝時代(1333～1392)にかけての元重一派、重真と見る説もある。拵(こしらえ)は、鞘を黒塗しほ皮で包み、柄は黒漆鮫皮を藍革巻(あいかわひしまき)にしていたと思われるが、現在は破損している。室町時代(1333～1572)の作。毛利元就の兄である毛利興元の寄進と伝えられ、「稲光長太刀」と号すという。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘一 附 黒塗太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大8.4.12	刃文丁子	刃長73.6cm、反り2.8cm	鍛造(しのぎづくり)、庵棟・鍛は板目肌つみ、刃文は丁字乱れに大丁字交り、腰反り高く踏んばりのある鎌倉時代中期(13世紀)の福岡一文字派の作である。福岡一文字派は、備前福岡を本拠に鎌倉時代初期(12世紀末～13世紀初め)の則宗以来繁栄した一門で、鎌倉期には多くの名工が出た。銘は匿名か一の手を切るが、一般には一の銘を切るのが多い。本品は生ぶ茎である点が貴重で、毛利元就の所用と伝えられる。拵(こしらえ)は室町時代末期(16世紀ごろ)の作である。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘清綱 附 野太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	大15.4.19	鍛え板目、刃文乱れ	刃長79.8cm、反り3cm	鍛造(しのぎづくり)、庵棟で身幅広く、鍛は板目に大板目交り流れごととなり、刃文は小乱れに互の目交りの腰反りが高く、踏ばりのある堂々とした太刀姿である。清綱は鎌倉時代中期(13世紀)から室町時代末期(16世紀)まで数代あるが、この作は鎌倉時代中期における清綱の代表作である。毛利元就の家臣で桂下総守元忠の寄進である。拵(こしらえ)は室町時代の作。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘備中国住(以下不明) 延文三年六月日	たち	1口	廿日市市宮島町	大15.4.19	鍛え板目、刃文直刃	刃長101.7cm、反り3.6cm	南北朝時代(1333～1392)、延文3年(1358)に備中刀工の流派のひとつ・青江派の刀工が作ったもの。鍛造(しのぎづくり)、丸棟で反りが比較的浅い太刀である。鍛は小木目交りところどころに餘筋が交る。刃文は中直刃。表裏に棒樋(ぼうひ)を掻いている。佩表(はいわもて)棟寄りに細藍(たがね)の長銘に、年紀が刻まれている。匿名の部分は朽ちて不明である。南北朝時代における青江派の作には比較的大太刀が現存するが、この太刀もその典型的なもので、地刃も健全である。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	刀 無銘伝雲次 附 革柄緋色鞘打刀拵 ※緋は旧字	かたな	1口	廿日市市宮島町	昭24.25	鍛え板目、刃文直刃	刃長67.9cm、反り1.8cm	鍛は板目で刃文は直(すく)刃。すりあげの無銘であるが、社伝では鎌倉時代末期(14世紀前半)備前宇甘庄(うかいのしょう)の名工雲次作という。毛利輝元の家臣・佐世石見守元嘉が寄進したもの。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	短刀 銘長谷部国信 附 銀紋柄緋色刻鞘合口拵 ※緋は旧字	たんとう	1口	廿日市市宮島町	昭24.25	鍛え板目、刃文ひたつら、彫り物剣、梵字	刃長21.9cm、反り0.3cm	鍛は板目で刃文はひたつら。彫り物は剣と梵字。国信は南北朝時代(1333～1392)における京都の名工である。広島藩の厳島奉行・松田方好(まさよし)の寄進である。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘文永二年三月清綱 附 革包太刀拵	たち	1口	廿日市市宮島町	昭61.19	鍛え板目、刃文丁子	刃長79.8cm、反り3.7cm	鎌倉時代、文永2年(1265)周防二王派の刀工・清綱の作。鍛造(しのぎづくり)、庵棟で鍛は小板目肌や流れごととなり、刃文は中直刃に小のたれ交りの、磨り上げではあるが、高く堂々とした太刀姿である。堂々と細藍(たがね)がわで書き下し銘がある。 清綱は周防国二王派の刀工であるが、文永2年の紀年銘をもつ清綱は他に例がなく、紀年銘をもつ清綱として貴重である。拵(こしらえ)の柄は黒漆鮫皮で、鞘は黒漆のしほ皮をかけた堅牢な南北朝時代から室町時代初期(14世紀)の作と思われる。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	唐花鬘鶯八棧鏡	とうかえんおうはちりょうきょう	1面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は、伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので、花窓座とも言うべき座が紐の周囲にあり、内外区の界隈もあるが、内外の文様は同一系統であるので自由に連絡している。鶯鶯(雄雌のおどり)と唐花は相対しており、その趣は優雅流麗で、辨抜(ちゅうぶ)も非常にすぐれており、保存も完好な鎌倉時代(1182～1332)における和鏡の逸品である。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	短刀 銘山城国西陣住人埋忠明寿 慶長十三年三月日	たんどう	1口	広島市中区上機町	昭27.3.29			江戸時代、慶長13年(1608)製造の山城国(現、京都府)の刀匠・埋忠明寿(うめたみよしゆ)の作である。彼の作品には短刀が多く、刀身に龍の彫刻を施したものが多く、この短刀に彫りこまれた玉造いの龍の頭は、下あごが大きく角張った受け口で、明寿の特色をよく表している。		
国	重要文化財(工芸品)	銅製釣燈籠 厳島大明神宮燈籠一口筑前国博多講衆等正 平廿一年三月三日在銘	ちゅうどうつりどうろう	1基	廿日市市宮島町	昭29.3.20		高さ28cm、重さ8.4kg	銅の鑄物であるこの釣燈籠は、蓮子窓(れんじまど)を鑄透(いすか)した筒形の火袋の上に、煙出しの孔を半月形に透した花弁形の笠をつけたもので、台の縁は六角形、台下に三足を鑄出し台底に一字溝口を残している。蓋には一面に刻銘がある。南北朝時代の正平21年(1366)に博多商人左近等が厳島神社に奉納したものである。釣燈籠のうち数古の紀年銘があるもので、銘文から考えて、筑前戸屋の鑄物師(いもし)の作と考えられる。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	短刀 銘國廣(号堀川國廣)	たんどう	1口	広島市中区上機町	昭30.2.2			安土桃山時代(1573~1602)の刀匠、堀川國廣(ほりかわくにひろ)の作の短刀。堀川國廣は、日本各地を遊歴して作刀した。慶長年間(1596~1615)の初めから京都一条堀川に住み、多数の門人を抱えて何人も名工を育てた。その豪放な作風で名声を得、慶長19年(1615)死亡したと伝えられる。この短刀には年記がないが、作風から見て彼の円熟期にあたる慶長7~8年(1603-1604)頃のものと考えられている。		
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉文金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禪正明慶寺前宋家造」外 底に「延文六年六月日」の銘がある	くじやくそうきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm、横22cm、高さ25cm	中国南部の杭州で、元の延祐2年(1315)に製作された箱である。その後、日本に輸入され、南北朝時代の延文3年(1358)には浄土寺で嚴勝王経の箱とされた。内側に朱漆、外面に黒漆をほどこし、孔雀文が彫られている。蓋に「首」、身に「性」の文字が彫られ、蓋裏に「延祐二年云々」の黒漆銘、外底に「備後国尾道云々」の朱漆銘がある。元からの舶来品で、製作年代、製作地、製作者が明らかな中国漆芸史上の貴重な遺品で、製作年の明記された[84a]金(日本では沈金と呼ばれる技術)作品としては最古のものである。光明坊(豊田郡瀬戸田町)のものと同様品で、大きさ及び銘文はほとんど同じである。また、浄土寺の孔雀文沈金経箱とは大きさは違いますが、意匠などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉文金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禪正杭州油局橋金家造」 内底に「延祐二年棟梁禪正」の銘がある	くじやくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高さ25.2cm、縦39.8cm、横22.3cm	浄土寺(尾道市)旧蔵のもので、浄土寺にある「孔雀文沈金経箱」(重文)「孔雀[84a]金経箱」(重文)の二合とは姉妹品で、特に後者は大きき及び銘文はほとんど同じである。黒漆塗の面に孔雀と宝相華(ほうそうけ)の文様をきわめて精緻に[84a]金彫りした精巧な舶載の工芸品で、刀技は単純鋭利、形態は素雅な元時代(1271~1368)の漆工の名品である。延祐2年(1315)銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財(工芸品)	漆絵大小拵(陣刀) (小柄前欠)	うるしえだしいょうこしらえ	1腰	廿日市市宮島町	昭30.6.22		(大)総長134.9cm、柄長49.1cm、鞘長101.2cm。(小)鞘長84.0cm。	安土桃山時代(1572~1603)の作で、毛利輝元春鞆と伝えられる拵(こしらえ)一種である。鞘は金箔をおき、その上に黒漆で猿龍(いなりゆう)を描き、透き漆をかけて白檀塗(びやくだんぬり)としたもので、その形は尻鞆をかけたような尻張りの長大華麗な拵である。「常山紀談」で、豊田秀吉が輝元の刀を評して「異風を好む」と言っているのに合致して興味がある作品である。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	大太刀 銘備後国住人行吉作	おおだち	1口	廿日市市宮島町	昭30.6.22	刃文細直刃小乱れ交り	刃長1.41m、反り6.9cm、重量4kg	南北朝時代(1339~1392)の作。鑄造(しのぎづくり)、庵棟で身幅広く、長大豪壮な大太刀である。鍔は小板目肌よくつみ、刃文は細直刃小乱れ交り、表裏に力強く棒樋を掻いている。このような大太刀は、南北朝時代に盛行したものであるが、本品は延文、貞治の頃(1356~68)の三原派の刀工行吉が造った野太刀で、古三原派の作としては典型的かつ最高の作品である。しかもまったくの打ちおろして健全無比のものである。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	銅水瓶	どうすいびょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm、胴径13.7cm。	水瓶は、もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが、供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。この水瓶は、獅子のつみのある蓋がついた鎌倉時代(1192~1332)の作で、志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太首で、肩に水平の面取りを作り、長い注口と把手をつけるという形をしている。この形態の水瓶は法会の際の満(ち)瓶に用いられることもある。		関連施設: 耕三寺宝物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	金銅五鈔鈴 附 金銅五鈔杵 1口 金銅金剛盤 1面	こんどうごころい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製、鑄造品	五鈔鈴／高さ21.5cm、口径8.8cm 五鈔杵／長さ19.8cm 金剛盤／長さ26.1cm	この五鈔鈴は、中帯に輪宝文を、肩帯に独鈷、口帯に三鈴を鑄出している珍しい作で、精緻な細工を施した形姿の美しい鈴である。五鈔杵・金剛盤とともに一具として伝存する鎌倉時代初期(12世紀末~13世紀初め)の製作である。寺伝によると、この一具は白河法皇から西国寺中興の僧慶ばんに下賜されたものという。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	舞楽装束(納骨用) 「天正十七年正月吉日」の朱書銘がある	ぶがくしょうぞく(なぞり)	1領	甘日市市宮島町	昭38.7.1	織り地は薄藍色の綾	丈137cm、折88cm。	舞楽には、左の舞(唐楽系)と右の舞(高麗楽系)があるが、納骨用(なぞり)は右の舞であり、本品はその舞用の装束である。裏地の朱書銘により大塚郡毛利輝元や家臣の児玉美濃守等4名が天正17年(1589)に奉納したもので、右の舞師田豊教が所用したものと思われる。織地は薄藍色の綾で、紺色の松皮裏地(まつかわひしつなき)を全面に施している。両袖の前後と左の前身ごろの下部に、丸に括名袴(かかみょうが)や亀甲花菱、あるいは下り藤紋を入れたものを色糸で刺繍している。類例のない安土桃山時代(1573~1602)の染色品として珍重される。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	狂言装束(唐人用) 纏浴風鳳簫鶯笈文 1領 纏浴風鳳柳桜文 1領 纏浴風桐社字文 1領 纏浴柳樹蟹文 1領	きょうげんしょうぞく	4領	甘日市市宮島町	昭38.7.1	狂言装束	(鳳凰簫鶯笈)丈64cm、折68cm。(鳳凰柳桜)丈74cm、折71.3cm。(鳳凰桐社若)丈72.3cm、折65cm。(柳樹蟹)丈93.5cm、折75.8cm。	狂言の中で今日あまり上演されることがない「唐人相模」という狂言の装束で、袖の長いシャツの前をあわせてボタンでとめるというこの装束が揃っているのは稀である。本品も全部揃っていないが、4領のうち2領は数種類の、他は1種類の纏浴(ぬいほく)を仕立て直したもので、安土桃山時代(1573~1602)の染色刺繍を知る資料となる。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文沈金経箱	くじゃくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm、横36cm、高さ29cm	尾道浄土寺に伝わる元の時代(1271~1368)の作品で、延祐2年(1315)銘の浄土寺所有孔雀[94a]金(くじゃくそうきん)経箱や光明坊所有孔雀[94a]金経箱と意匠がほとんど同じことから、同時代に製作されたと思われる。 印籠蓋造りで、蓋表には黒漆塗を施し、身の長側面に双孔雀、短側面には双尾長鳥文、蓋の側面には唐花文をそれぞれ次金で埋めつつ、蓋の正面に「天」、身の四隅に「性・静・情・造」の文字を篆形彫にしている。蓋と身の内部は未漆である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(工芸品)	赤系威甕(児・大袖付)	あかいとおどしよろい	1領	庄原市山内町	昭45.5.25	黒漆塗本小札・威毛緋糸・立拳前二段・後三段・長側四段・華指脇裾とも四間五段・金具編草所獅子牡丹文染塗色・黒檀塗板・大袖七段・葬金物付・兜鉄阿古陀形黒漆塗四十六枚張四十二間筋鉢・[849]五段・線形・吉字透前立・柵檀板付・鳩尾板欠	胴高33.5cm、胴廻87cm、大袖高47.5cm、大袖巾35cm、兜鉢高12.5cm、兜鉢[丸巾]22cm	日吉神社は、鎌倉時代(1192~1332)に關東から地頭として西遷し土着した山内氏の崇敬が深く、この領は永祿元年(1558)に早山城主山内首藤隆道が奉納したと言われる。黒檀を付け四間の草履(くさずり)を纏れた體で、小札頭(こぶだかしら)が尖(た)がりころで胴は下窄り、阿古陀形(あごたが)の筋兜などから見て室町時代(1333~1572)における末期式正體の特色が強い。鳩尾板を欠失するが、当初の状態を保って伝存することは珍しく貴重で、かつ製作精緻で技巧も優れている。		
国	重要文化財(工芸品)	能装束 紅地鳳凰桜雪持笹文唐織	のうしょうぞく	1領	甘日市市宮島町	昭45.5.25	唐織	身丈138cm、折65.5cm	紅綾地に鳳凰・桜・雪持笹文を横には反逆した形で、縦には打ち返しの形でならべられ、それが色とりどり染められているという唐織という素朴な形をたつものである。袖先の増幅及びその文様などは江戸時代に盛行する能装束の先驅をなすと見られ、同様に伝承する能装束で、安土桃山時代(1573~1602)の唐織としては特色の強いものである。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	赤系威胴丸具足(防児・小具足付)	あかいとおどしどうまるぞく	1領	甘日市市宮島町	昭52.6.11		胴回り105.5cm、兜高20.0cm	南北朝時代から室町時代(1333~1572)にかけて盛行した胴丸形を受け続いた具足で、立拳は前三段、後四段、衝刺は五段となり、兜は当世具足風の変わり兜の種系形で切付れを用いるなど、当時流行の当世具足の特徴が見られる。全身を赤糸で威(むす)いた銅製なので、製作もすぐれており、保存も良好である。毛利輝元所用と伝えられる。安土桃山時代(1573~1602)の作。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	梵鐘	ぼんしょう	1口	甘日市市宮島町	昭52.6.11	銅製	総高122.0cm、口径69.0cm	宮島瀨山の山頂にあり、撞鐘及びその位置、龍頭の製作や形式は平安時代(794~1191)の特色をよく示している。平安時代の治承元年(1177)に平宗盛が奉納した旨の後刻銘がある。		
国	重要文化財(工芸品)	銀小札白糸威胴丸具足(児・大袖・小具足付)附 鍍鍍 1背	ぎんこざねしらいとどしどうまるぞく	1領	甘日市市宮島町	昭60.6.6		胴高36.9cm 兜高34.8cm	厳島神社に伝わる安土桃山時代(1573~1602)の具足。社伝では毛利元就が奉納したものと言われている。兜は烏帽子(えぼし)形に作りその上から鍍鍍を押し広狭二筋(こうさふさすじ)を黒漆で描き頭部を護る[849]形式には孔雀の羽毛を縫いつけた独特のものである。胴は右脇で引合わせて伝統的な胴丸(どうまる)形式によって作られているが、銀箔押の小札(こざね)や正面胸板には銀梨子地(ぎんなしじ)に菊・桐文を金箔で散らすなど、細部には桃山時代の特色がうかがわれる。威毛(おとし)は白糸威であるが、生ぶ糸で刺繍やかな色調を留め、草履(くさずり)と大袖の耳糸のみ萌葱(もえぎ)で威し、これが何となく全体を引き締った感じにしている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	色絵花卉文輪花鉢 伊万里	いろえかきもんりんかはち いまり	1口	広島市中区上機町	平4.6.22	色絵磁器	高11.5cm、口径24.3cm、高台径10.3cm	江戸時代初期、1680年代製作と推定されている色絵の磁器。ドイツのザクセン選帝侯・アウグスト世(1670~1733)の收藏品のひとつであった。日本最大の色絵磁器生産地・佐賀県有田地方で製作され輸出されたもので、特に輸出用最高級色絵磁器として発展した椿右衛門(かきえもん)様式の作品である。型づりによる端正な形と洗練された雰囲気をもつ、椿右衛門様式として技術的・様式的に最も完成されたものである。		関連施設: 広島県立美術館 (082-221-6246)

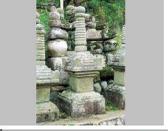
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	能装束 紅浅葱菊笹大内裏文様段替唐織	のうしようぞく べにあさぎじきくさおおうちびしも んようだんがわりからおり	1領	甘日市市宮島町	平18.6.9	唐織	身丈131.5cm、拵66.5cm	表は唐織地、裏は紅平絹(ひらぎぬ)(後補)の袷(あわせ)仕立てである。全体は、紅地に菊・笹・花菱(はなびし亀甲きっこう)の文様を、浅葱(あさぎ)地に大内裏文様を表し、それらを互い違いに配した段替(だんがわり)の唐織である。袖の部分は、江戸時代に両袖の一部に製(きれ)を縫き足して袖幅を出し、文様を補ったが、当初は身幅に対して袖幅が狭く、戦国時代に通例の形態であったことがわかる。全体に唐織と唐織と、文様を並列(あさぎ)は多岐(あさぎ)である。保存状態も良好であり、遺例が極めて少ない戦国時代の能装束唐織の傑品として貴重である。		関連施設: 鹿島神社宝物館 (0829-44-2020)
国	重要文化財(工芸品)	三十二間二方白星兜鉢	さんじゅうにけんにほうしほしかぶ とはち	1頭	呉市広大新開 呉港高校	昭34.6.27		鉢の深さ11.5cm 前後径22.5cm 左右径21.1cm 頂辺穴径3.3cm	兜鉢は、鉄製三十二枚張二方白星兜で大円山形である。前後の真中には金銅の地板を敷き、前5条、後2条の鎌垂を用いているが、前面両端の鎌垂は花先型を二分した片花弁型で、後5条は菊弁型、小刻座に鎌取りした鎌を重ね、中央と片花弁型には12点、その左右には11点、後正中には12点の金銅の星を打っている。地星は鉄一行19点で、腰巻に1点打っている。頂辺の穴は大きく、金銅製の裝飾金具をつけている。本品は前庭(まひさし)と●(革へんに毎、しころ)を欠失しているものの、全体の形、保存の良好な鎌倉時代末期の貴重な星兜鉢である。		連絡先: 呉武田学園法人事務局 (0823-73-4656)
国	重要文化財(工芸品)	色々威腹巻 附 総覆輪筋兜鉢 1頭、黒草威大袖 1双	いろいろおどしほらまき	1領	呉市広大新開 呉港高校	昭40.3.29		胴高28cm 草摺高28cm	この腹巻は、胴前立拳2段、後立拳2段で、長側は4段の裾押りである。草摺は七間五段下がり、下にゆけど境を大きくしている。威毛はよから紫・緑・白で、以下黒草で威され、耳糸は亀甲、耳は啄木、菱鏡は蘭系である。胸板・脇盾・付押は蓮獅子の絵巻に小桜絵が打たれ、金具廻りは金銅覆輪と八双枝透し金物を用いている。兜・大袖を具した室町時代末期の作である。		連絡先: 呉武田学園法人事務局 (0823-73-4656)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘國清	たち(めい)くにきよ)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和25年(1950)8月29日			鎌倉時代(13世紀)の作品。 京栗田口に鍛冶が早い時期から存在したのは『宇治拾遺物語』に「あはたの鍛冶」とあることから推測できる。鎌倉初期に名工六兄弟を輩出したと伝える。 國清は六兄弟の四男というが、現在作品はごく少なく、作風はほかの栗田口鍛冶に相通じるものである。この作は古雅な健全な作で、ほとんど生ふ蓋で推子股となるが僅かに伏せている。江戸時代には秋田佐竹家に伝来した。五代将軍徳川綱吉から天明元年(1811)に三代佐竹義興(よしあき)が贈ったものである。(写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘備前長船兼光 延文三年二月日	たち(めい)びしゅうおさふねか なみつ／えんぶんさんねんにかつひ)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和27年(1952)7月19日		身長88.8 反り2.3 元幅3.6 先幅2.5 鋒長5.6 差長26.0 (cm)	南北朝時代・延文3年(1358)の作品。 備前兼光は長船鍛冶の正統系で南北朝時代に活躍している。作風は動乱の影響を受け、父景光風のものから派(い)つた寧ろのれ刀刃のものへと大きく変化している。 この作は延文三年の年紀があり、時代の様相をよく示した。身幅が広く寸法の長い太刀である。刃文は沸つた直刃(すけ)で地沸がよくつく。 上杉謙信、景勝ともに長寸の太刀を好んだと伝えるように、同家伝来の特色ある一口で、中ほどに刃こぼれがあり戦場での働きを窺わせる。 (写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)
国	重要文化財(工芸品)	短刀 銘光包	たんとう(めい)みつかね)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			鎌倉時代(13～14世紀)の作品。 光包という刀工は京東派の国俊の弟子という。しかし、作品に「来」を冠したものはなく、一説に備前長光の弟子ともいわれる。 作風は、地鉄(じがね)のよつんで穿たれた来国俊に近いものとなり、小溝(こにえ)のよついた直刃(すけ)を焼く。この作は奥州仙台伊達家に伝来したもので、本作と備前松平家に伝来(現東京国立博物館蔵)したものが双壁である。ほかに名物「乱光包」があり、こちらは備前景光風の片落五の目目を模している。 (写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)
国	重要文化財(工芸品)	太刀 銘備前長船盛景	たち(めい)びぜんおさふねもりか け)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			南北朝時代(14世紀)の作品。 盛景は備前長船鍛冶であるが、古来「大宮備前」を呼称され、京大宮から備前へ移住した一派の刀工と伝えられた。しかし、同盛を祖とする大宮物の系譜と盛景は合致せず、現在は真長一近景一義景一盛景と繋がる長船傍系鍛冶とみられている。 盛景は延文(1356～)から明徳(1390～)まで活躍しているが、この作は地刃とともに同工の特色を顕著にした典型作であり、かつ健全である。 (写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)
国	重要文化財(工芸品)	短刀 未銘貞宗(名物未判貞宗) 本阿(花押)	たんとう(しゅめい)さだむね(めいぶ つしゅばんさだむね)／ほんあ(か おう)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和29年(1954)3月20日			南北朝時代(14世紀)の作品。 相州貞宗は彦四郎と称し、五郎入道正宗の実子とも養子とも伝え、作風は正宗に近似するが有銘の作は存在しない、一説に江州高木の出身で、佐々木源氏の一族ともいわれる。 この名物名物「未判貞宗」の名は、本阿弥光遠の未判があることから名付くという。地沸(じにえ)のついた鍛えの厚い刃(か)の両端の乱刃(らん)の同工のものとも見られる。帽子(かぶ)が常と異なり丸く返るが、地刃の出来の良さを評価して貞宗以外には認められないものであろう。 名物には本阿弥光利が所持し、土井大炊頭に移り、徳川秀忠から前田利常が下賜されたことあり、代八千貫といわれる。 (写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)
国	重要文化財(工芸品)	刀 無銘伝来園光	かたな(むめい)でんらい(にみつ)	1口	福山市西町二丁目 ふくやま美術館	昭和31年(1956)6月28日			鎌倉時代(13～14世紀)の作品。 京の「来」鍛冶は諸書には国頼なる者を始祖と記しているが、実質的にはその子と伝える園行が祖であろう。園俊、園次と続くが、園光・園次後は南北朝の動乱のためか、来派は急速に衰退してしまふ。来園光は伝統的直刃の作に加えて、相州伝の影響によるものか刃刃のものがある。この作は前者の作風で、沸(にえ)が細かくよくつく同工の特色をよく表している。鞘書には「代金七拾枚折紙有」を記されており、かなり詳細の記されたものであることが分かる。 (写真・解説は『国宝の刀剣 一秀吉、家康の愛刀など』—『ふくやま美術館編、平成20年』から引用)		関連施設: ふくやま美術館 (084-932-2345)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書後醍醐天皇宸翰心経百九卷(自明和八年/至文化九年)	ごさくらまちてんのうしんかんしんぎょうひやくきゅうかん	1巻		昭10.4.30	紙本墨書		江戸時代の女性天皇である後醍醐天皇(1740～1813、在位1762～70)によって、上皇時代の明和8年(1771)から文化9年(1812)にかけて書写された一行五段書きの「南無阿弥陀仏」の六字名号である。奥書には、「今の世にあらはとさしにあらふよ、めくみの露のかすかにすいて、明和八年四月廿三日 智子上止あるなど、書写の年号、「智子 上」の記載のほか、ところどころに和歌が添えられている。後醍醐天皇は、名を智子(としこ)といひ、文筆や歌道に優れ、宸記(日記)・宸翰・和歌などが数多く伝世している。この宸翰は、天明の大火(1788)で後醍醐上皇の仮の御所となった青蓮院に伝来した。		
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書後醍醐天皇宸翰六字名号(自明和八年/至天明七年)	ごさくらまちてんのうしんかんろくじみょうごう	1巻		昭10.4.30	紙本墨書	縦31.5cm、横257cm	江戸時代の女性天皇である後醍醐天皇(1740～1813、在位1762～70)によって、上皇時代の明和8年(1771)から天明7年(1787)にかけて書写された一行五段書きの「南無阿弥陀仏」の六字名号である。奥書には、「今の世にあらはとさしにあらふよ、めくみの露のかすかにすいて、明和八年四月廿三日 智子上止あるなど、書写の年号、「智子 上」の記載のほか、ところどころに和歌が添えられている。後醍醐天皇は、名を智子(としこ)といひ、文筆や歌道に優れ、宸記(日記)・宸翰・和歌などが数多く伝世している。この宸翰は、天明の大火(1788)で後醍醐上皇の仮の御所となった青蓮院に伝来した。		
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書御判物帖	しほんぼくしよこははんもつちょう	2帖	廿日市市宮島町	明32.8.1		長さ510cm、横25.3cm	平安時代の天喜元年(1053)以降、安土桃山時代の天正15年(1587)までに厳島神社宛に発給された古文書群の一部。特に重量とみられた各時期の証文(判物)類を中心に70通の文書を冊子の折帖に集録する。年代順に第一帖に36通、第二帖に34通を収める。ほとんど原文書だが、7通は同時代をあまりへたでぬ時期の写しである。 平安時代の高田郡司藤原氏が、郡司職相伝の由緒によって高田郡七郷を私領化し、ついに厳島社領として寄進したことを示す一群の文書は、当時の土地支配の推移を知るうえで貴重である。鎌倉時代の貞応2年(1223)の厳島神社領の移譲のや、鎌倉時代の奉祝(神社から寄進家への奉進)上に関するものも注目される。南北朝時代(14世紀)以降のものは足利尊氏、大内義隆等の造営領・社領の寄進状が中心であるが、社領相論に関する室町幕府の裁許状も含まれている。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書親世法楽和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしよかんぜおんほうらくわか	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙、紺紙金泥		足利尊氏は建武政府に反して間もなく九州に敗走したが、その途中浄土寺に船を寄せて本尊の観世音菩薩に敬進回向祈願している。その後数ヶ月で勢を回復した足利氏氏が上洛の途中の建武3年(1336)5月5日、再び浄土寺観音堂に参拝した時、尊氏と弟の直義等6人が本尊十一面観音菩薩の前で、観音賛仰の和歌33首を詠じて宝前に供えたものである。この中に尊氏の詠歌は7首で、巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金泥宝篋印陀羅尼経 道喜ノ序アリ	こんしきんでいほうきょういんだらにきょう	1巻	広島市西区己斐西町	明43.4.20	八曲屏風裏書		平安時代・康保2年(965)に僧道喜が伊豆の寺においてこの経を感得し、自ら紺紙に金泥で書写した経。その後、現在の佐伯区内の寺院に伝わった後、西福院七世増真上人(江戸時代、17～18世紀初頭の人物)によって西福院にたもたせられた。1行17文字で、罪障・文を七に金泥で描かれ、装飾的にも優れた装飾経である。巻首五十字を欠くが、書写の由来を記した宝篋印経記が巻頭にあり、貴重である。 ※宝篋印陀羅尼経…これを書写し読誦(どくしょう)するか、あるいはこの経巻を納めた宝篋印塔を礼拝すれば、罪障は消滅し、三途の苦は免れ、寿命長遠であるなど無量の功徳を説いた経。 ※金泥(きんでい)…金粉をかわで溶かした顔料		
国	重要文化財(典籍)	紺紙金泥金剛壽命陀羅尼経 平親宗筆	こんしきんでいこんごうじゅみょうだうらにきょう	1幅	廿日市市宮島町	明43.4.20	紙本墨書	縦33.2cm、横918cm	平安時代の治承2年(1178)4月24日に、平親宗が厳島島の船中で写経した旨が奥書に記されている。親宗は、平清盛の妻時子及び建春門院滋子と兄弟である。 経巻は、金泥に宝相華草文の表紙に、見返し絵は山水と弥陀説法の図が描かれている。文字はすこるる連筆であるが、装丁などに破損・欠損がある。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書尊海渡海日記(八曲屏風書) 表二紙本墨画山水図アリ	しほんぼくしよそんかいといにきき	1隻	廿日市市宮島町	明43.4.20			戦国時代の天文6～8年(1537～1539)大内義隆の斃没により、大願寺の尊海が高麗(こうらい)版大蔵経(だいざうきょう)を輸入するために朝鮮半島へ渡った際の記録。かの地で求めた高麗の八曲屏風の裏に、李朝朝鮮の役人たたとの交渉を中心に見聞を書きつけたものである。記録史料として貴重であるとともに、表の湘灘(しょうたん)八景の墨画も、李朝朝鮮時代初期(15世紀)の朝鮮絵画の基準作例として貴重である。 大願寺は厳島神社の西南にある。厳島神社社殿の造営修理に係っていた。		東京国立博物館で保管
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書定証起請文 嘉元四年トアリ 附 同案文(残簡)1通	しほんぼくしよじょうしゅうきしょうもふん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の交書、紺紙金銀泥	縦27.5cm、横671cm	鎌倉時代の嘉元4年(1306)、真言律宗の西大寺敬尊(1201～1290)の弟子定証が浄土寺の伽藍を再建した時の自筆起請文である。 定証以前の浄土寺は紀州高野山に所属し、尾道の入光阿闍梨の外護によって本堂・五重塔・多宝塔・地蔵堂・鐘楼などが建てられていたが、尊尊の増信もあつて建てられた。浄土寺が定証に寄進されると彼の転進によって更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され、広範な地域の人々の信仰を集める活気のある寺となったことが記されている。 文書は更に続き、嘉元元年(1303)の食堂落成のほか、嘉元4年に行われた盛大な落成供養の次第も詳細に記され、その文書中に見える定証の朱色の手印があざやかである。当時の盛衰を知る資料である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書浄土寺文書 寺領注文建武四年十月日トアリ1通、尊氏寄進状外9通	しほんぼくしよじょうしよどもんじょ	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm、横1180cm	浄土寺に所蔵されている中世文書115通のうち11通である。浄土寺領因島地頭方年貢注文や足利尊氏寄進状、足利義教御判御教書など、南北朝時代(14世紀)から室町時代前期(15世紀前半)の古文書の一部である。 年貢注文は、浄土寺領因島(因島市)にある中庄・重井庄・三津庄地頭方の建武4年(1337)の年貢数量の注進状で、文中の年貢の中に千六百六十五石三斗五升六合(八百三十二石八斗六升五合)にのなる多量の穀物があられる点が注目される。尊氏寄進状は浄土寺におかれた備後国利生塔に對し、備後得良郷(賀茂郡大和町)の地頭職を寄進するものである。 なお、後醍醐天皇繪旨(りんじ)をはじめとする残る104通は県指定重要文化財である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥法華経巻第七 天曆三年/奥書ア)	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm、横92.4cm	平安時代中期(10世紀)の裝飾経。法華経の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し、後段は金泥(きんでい)書きにしたものである。巻末に、天曆3年(945)6月22日に紀則常と女性の物部氏が増主として奉仕した旨の奥書があり、平安時代中期における金銀文書(こうしよ)経として注目される経巻である。 軸端は、撥型(ばちがた)で、鍍金魚々子(とぎんなご)地宝相華文である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経巻第九十九 「薬師寺印」朱印並二「薬師寺金堂」ノ黒印ア)	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm、横35.8cm	「魚養経(ぎょようきょう)」と呼ばれる古くから朝野尊尚魚養(うおや)海願經と伝えられるものの一巻で、奈良時代(8世紀)の代表的な写経のひとつである。魚養は奈良時代末から平安時代初期(8世紀終り～9世紀初め)にかけての人物で、医者であり能書家として知られる。 もとは奈良薬師寺に伝わったもので、天平宝字9年から宝龜元年(765～770)に写されたと言われる。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息 (青蓮院宛)	しほんぼくしよおおぎまちてんのうしんかんみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明10.4.30	綴葉装、平板名	縦14.4cm、横124cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇、正親町天皇(在位1557～1586)が京都の青蓮院(しょうれんいん)門跡(もんぜき)に宛てた書状である。新年のお祝いに對して返礼を述べたもので、ちらし書きで記されている。 正親町天皇は、天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をおこなったこと知られる。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書陽光院御筆御消息 (五月十五日青蓮院宛)	しほんぼくしよこういんおんひつみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明10.4.30	紙本墨書、折本	26.0×10.8cm(第1巻表紙)	陽光院は正親町天皇の第一皇子・顕仁(さねひと)親王の死後に追贈された尊号である。織田信長によって次代の天皇候補とされ、信長の死後も即位真近かと見られていたが、天正14年(1586)に病没した。 天正13年(1585)、顕仁親王が青蓮院尊朝親王にあてた書状で、大和の多武峯(とうのみね、奈良県)が勅願所であることから、天下が静まったこの時に内大臣・豊臣秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書別興弘願性戒鈔	しほんぼくしよべつこうがんしよけいしょう	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明10.4.30	表紙は宝相華唐草文、見返し絵。軸は鍍金撥形。	縦25.8cm、全長85～148cm	鎌倉時代(1192～1332年)の天台座主(ざす)・慈円(1155～1225年)が筆者と伝えられる書籍。京都・青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土宗系統の法書の一冊である。 綴葉(てっしょう)装で、別興弘願すなわち弥陀四十八願について往生礼讃及び観経疏の注釈を加えたもので、平板名書きであることは、鎌倉時代の念仏思想の一端を示す好資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり史書「愚管抄」の著者として知られる。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	大般若経 (自弘安七年至同十年宋人謝復生一筆経)	だいはんにゃきょう	600巻	三原市本町	昭27.3.29	表紙は宝相華唐草文、各巻に見返し絵。軸は鍍金撥形。紺紙金字	縦25.6cm、全長75.5～135cm	鎌倉時代の弘安7年～10年(1284～1287)にかけて写された一筆大般若経である。奥書によると、宋の建康府の人謝復生が弘安7年5月から33か月余を費し、周防国楊井庄上品寺(やないのしょうじょうほんじ、山口県柳井市)において書写したことが知られる。 長享2年(1488)8巻が補写され、元和7年(1621)三原の八幡元重によって正法寺へ寄進された。 今は折本であるが、もとは巻本であった。 正法寺は真言宗仁和寺末(親、御室派)で、三原築城に際して沼田庄(沼田東町)から移された寺である。 一筆大般若経とは一人の人物によって写されたものをいう。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金字大方等大集経 附 黒漆塗経箱 1合	こんしきんじだほうとうだいじゆきょう	50巻	廿日市市宮島町	昭30.2.2		縦25.5cm、全長58.7cm	平安時代後期(11世紀後半～12世紀)の写経で、大方等大集経(だいほうとうだいじゆきょう)30巻、大集日藏経10巻、大集月藏経10巻からなる。 表紙は宝相華(ほうそうけ)唐草文に見返しには紺紙に金銀泥で經典の意味を示す経絵が描かれ、軸は鍍金撥金具(とぎんばちかなぐ)で装束されている。経紙縫界に金字で記されている。装幀は華嚴経と同手法で、おそろく合わせて、五部大集経として奉納されたものであろう。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金字華嚴経 附 黒漆塗経箱 1合	こんしきんじけこんきょう	56巻	廿日市市宮島町	昭30.6.22 昭54.6.6 (追加指定)	綴葉装、料紙ノ斐(権交浦)紙、押界、首尾欠、本文「丹タム」云々より存す	縦17.1cm、横16.5cm	平安時代後期(11世紀後半～12世紀)の裝飾経。本来は60巻本であるが4巻が失われている。 経紙に経絵で身經を描き、金字で記す。表紙は宝相華(ほうそうけ)唐草文で裝飾され、軸端は鍍金撥金具(とぎんばちかなぐ)が用いられている。見返しには金銀泥で経絵が描かれている。 大方等大集経とあわせ、五部大集経として奉納されたこと推測されている。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
国	重要文化財(典籍)	真之家歌合	つらゆきけいたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書	縦28.3cm、全長9.22cm、	歌合(うたあわせ)とは、平安時代初期(9世紀前半)以来宮廷や貴族の間で流行した遊戯で、左右に分れた歌人がその詠んだ歌を右一音ずつを組み合わせ、優劣を争いその多少によって勝負を競う遊びである。 この一巻は、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)、藤原忠通の命で仁和年間から大治年間(885～1131)に行われた歌合を類別聚集した「類聚歌合」20巻本の巻十七の一部である。筆者の確証はないが、藤原俊忠筆と伝えられる「二条切(にじょうざり)」の一つである。 天慶2年(930)高節頼房で催された紀貫之(きのつらゆき)家の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で、和歌資料として貴重ものである。 ※紀貫之(868?～945?)…平安時代初期の歌人		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	臙物集(うたつえ)	ふしものしゅう(うたつえ)	1帖	廿日市市宮島町	昭54.6.6	紙本墨書	縦ノ九寸一分(27.57cm)、全長ノ百八十尺五寸(5469.69cm)	鎌倉時代後期(13世紀後半)に成立した、連歌歌物集の現存最古の写本。首尾を失っているため、書名は不明である。後につけられた表紙に「歌集」と記されている。臙物(ふしもの)とは連歌(れんが)の漢語(はいし)用語で、百韻にある種の統一を求めめるために句ごとに指定された語句を読み入れるものであり、臙物となる熟語を集めたのが臙物集である。臙物は鎌倉時代(1192~1332)には行われていたが、南北朝時代(1333~1392)以後は発句(はっく)だけ入れられるようになり、近世には全く行われなくなった。この資料は、鎌倉時代の連歌の様子を伝える貴重な書物である。		
国	重要文化財(典籍)	伊都岐嶋社内宮調度等注進状草案(嘉禄三年三月) 紙背嘉禄二年具注曆	いつきしましやないぐちようどうちゅうしんしゅうそうあん	1巻	廿日市市宮島町	昭54.6.6	紙本墨書	縦ノ九寸一分(27.57cm)、全長ノ百二十尺(3636.36cm)	新たに造営された蔵島神社の新社殿に具備すべき荘厳調度・金銅金物以下の品名・規格・数量を列挙したものである。鎌倉時代の嘉禄3年(1237)に書かれたもので、差し迫って必要な調度等の予算書ともいべき性格のものである。嘉禄2年(1236)の注進曆(ちゅうしんりき、暦日の下にその日の吉凶や季節の変動などを詳しく注記した曆)の裏を利用している。		
国	重要文化財(考古資料)	安芸福田木ノ宗山土青銅器 福帯文銅鐸 1点 銅釜 1点 細形銅剣 1点	あきふたきのむねやましゅうつせいじゆき	3点	広島市南区宇品御幸	昭27.1.19		銅鐸ノ高さ19cm 銅釜ノ長さ29cm 細形銅剣ノ長さ39cm	明治24年(1891)に、光町辰三郎氏が木の宗山の島帽子岩(広島市東区福田町)の下から銅鐸、銅剣、銅釜(どうか)が弥生土器と一緒に発見したと言われている。このような出土状態はきわめて稀で、後に近畿を中心に分布する銅鐸と北部九州を中心に分布する銅剣、銅釜とが共存したことを証する貴重な資料である。このような銅鐸は「福田型銅鐸」とも言われ、九州、中国地方に分布し、数多い銅鐸の中でも形態及び特異な文様から見て古い段階の銅鐸とされている。		
国	重要文化財(考古資料)	日向国児湯郡特田古墳出土品 面文帝神獸鏡1面、変形四獣鏡1面	ひゅうがのくにこゆくんもちこふんしゅうつひん がもんたいしんしゅうきょうへんけいししゅうきょう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	面文帝神獸鏡(中国鏡、平縁、四神四獣鏡) 変形四獣鏡(倭製)	面文帝神獸鏡ノ直径21cm 変形四獣鏡ノ直径20cm	特田古墳群第25号墳(宮崎県児湯郡高鍋町特田)出土の青銅鏡。 面文帝神獸鏡は、中国六朝(りちちゅう)時代(3~7世紀はじめ)の鑄造と思われる平縁の四神四獣鏡で、紐(ちゆう)をとりまいて有筋垂弧文(ゆうせつしゅうこもん)があり、その内区に神像龍虎を大きくあらわし、それらの間に隣接する数多の神人禽獸(じんしゅう)が鑄出されている。内区には半円方形帯、外区に内側に表形文帯を、外側には変形文帯をめぐらしている。銘文がある。 変形四獣鏡は、倭製鏡とされ、内区に四獣頭部には又角(しゃく)が認められ、外縁に「火竟」の二文字を鑄刻(こく)している。 ※特田古墳群…5~6世紀の古墳群		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(考古資料)	広島県矢谷古墳出土品 玉類 碧玉管玉珠文共 5箇 ガラス小玉 3箇 鉄ヤリガンナ 1本 鉄刀子残欠 2口(以上主体部出土) 特殊壺 1箇 特殊器台 2箇分(以上周溝出土)	ひろしまけんやだにこふんしゅうつひん		三次市小田幸町	平6.6.28			これが出土した矢谷古墳(史跡、三次市東涌屋町)は、三次盆地南縁の丘陵上にある弥生時代後期末から古墳時代初頭(3世紀)の四隅突出型前方後方形の墳墓である。 出土品は、最も規模の大きな木箱から出土したガラス小玉・碧玉管玉(へきぎょくたまたま)、他の埋葬施設から出土した(やりがんな)や刀子(てさず)片などのほか、墳丘上や周溝内から出土した鼓形器台(つづみかたたい)、壺・壺(かめ)及び特殊器台・特殊壺の土器類である。 特殊器台は、埴輪の前身とされ、弥生土器の器台が大きく伸張し、葬送儀礼における供献用具として、特殊壺との組合せて独自の進化を遂げたものと考えられ、その分布は岡山県を中心に、広島県東部から山陰地方の一部に及ぶ。 矢谷古墳出土品は、古墳出現前に掲げる墓のあり方(葬送儀礼)、吉備と出雲との関係を推測することができる好例である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
国	重要文化財(考古資料)	広島県草戸千軒町遺跡出土品 土器・土製品 1400点 木製品 632点 漆器 193点 漆器 79点 石製品 310点 金属製品 238点 骨角製品 76点 繊維製品 2点	ひろしまけんくさどせんげんちゆういせきしゅうつひん		福山市西町 県立歴史博物館	H16.6.8			福山市を流れる芦田川下流の河川敷に広がる中世の港湾都市跡からの出土品である。土師質土器等の日常雑器から中国・朝鮮産を含む各種の陶磁器、下駄や羽子板、付札等の木簡や呪符、漆器等の木製品、刀道具や手舂・銅鏡等の金属製品、笠・蓑付等の骨角製品で構成される。これらは、衣食住の全体に係わる当時の庶民生活を復元する上で貴重な内容を持っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)
国	重要文化財(考古資料)	広島県安芸園分寺跡土坑出土品 木簡 82点 墨書土器 42点 土器 78点 木器・木製品 50点	ひろしまけんあきこくぶんじあどこらうしゅうつひん	252点	東広島市西条町	令和5.6.27			安芸園分寺跡にて発見された木簡、土器等多量の遺物が埋められた大型土坑(どこう)からの出土品一括、全252点。 木簡、土器、瓦、服飾具や祭祀具などで構成され、園分寺(こくぶんじ)建立(こんりゅう)の詔(みことり)(741年)から9年目である「天平勝宝(てんぴょうしょうほう)2年」(750年)の紀年がある木簡をはじめ、「安居(あぐ)」、「齋会(さいえい)」などの仏教行事や、「佐伯郡(さきぐん)」、「山方郡(やまがたぐん)」など安芸園内の郡名が記された墨書土器、角筆や物指などの木製品が目立つ。これらは、園分寺で勤修された善法会(ぜんぽうかい)で用いた物品や祈札などを一括で廃棄したものと考えられ、当時の仏教行事の一端を示す資料として、学術的価値が高い。		関連施設: 東広島市出土文化財管理センター(082-420-7800) 写真提供: 東広島市教育委員会
国	重要文化財(歴史資料)	阿弥陀経木板 2枚 嘉禄二年自七月十六日至八月十七日開版 法華経普門品木板 2枚 嘉禄二年自九月十八日至十一月廿二日開版 金剛壽命陀羅尼経木板 1枚 嘉禄三年五月廿一日開版	あみだきょうばんぎ・ほけきょうばんぎ・こんこうしゅうみょうだらにきょうばんぎ	5枚	三原市八幡町宮内	昭60.6.6	板、桜材	縦25.0~27.0cm、横78.0~83.2cm	鎌倉時代の嘉禄2年(1236)製作の木板。阿弥陀経は「四紙経」と呼ばれるが、両面彫り二枚で全文を刻んである。「嘉禄二年丙七月十六日始之、同歳八月十七日畢、願主安那定親」の刊記がある。巻首に「妙法蓮華経世尊普門品」とあり、刊記は「嘉禄二年丙九月十八日始十一月廿二日畢、但為法華発生父母尊、願主口氏」とある。巻首に「仏眼一切如来金剛壽命陀羅尼経」とあり、刊記は「嘉禄三年丁酉五月廿一日、願主定親」とある。安那定親は嘉禄年間(1225~1227)にも春日版大説若経を刷り写したとされる人物。 この三種の木板は、最古の地方版として存在価値があり刊行年代が明確、板木そのものが伝存していることから印刷史上貴重な資料であるといえる。		関連施設: 御領八幡宮宝物収蔵庫(0848-65-8652)
国	重要文化財(歴史資料)	身幹權(星野木骨)附 木箱	しんかんぎ(ほしのもつこつ)		東広島市鏡山	H16.6.8	木造、胡粉塗り仕上げ		江戸時代後期の広島医師、星野良悦(ほしりのりょうえつ)が漢語の解剖で得た人骨により、工人原田孝次に模刻させた木製の人体骨格模型である。寛政4年(1792)ごろの製作と推定されている。寛政10年(1798)江戸で杉田玄白(すぎたげんぱく)・大槻玄沢(おつぎげんたく)ら蘭学者からその精巧さを絶賛され、さらに8436544号を作成し寛政12年(1800)幕府の医学館に献上した。人体の骨格構造を 精密に知る機会を与え、江戸時代の医学・蘭学の発達に寄与した点で、医学史上重要である。 ※星野良悦 1754~1802、広島医師		関連施設: 広島大学医学資料館(082-257-5099)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考	
国	重要文化財(歴史資料)	岩倉具視関係資料	いわくらともみかんけいしりょう	1707点	廿日市市大野	H25.6.19			岩倉具視(1825～1883)宛での書翰(しょかん)や意見書・報告書類、及び岩倉の書翰草稿からなり、約1,700通を数える。 本資料群は、岩倉宛での三条実美(さんじょうさねとみ)、大久保利通(おおくほとしみち)、木戸孝允(きとたかよし)や伊藤博文(いとうひろふみ)書翰類が量的に充実し、幕末の政局、明治新政府の樹立、東京遣部、薩長直隼、岩倉遣欧使節、西南戦争など激動する当該期の政治の動向を伝える重要な一次資料群である。 既指定の岩倉具視関係資料と相俟って、岩倉具視の事績を知るうえのみならず、幕末維新期の政治史研究上に学術的価値が高い。		関連施設: 海の見える杜美術館 (0829-56-3221)	
国	重要文化財(歴史資料)	菅茶山関係資料	かんちゃざんかんけいしりょう	5,369点	福山市西町二丁目4-1 広島県立歴史博物館	H26.8.21			菅茶山(1748～1827)は、教育者として備後国神辺に黄葉夕陽村舎を開設して人材の育成に尽力するとともに、漢詩人として活躍した。その詩集『黄葉夕陽村舎詩』は同時代人に高く評価され多くの学者・文人と交友を結んだ。 本資料は、茶山が詠んだ漢詩集の草稿などの各種草稿類をはじめ、日記類、典籍類、書状類、茶山に贈られた書画・器物(きぶつ)類などの一括資料である。 菅茶山の儒者・漢詩人としての思想・思索及びその形成過程を知ることで最も重要な資料であるとともに、茶山を中心とする近世の文人の交友を具体的に示す貴重な資料である。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)	
国	重要文化財(歴史資料)	広島頼家関係資料	ひろしまらいけかんけいしりょう	5,547点	広島市中区袋町5-15 頼山陽史跡資料館	R6.8.27			著述校本類 65点 文書・記録類 3,483点 書状類 1,587点 絵図類 41点 典籍類 124点 書道類 78点 器物類 169点		関連施設: 頼山陽史跡資料館 (広島県立歴史博物館分館、082-298-5051)	
県	重要文化財(建造物)	結界石	けっかいせき	3基	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23		石造、一基は折損している。花崗岩製。	各高さ88.5cm・幅27.6cm。		今高野山の結界石で、もとは四至(し)に立てられていたものの一部である。現在は境内の1か所まとめて保存されている。 その中の1基には「大界外相北方」、他の1基には「大界外相西方建武五年戊寅九月八日」の刻銘がある。「建武五年(南朝年号、1338)」は8月28日に改元され「暦応元年」になっていたが、結界石建立時にその情報が伝わっていなかったことが分かる。 結界石とは、仏道修業等の障害になるものが入ることを許さないため、寺域を標榜した石柱である。	
県	重要文化財(建造物)	熊野神社宝蔵	くまのじんじやほうぞう	1棟	三次市品敷町	昭28.10.20		杖倉、入母屋造、椽瓦葺	杖子(あぜこ)の断面形式や材料の古さ、風蝕のくあい、それに杖子上の斗組(ますくみ)の風格等から考えて、室町時代末期(16世紀)に三吉氏によって寄進建築されたものと思われる。床下及び軒以上の屋根は後世の改修である。 椽板(けいいた)に研粉(ごみん)下地の土上に意で絵が描かれ、入母造(いもやつくり)に向拝付(こはい)という屋根の形態とともに、杖倉建築では珍しいものとなっている。 熊野神社は旧名若一王子(わかいちおうじ)神社と言い、中世にはこの地方の領主であった三吉氏の尊業をうけていた。			
県	重要文化財(建造物)	多家神社の宝蔵 附 神輿 1	たけじんじやのほうぞう	1棟	安芸郡府中町上宮の町三丁目	昭29.4.23		杖倉、入母屋造、椽皮葺	もと広島城三の丸(現在の広島市中区)の稲荷社にあつたもので、江戸時代初期の元和年間(1615～1623)、浅野氏が広島に入封した時に建立されたと言われる。明治初年藩主浅野氏から寄進され、現存唯一の広島城関係の建物となっている。向拝(こはい)がついて中に大きな神輿(みこし)が納められている。 杖子(あぜこ)組手の外の部分が方形であることは、極めて異例である。日本に残存する30余棟の杖倉は、いずれも杖子が三角(表側中央に線線があるが裏は平らである)に削られたものであるが、この多家神社杖倉は、杖子組手の部分が四角(表裏に線線がある)である。			
県	重要文化財(建造物)	弁天島塔婆(九層石塔婆)	べんてんじまとうば(きゅうそうじょうば)	1基	福山市朝町弁天島	昭29.9.29		石造九重塔、花崗岩製	高さ37.1m	額の対岸、弁天島に建つ九層石塔で、鎌倉時代(1192～1332年)の文永8年(1271)銘がある。 もとは十一層で、第五層と第六層が欠失したと思われる。第四層の上部が不自然になっている。各各ごとに低い輪郭を作り出しており、料は厚く、力強い反りは階層で適度に反転している。初層輪郭に葉形彫で彫られた金剛界四仏の種子と記年銘がある。鎌倉時代の手法を十分発揮したすぐれた作品で、県内最古の石塔婆でもある。相輪は惜しくも上半分を欠失している。		
県	重要文化財(建造物)	萬福寺塔婆(七層石塔婆)	ばんふくじとうば(ななそうじょうば)	1基	世羅郡世羅町堀越	昭29.9.29		花崗岩製 七層	高さ41.9m	この層塔は、鹿寺跡の西の尾根線上にあり、南北朝時代の応安3年(南朝年号、1370)藤原行光を大工として建立されたものである。基壇に刻銘をもち、基壇の地下に一室一石の礎を納めている。 万福寺跡は三方を小丘に囲まれた小さな谷間にある。中世には架えた寺院であつたと思われるが、現在は一部の礎石や石塔類をわずかに残すのみである。		
県	重要文化財(建造物)	安楽院本堂 附 三門 1棟	あんらくいんほんどう	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭30.1.31		寄棟造、書院造	桁行12.3m、梁間11.0m	この建物は、もと地元有力者の住宅として建造されたものを寄進し寺院としたものと思われる。室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の住宅建築を知る上で貴重な遺構である。また、当初の位置に立つ付の山門1棟は、四脚門で安土桃山時代(1573～1602年)の建造。冠木(かぶぎ)上の墓段(かえるまた)は時代色をよく表している。 安楽院は今高野山の子院で、もとは今高野山麓門から龍華寺へ至る坂の左手にあつた。昭和29年(1954)、近所からの出火により一層焼損したため、昭和40年(1965)に現在地の大師堂隣へ移築された。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	明王院三門	みょうおういんさんもん	1棟	福山市草戸町	昭30.3.30	桁行4.58m、梁間3.71m、四脚門、切妻造、本瓦葺		石段上に建つ四脚門である。慶長19年(1614)再建だが、現在の山門の建築材は新旧二様に分かれ、再建以前の門の部材が使われている。慶長19年のものと思われるのは建物の上半部である斗[84a]と(きょう)、軒、屋根などであり、軸部材である慶長棟(はらげし)、台輪、方立(ほうたて)などは、材質や技法などから室町時代(1333～1572年)のものと思われる。		
県	重要文化財(建造物)	青目寺塔婆(五層石塔婆)	しょうもくじとうば(ごそらいしとうば)	1基	府中市本山町	昭30.3.30	石造五層塔、花崗岩製	高さ2.09m	鎌倉時代の正応5年(1292)源業を願主に建立された5層の石塔である。基礎に年号の刻銘がある。形の整った美しい石塔である。青目寺は寛保3年(1743)に現在地に移ったと言われるが、この塔もその折に移されたと思われる。青目寺は府中平野の北側にある山腹にあり、弘仁4年(813)四国屋島寺の青目上人が開祖したと伝えられる天台宗の寺院である。はじめは背後の龜ヶ岳の山頂にあったが、南北朝の争乱後衰微し、寛保3年(1743)には山上の禪坊の仏像などを現在地に移したと云う。		関連施設: 青目寺収蔵庫(0847-45-4459)
県	重要文化財(建造物)	宝蔵寺宝篋印塔	ほうぞうじほうきょういんとう	1基	庄原市本町	昭30.9.28	花崗岩製	高さ1.8m	この塔は、地毘庄(じびのしょう)の地頭山内氏の祈禱所であった宝蔵寺にある。基礎に延文4年南呂(1359・8月)という北朝年号をもっているが、上下町安福寺の南朝年号の宝篋印塔と共に、当時のこの地域の情勢を知る資料となる。		
県	重要文化財(建造物)	日吉神社宝塔 正和四年五月八日の刻名がある	ひよしんじやほうとう	1基	府中市本山町	昭32.2.5	石造、花崗岩製	高さ1.5m	塔の源流は仏舍利を納めたインドのストゥーパ(卒塔婆)に始まると言われ、大乘仏教の伝来地においてはその仏舍利を納めた塔を高くすることにより、釈迦への崇敬の念を示したと言われるが、宝塔は原初の形をよく止めた形状をしている。日吉神社は青目寺(しょうもくじ)の守護神として近江から勧請されたもので、その神社の背後に宝塔がある。南北朝時代の正和4年(1315)の刻銘をもち、基礎の下には備前焼のかめが埋められていた。		
県	重要文化財(建造物)	沼名前神社鳥居 寛永二年黄梅吉良日の刻銘がある	ぬなくまじんじやとい	1基	福山市朝町後地	昭32.2.5	石造	高さ5.47m	沼名前神社は額紙園社とも言い、式内社である。備後風土記には疫禍(えのくま)の国の社と記されている。この鳥居は寛永2年(1625)福山藩主・水野勝重が長子勝貞の誕生により、その息災延命のため寄進したものである。笠木の上に鳥ぶすま形がのせられている点が特異な形式である。		
県	重要文化財(建造物)	粟島神社鳥居	あわしまじんじやとい	1基	世羅郡世羅町甲山	昭32.2.5	石造	高さ2.18m、笠の長さ2.20m	粟島神社は安楽院の鎮守で、その境内地に祀られている。柱に「ころび(柱上部が内側に傾くこと)がなく直立している古式のものである。右石柱裏面に「康暦二年二月十三日」の銘をかすかに読みとることができるが、風化して不明なのは惜まれる。小さいが古拙な感じのする鳥居である。 ※康暦2年=1380年		
県	重要文化財(建造物)	宝篋印塔	ほうきょういんとう	1基	福山市新市町厚山	昭33.1.18	石造、花崗岩製	高さ1.3m	宝篋印塔の名称は、古く「宝篋印陀羅尼經」を納めたことによるが、その後供養のためや墓石として用いられるようになった。この石塔の基礎には刻銘があり、南北朝時代の康暦2年(1380)に宗禅という僧侶の供養のため建てられたのが分かる。		
県	重要文化財(建造物)	今高野山総門	いまこうやさんそうもん	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭34.10.30	四足門、切妻造、棧瓦葺		墓殿(かえるまた)、頭貫(かしらぬき)上の絵様肘木(えようひじき)、懸魚(けぎょ)等から判断して、室町時代末期(16世紀後半)の建立と考えられる四脚門であり、北面して参道入口に建っている。今高野山一山の総出入門であったといわれ、門から龍華寺にいたる道の両側にはかつての塔頭の跡が並んでいる。今高野山は、大田庄が紀州高野山の荘園となった文治2年(1186)以降に創建されたと考えられている。大田庄は高野山の大きな財源であったため、その勢力の拡充を目指し、大伽藍を建て、高野山の守護神である丹生、高野阿明神をも勧請して新しい高野山という意味で今高野山と命名したという。		
県	重要文化財(建造物)	万年寺僧侶墓碑 無縫塔(銘扶岩) 同(銘長安) 同(無銘) 墓碑(銘永禄四年風庵隣禅師) 同(銘平翁均禅師) 宝篋印塔(銘天文十六寿岳崇榮) 五輪塔(無銘)	まんねんじそうりょうぼひ	7基	世羅郡世羅町川尻	昭34.10.30		無縫塔(扶岩)高さ1.03m。 無縫塔(長安)高さ0.7m。 無縫塔(無銘)高さ1.39m。 墓碑(永禄四年)高さ1.06m。 墓碑(平翁均禅師)高さ1.07m。 宝篋印塔 高さ1.18m。 五輪塔 高さ0.94m。	万年寺は鎌倉から室町時代(12～16世紀)にかけて栄えた臨済宗仏通寺の寺院で、廃寺となっていたが、三川ガムの建設と共に水没し、残存する石塔群はガムの中にある小島に移され保存されている。移転した石塔類は多いが、その中の七基は中世禅宗墓制を研究する上で貴重な資料である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	石造五輪塔	せきぞうごりんとう	1基	三次市布野町上布野	昭36.4.18	花崗岩製	高さ2.3m	五輪塔は地・水・火・風・空の五大、つまり仏教概念の一切の物質を構成している要素を示したものである。この松雲寺の五輪塔は、布野村内にあった黒平城の城主が出家し宗門と号したが、その勳進によって建立されたものといわれ、同寺では開山の墳墓として今日まで伝えてきたといわれ、塔の基礎(地輪部)に鎌倉時代の元亨2年(1322)の刻銘があり、広島県における在銘最古の五輪塔で、作もすぐれている。		
県	重要文化財(建造物)	明王院書院	みょうおういんしょいん	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行八間、梁間六間半、入母屋造、本瓦葺		庫裏(くり、県重要文化財)とともに元和7年(1621)の建築と伝えられる。小屋組は古式の手法で仏壇の間、西の間、二階下の間からなり、一間ごとに柱を建てた書院形式初期の技法を伝える建物である。棟(ふすま)・杉戸に描かれた花鳥の絵は狩野派のすぐれたものである。向唐破風(むかいやからふう)屋根の玄関が附属する。		
県	重要文化財(建造物)	明王院庫裏	みょうおういんくり	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行十二間、梁間十二・二間、入母屋造、本瓦葺		江戸時代の元和7年(1621)に建立された。書院と同年代の同じ初期書院形式を踏襲した建物で、小屋組は古式で規模は雄大である。数次の修理にもかかわらず、江戸初期の遺風をよく伝えている。		
県	重要文化財(建造物)	磐台寺客殿	ばんだいじきゃくてん	1棟	福山市沼隈町能登原	昭37.3.29	桁行五間半、梁間五間半、入母屋造、桧瓦葺、方丈建築		江戸時代の元文3年(1738)建立。中央に仏壇の間を設け、左右に書院と奥の間を配した禅宗の方丈建築で、欄間の意匠もすぐれている。建立後著しく改造を受けたが、江戸時代中期(16世紀後半～17世紀前半)の方丈建物の好例となっている。磐台寺は沼隈半島の南端、阿伏鬼(あふご)岬にある。暦応年間(1338～1342)に寛叟建智(かそうけんち)が開いたと伝え、一時衰退し建物は荒廃したが、元亀元年(1570)重夢によって得久親善を安置する観音堂とともに、毛利輝元によって再建されたと伝えられる。阿伏鬼親善として親しまれている。		
県	重要文化財(建造物)	石造宝篋印塔 正平十の銘あり	せきぞうほうきょういんとう	1基	府中市上下町字矢野	昭38.4.27	花崗岩製	高さ1.16m	南北朝時代の正平10年(1355)建立の宝篋印塔で、塔身に銘が刻まれている。この塔が建つ矢野は中世矢野御所(いば矢野荘)に隣し、南北朝時代初期(14世紀前半)には付近で南朝勢力が活発に活動していた。この塔も当時の上下地方における南朝色を示す資料となっている。		
県	重要文化財(建造物)	枝の宮八幡神社本殿	えだのみやはちまんじんしゃほんでん	1棟	山県郡北広島町大朝	昭40.4.30	三間社流造、屋根、銅板葺		安土桃山時代の天正3年(1575)建立の棟札が残る。後世修復が繰り返され、当初部材の残りは悪い。三間社造である。向拝(こうはい)の基段(かえりまた)は当初の部材で、国重文の龍山八幡神社本殿(同町新庄)の基段によく似ているが、そのできばえはやや劣り、装飾部が簡素であり見劣りする点もあわせて、地元の大匠による建立と思われる。県内の残存例が数少ない天正期の社殿であるとともに、地方工匠の技能の様子を知るによい資料である。また、龍山八幡神社本殿において失われている懸魚および桁懸の残存している点も高く評価されてよい。		
県	重要文化財(建造物)	極楽寺本堂	ごくらくじほんどう	1棟	廿日市市原	昭42.5.8	桁行三間、梁間三間、四方裳階付、方形造、柿葺		現在の姿は江戸時代後期の天明8年(1788)に古材の一部も利用して再建されたものと言われる。正面向拝(こうはい)廻りの工夫を除けば法界寺阿彌陀堂そっくりの誠やかな平安調風の感じのする優秀な堂である。内部主屋方三間の禅宗様仏殿の様式のもので、これに和風の装飾をつけたものである。極楽寺は標高680mの極楽寺山山頂にある真言宗の古刹で、戦国時代の永禄5年(1562)毛利元就が本堂を再興したことが棟札にみえる。		
県	重要文化財(建造物)	三滝寺多宝塔	みたきでらたほうとう	1棟	広島市西区三滝町	昭43.1.12	三間多宝塔、本瓦葺、内部壁面、三間四面(2間1尺4寸四方)		大永6年(1526)の創建。もとは和歌山県の広八幡神社の境内に建っていた。山津波によって破壊したため、天保6年(1835)に修理し、その後かなり手が加えられている。昭和26年(1951)、原爆被災者を弔うため、現在地に移築された。全影が比較的美しく、浄土寺や厳島神社の多宝塔づく古建築に属する多宝塔として価値がある。		
県	重要文化財(建造物)	神辺本陣	かんなべほんじん	7棟	福山市神辺町川北	昭44.4.28	本陣の本屋(瓦葺平屋建)、御成の門、上段の間、三の間、札の間、玄関、敷台		江戸時代、尾道屋菅波家が営んでいた西本陣の跡。尾道屋菅波家は湯道販売業も営んでいた。延享5年(1748)に建てられた本屋(平屋建瓦葺)は、御成の間、上段の間、三の間、札の間、玄関、敷台に至るまで、参勤交代の種縁が宿泊した当時の面影をそのままにこめていた。札の間には諸侯の投宿時門前にかかげた木札が数多く伝わる。店住居は天保2年(1831)建築、背後には馬屋も残り、安政2年(1855)の建築という正門と木造瓦葺の塙もあわせて、江戸時代の本陣施設がよく保存されている。江戸時代の神辺は西国街道(近世山陽道)の宿駅として栄えた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	西国寺仁王門	さいにくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸、入母屋造、本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内で数少ない様式形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。 元文5年(1740)の棟札があり、その時の修復で、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人屋根葺き職人21人、火入191人、合力人夫212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財(建造物)	児玉家住宅	こだまけじゅうたく	1棟	安芸高田市甲田町浅塚	昭48.5.30	木造、寄棟造、茅葺、平屋建つ二階付。	19m×11m	児玉家はかつて「玉屋」を称したこの地方の豪農で、その主屋は18世紀中頃の建築と思われる。 規模の大きいこの建物は、ほぼ当初の状態をよく伝えており、表の部屋と納戸境の筋には一間ごとに配置された柱が正端に残っており、台所の板の間が土間にそのまま出ているのは地方的古式を伝えるものである。土間上部の梁組は二重の井桁という組み方で、この地方の特色を表しており、極端な巨材を用いていないのは年代的にふさわしい構造である。		
県	重要文化財(建造物)	寿福寺禅堂	じゆふくじぜんどう	1棟	庄原市東城町新免	昭59.1.23	宝形造、茅葺、方三間の土間の堂、内部和様仏壇		室町時代後期(15世紀後半～16世紀後半)の和様の禅堂である。方三間の土間の堂で、現在は宝形造の特異な屋根が残っている。天井の低い住宅風の装束をもつものである。堂の柱は円柱で、外側に縁組の付いた痕跡があり、上部には舟肘木(ふなひじき)を使用している。もとは寺の裏の高台にあったものをここに移したといわれ、相当の改造を受けているが、柱、舟肘木、天井、天井長押、仏壇末迎壁等は完全に残っている。 内部の装飾、特異な屋根の形式、中世遺構のまったくない曹洞宗の中世の仏堂であるなど、芸術的にも学術的にも貴重な建築物である。 寿福寺は彦根城近くの山間にある曹洞宗寺院である。同町内の徳雲寺末寺として戦国時代の天文3年(1534)に創められたという。		
県	重要文化財(建造物)	楽音寺本堂 附 有文墓碑銘石	がくおんじほんどう	1棟	三原市本郷町南方字堂之前	昭62.3.30	桁行三間、梁間三間、三面妻階付、寄棟造、本瓦葺		安土桃山時代の慶長3年(1598)の建立である。方三間の堂の四方に後に裳階(もこし)をめぐらせている。現在は背面の裳階は撤去されている。 室内の空間が非常に大きく、中世や近世の社寺建築ではあまり見られない特殊な技法が用いられているなど、戦国時代の地域的特徴が顕著な建物である。 楽音寺は現在の国道2号線の南方丘陵部に位置し、平安時代後期(12世紀)に開発領主・沼田氏が創建した古刹である。鎌倉時代(1192～1392)に小早川氏菩提寺となり18坊を数える大寺に発展したが、江戸時代初期(17世紀前半)に寺領を没収され、衰微した。		
県	重要文化財(建造物)	旧佐々木家住宅	きゅうささききけいじゅうたく	1棟	三次市三和町敷名字狛師岩山	昭62.3.30	桁行七間半、梁間四間半、茅葺、平屋建		江戸時代中期(17世紀後半～18世紀前半)の農家建築である。表の「板の間」隣の「でい」が1間間の4畳で、奥に神座らしい床がつけられ、あたかも畳上床の形の室があるなどの特徴を有し、古式の農家の間取りの様式をよく伝えている。 もとは三和町上巻にあったがその後解体され現在地に移転された。		連絡先:三次市教育委員会 (0824-64-0092)
県	重要文化財(建造物)	光照寺山門	こうしょうじさんもん	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	四脚門、切妻造、本瓦葺、桁行4.3m、梁行4.1m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立といわれる規模の大きな四脚門である。組物は壁付の肘木(ひじき)を横に広げた唐様系の構成で全体には建設当初の部材をよく残している。 光照寺は沼隈半島の中央、中山南の谷あいになり、親皇土人の法弟明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年(1216)に創建した寺院で中国地方最古の浄土真宗寺院である。伽藍は戦国時代末期に火災にあったが慶長18年に福島正則の援助によって再建した。		
県	重要文化財(建造物)	光照寺鐘撞堂	こうしょうじかねつきどう	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	入母屋造、四柱式、本瓦葺、間3.6m×3.8m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立と伝えられる、四柱式の鐘撞堂である。県内最古であり、また有数の規模を持つ、唐様を主体にした構造である。天井の板の一部に後補材がある以外は当初材であり、建立当初の形をよく残している。 光照寺は明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年(1216)に創建した寺院であり、中国地方で最も古い浄土真宗の寺院である。		
県	重要文化財(建造物)	大慈寺観音堂 附 厨子 1基 棟札 2枚	だいにじかんのどう	1棟	三次市吉舎町吉舎	平1.11.20	方三間、入母屋造、薄板鉄板葺、唐様仏堂		戦国時代の永禄12年(1569)に建てられた唐様の仏堂である。江戸時代中期(17世紀後半～18世紀前半)と明治末期に大きな改修を受け天井、建具は失われ、低い床が張り、屋根、入口、仏壇の向きが替えられる等の変更が加えられているが建具を除いては当初の形態がよく残っている。 建築形態はとくに贅を凝らしたものではないが、時代の特色をよく示している。 大慈寺は百舌東方山中にあり、応永28年(1421)に和知権護守氏美によって開かれた禅宗寺院である。開山の宗廟は三原市の佛通寺開山僧中最古の高僧であったといわれ、観音堂は永享11年(1439)に和知時実が建立したがその後焼失し永禄12年に再建された。		
県	重要文化財(建造物)	千葉家書院 書院、廊下及び浴室、浴室、本門及び築地塀、土蔵	ちばけいしゅいん	5棟	安芸郡海田町中店	平3.4.22	書院ノ入母屋造、棧瓦葺 廊下及び浴室ノ切妻造、棧瓦葺 浴室ノ片入母屋造、棧瓦葺 本門ノ切妻造、棧瓦葺 築地塀ノ木門南開17.70m、土蔵ノ二階建、切妻造、本瓦造		江戸時代中期の安永3年(1774)に建築されたもので、面皮柱を用い、床組に書院を組み合わせたなど、数寄屋造りを基調としている。また欄間、格子等に意匠を凝らしており、保存状態もきわめてよい。 旧山陽道沿いに民家の中で書院の建物のがつりた形で残っているものは少なく、貴重である。 千葉家(神保屋)は、旧山陽道に面したところにある。江戸時代には「宿送役」として幕府や藩の書状や荷物の運送業務に従事し、また幕府役人等も宿泊していた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	佐々井殿島神社本殿内玉殿 附 鳥居社額 1枚 棟札 1枚	ささいいつしまじんしゃほんでん ないぎょくてん	5基	安芸高田市八千代町 佐々井字丸	平3.12.12	第一殿/見世棚造、屋根切妻造、栴蓐/桁行0.770m、梁間0.703m、棟高1.788m 第二殿/見世棚造、屋根切妻造、栴蓐/桁行0.876m、梁間0.633m、棟高1.757m 第三殿/見世棚造、屋根切妻造、栴蓐/桁行0.854m、梁間0.582m、棟高1.542m 第四殿/見世棚造、屋根切妻造、栴蓐/桁行0.870m、梁間0.627m、棟高1.712m 第五殿/見世棚造、屋根切妻造、栴蓐/桁行0.918m、梁間0.612m、棟高1.660m		南北朝から室町時代初期(14世紀前半)にかけて造られた5基の玉殿(宮殿くうでん)で、14世紀前期に造られた第一殿は神社本殿形式の現存する玉殿としては全国でも古いものである。墨書によって第五殿は天文2年(1445)の建立であることが知られる。5基に共通している点は、切妻造で平入りであること、栴蓐であること、柱は丸柱で土唐桁の上にて立てていること、組物は連三斗として神宗様式であることなどがある。 玉殿は社殿内に安置される建物であるが、この玉殿は規模も大きく、細部も細かく作れ、保存状態も極めて良好である。また、栴蓐の屋根も葺き替えは受けておらず、広島地方の鎌倉、室町時代(12世紀～16世紀)の建築技法を知る上で、貴重な存在である。 佐々井殿島神社は可部から三次に掛け越す棚造に沿って北西に面して建てられている。延徳2年(1490)の鳥居社額、天正2年(1574)毛利頼元の社殿造営の棟札が残されている。		
県	重要文化財(建造物)	常盤神社本殿内玉殿	ときわじんしゃほんでんないぎょくてん	3基	安芸高田市八千代町勝 田字隠地	平3.12.12	第一殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.382m、梁間0.433m 第三殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.355m、梁間0.389m 第四殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.355m、梁間0.389m		常盤神社本殿内に安置される玉殿のうち、戦国時代、16世紀中頃の建造と推測されている3基の玉殿。様式的には室町時代後期(16世紀)の特徴を有する流見世棚造の小社殿で、実物と同じような仕事が施されている。保存状態も極めて良く、特に建立当初の薄長板葺の屋根が残っているのは貴重である。資料の少ない中世後期(15～16世紀)の神社社殿を知る格好の資料である。 常盤神社の沿革は詳らかではないが、明治16年(1883)に旧勝田村内の八幡神社と新宮神社(旧称熊野新宮)の二社を合併して常盤神社と改称し、玉殿は旧八幡神社のものと思われる。「高田郡史」によれば八幡神社は天文年間(1532～1554)ごろに桂元澄が再建したと伝えられる。		
県	重要文化財(建造物)	願福寺薬師堂	がんぷくじやくしどう	1棟	山県郡安芸太田町字堂 河内	平3.12.12	方三間、宝形造、椽瓦葺、向拝付		江戸時代初期、17世紀後半頃の建立と考えられる。辻堂的な小堂であるが、斗拱(ときょう)に出組を使い、内部も手先肘木(てきひじき)を出して天井桁を支える等、本格的な構成になっている。屋根は当初は茅葺であったと推測されている。 堂内に安置されている薬師如来像や十二神将は小像ではあるが天文20年(1551)に造られたものであり、江戸時代の辻堂の稀有な現存例であることとあわせて、室町時代末期から江戸時代初期(16世紀後半～17世紀前半)にかけてのこの地方の信仰を知る格好の資料となっている。		
県	重要文化財(建造物)	観現寺厨子	かんげんじずし	1基	東広島市西条町御園字 宇勝谷	平4.10.29	桁行一間1.63尺(0.494m)、梁間一間1.22尺(0.37m)、総高2.93尺(0.888m)、如意頭		頭貫(かしらぬき)本鼻の模様や葦股(かえるまた)その他の技法からみて、室町時代中期(15世紀後期)の製作と考えられる。規模は小さいが、軸部の組み方は本格的なものであり、本鼻の縁起(くりがた)や斗肘木(とひじき)の形状、如意頭(にいがしら)の縁起(くりがた)など、室町時代中期の建築的特徴を有し、製作技術も優れたものであって、室町時代(14世紀～16世紀)の安芸地方の建築様式を知る上で、貴重な資料である。 観現寺は西条盆地の中央部、黒瀬川の左岸近くにある。		
県	重要文化財(建造物)	観音寺本堂 附 棟札 1枚	かんのんじほんどう	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行五間、梁間五間、一間向拝付、入母屋造、本瓦葺		慶安4年(1651)建立。福山城の鬼門守護のため建立されたと推定されている。 折衷様の建物で、装飾に桃山時代から江戸時代初期(16世紀末～17世紀前半)の技法が見られる。県内唯一の近世曹家寺院本堂の遺構として、また折衷様の変遷をとらえるうえで、貴重な事例である。		
県	重要文化財(建造物)	観音寺表門	かんのんじおもてもん	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行一間、梁間一間、四脚門、切妻造、本瓦葺		慶安4年(1651)頃、本堂と同時期に建立されたと推定される。四脚門と呼ばれる4本の柱で構成された門で、江戸時代初期(17世紀前半)の様式を伝えている。 禅宗様を取り入れた折衷様で構成されているが、和様の門の特徴である冠木を使用せず、中央柱を様まで伸ばし、側との間に海老虹梁を渡し、そのために出来た柱と扉間の空隙を花格子欄間で埋めるなど、独特の工夫が見られる。		
県	重要文化財(建造物)	住吉神社本殿・瑞垣及び門 附 覆屋 1棟 常殿 1棟 棟札 3枚	すみよしじんしゃほんでん・みずがきおひもん	2棟1条	呉市豊町御手洗字住吉町	平8.9.30	本殿/桁行一間、梁間一間、住吉造、椽皮葺 門/一間冠木門、板葺 瑞垣/短辺3.64m、長辺4.99m、刺頭板葺		江戸時代の文政11年(1828)大坂住吉神社を勧請して建立された。拝殿は天保4年(1833)の造営である。御手洗町の南部、波止(はと)のもとに位置し、御手洗外港の整備にあわせて大坂鴻池家の寄進により建立された。 小規模ながら本殿・瑞垣、門が備わった本格的な住吉造社殿である。 住吉造の社殿は全国的にも少なく、江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の貴重な資料となっている。 御手洗は瀬戸内を代表する港町のひとつである。江戸時代前期(17世紀)に町が形成されて以来、沖乗り航路の中継地として栄えた。		
県	重要文化財(建造物)	恵美須神社本殿・拝殿 附 覆屋 1棟 棟札 2枚	えびすじんしゃほんでん・はいでん	1棟	呉市豊町御手洗字蛸子町	平8.9.30	本殿/一間社流造、椽皮葺 拝殿/桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺、向唐破風、向拝付		江戸時代の享保8年(1723)の建物である。御手洗町の先端、港の近くに位置している。 流造の小規模な本殿ではあるが、江戸時代中期(17世紀後半～18世紀前半)の特徴を良く残している。拝殿は唐破風付(からはらつぎ)の向拝(こうはい)を付け、本瓦葺きの本格的な建物である。島嶼部の小規模神社を代表する貴重な建造物である。 御手洗は江戸時代の沖乗り航路の重要な中継地として栄えた港町であった。		
県	重要文化財(建造物)	吉備津神社神楽殿	きびつじんしゃかくらでん	1棟	福山市新市町宮内	平9.5.19	桁行二間、梁間一間、屋根入母屋造、妻入銅板葺		江戸時代、寛文13年(1673)建立である。 いわゆる舞殿形式である。舞殿は高床の舞楽舞台に入母屋造妻入の屋根を架けた吹抜けの形式であるが、神社では神事用として最初に成立した固有の祭祀専用社殿である。京都を中心とした大社に造営され、近畿一円に普及するが、広島県内ではその例が少ない。 当社の神楽殿(舞殿)は簡素であるが建築的にも優れていて気品を備え、建築年代も明らかであり、保存状態もよく地方の舞殿としては貴重なものである。 吉備津神社は備後一宮であり、平安時代初期の大同元年(806)に備中吉備津神社を現地に勧請したとされ、永元元年(1165)六月日付の記録にその名が見える。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	極楽寺本堂	ごくらくじほんどう	1棟	三原市東町	平9.9.25	本堂ノ桁行七間、梁間五間、入母屋造、本瓦葺、背面葺葺		江戸時代の元文7年(1737)頃の建立である。向拝(こはい)を設けず、簡素で全体的に素朴な作りである。内陣を結界で仕切っているが、この結界が残っている例は極めて珍しい。極楽寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(建造物)	稲生神社本殿	いなりじんじやほんでん	1棟	世羅郡世羅町上津田	平11.4.19	正面三間、入母屋造平入、銅板葺		江戸時代の正徳5年(1715)の建立である。方三間(方5.44m)の前窓付平面で前一間は吹き放しになっている。この平面形式は本県においては17～18世紀にかけて多数造営され、当本殿はその最盛期の建立になる。龍や獅子、鳳凰、虎など主要部に彫刻装飾がみられ、地方の建築技術者の建築装飾に対する理解や認識の伝播を知る上で好資料である。形態が良対で、細部に地方色が濃厚にみられ、近世の地域大工層の建築技術の取組消化として創意工夫による変容の経路を知る上で貴重な遺構である。稲生神社は大永2年(1522)に下津田村大須佐山(世羅西町)に京都伏見稲荷大社を勧請し、永禄12年(1569)8月に現在地に遷座して社殿を造営したと伝えられている。この時、夜中の遷宮に従った氏子によるたいまつ行事が県無形民俗文化財指定の「神籠入り」である。		
県	重要文化財(建造物)	常国寺唐門	じょうこくじからもん	1棟	福山市熊野町	令和4年2月24日	正面1間 側面1間 向唐門 本瓦葺 木造		常国寺の唐門は、室町幕府最後の将軍である足利義昭の由緒を、享保期の施主と大工が当時の知識と技術で建物の形式及び意匠で示したという特色をもつ建造物である。扉上段の棧の間に欄文様を写し彫り出した板が嵌め込まれ、中欄の基段には足利氏の家紋である二つ引間が彫られている。軒丸瓦の瓦頭模様も、旧のものは二つ引間であり、足利義昭の御在所であった由緒を表現している。紅葉や木鼻に彫られた絵様や垂木の形などは、共に時代相応の特徴をみせる。投柱の虹梁形の頭貫とそれに直交する木鼻は雲形に作られており、大瓶束の左右に付く笈形彫刻も力強く、材質・技法・意匠ともに優れている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師画像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしがぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	絹本着色、屏風仕立て、	縦232cm、横147cm	今高野山御影堂の本尊で、いす式の座に正座する大師像を描いている。高野山、普通寺のそれとともに三大師像と称される名品で、それと同様に秘仏として伝承した大師像である。わが国最古の大師像は京都醍醐寺及び大坂金剛寺の平安時代(794～1191年)作のものであるが、本品は鎌倉時代初期(13世紀前半)の数少ない作品の一つで貴重である。		関連施設: 今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色水野忠重画像	けんぼんちやくしよくみずのただしげがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本着色、軸装	縦120cm、横52.5cm	水野忠重は三河の国人領主、初代福山藩主・水野勝成の父である。この画像は寛永17年(1640)に水野勝成が園工に命じて描かせたもの。画の上には、勝成の求めに応じた大徳寺住職・宗玩の賛がある。賢忠寺は、水野勝成が創建した水野氏歴代の菩提寺で、水野氏関係の遺品をいくつか伝えている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色水野勝成画像	けんぼんちやくしよくみずのかつなりがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本着色、軸装	縦98cm、横46cm	正保2年(1645)、水野勝成晩年の姿を描いた面である。大徳寺住職源安の賛がある。水野勝成は徳川譜代の大名で、元和8年(1627)福山城を築いた。武将として活躍する一方、俳諧(はいかい)などの文学をたしなめた。福山においても新田開発や城下の建設に意をそそいだ。彼の墓所は、同じ賢忠寺境内にある。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師画像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしがぞう	1幅	福山市市町	昭29.9.29	絹本着色、軸装	縦113cm、横77cm	この大師像は目許が常に見守っているようなので「目引き大師」とも言われる。構図は他の弘法大師像と変わりないが、画幅の右上の隅に大師の誓願仏である弥勒菩薩が描かれているのは珍しい。室町時代(1333～1572年)の作。画の裏面には、元禄12年(1699)に盗難にあったが江戸谷中(やなか)長久寺で発見され、寺に帰ってきた旨の墨書がある。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師絵伝	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしえてん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦152cm、横96cm	室町時代中期(15世紀)に製作された、弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが、この絵は各部分とも力強い筆致のみことな絵伝である。第一軸は「大師誕生から入道まで」、第二軸は「入道から清水写経」まで、第三軸は「唐果祥現から三昧掛懸」、第四軸には「応天文投筆から二荒日光まで」、第五軸には「東寺勧講から二間修法」まで、第六軸には「高野尋入から入定御拝見」まで、第七軸と第八軸は2幅1組でストーリーがつかられ「陸博参詣」と第八軸「法皇行幸」が描かれている。また、図の下から上へストーリーが展開している。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦78cm、横39cm	高野山の真如親王筆の御影の系統に属する作品で、小幡ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しい。その布置から見て天保3年(1377)の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われる。それから判断して鎌倉時代末期(14世紀前半)の作かと考えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩像	けんぼんちやくしよくじそうぼさざう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦110cm、横55cm	<p>地藏菩薩は、六道の衆生を救う菩薩とされ、わけても地獄における救済の力を中心として信仰され、わが国でも平安時代中期から鎌倉時代(1185～1332)にかけて信仰が盛んになり、庶民生活と結びつき、その遺像、絵画は多い。</p> <p>本品も、そのような室町時代(1333～1572)に描かれたと思われる作品で、左足を下げ、右足を立膝にして岩座に坐す。右手を額にそえ、左手には錫杖(しゃくじょう)を持ち、左右に掌摩童子、掌摩童子の二童子を配した延命地藏菩薩の像である。彩色は敷金(きりかね)・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた色彩感豊かな画像である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色観世上人絵伝	けんぼんちやくしよくしんらんしやうにんえでん	1幅	福山市沼隈町中山南(京都市下京区 龍谷ミュージアム寄託)	昭30.3.30	絹本着色	縦175cm、横120cm	<p>この絵伝は、南北朝時代の建武3年(1336)本願寺存堂上人が滞留した際、法然上人絵伝三幅などとともに著わたと伝えられる。画工は隆門、建武5年(1338)成立という。康永2年(1343)の絵伝が増補される以前のもので、掛軸絵伝の初期のものである。</p> <p>光厳寺は建保4年(1216)明光上人の開創といひ、中国地方浄土真宗流布の拠点であった。</p>		関連施設: 龍谷ミュージアム(075-351-2500)
県	重要文化財(絵画)	紙本着色竹林寺縁起絵巻	しほんちやくしよくちくりんじえんぎえまき	2巻	東広島市河内町入野	昭31.3.30	紙本着色		<p>室町時代(1333～1572年)の作で、漢文調の詞書と絵を交互に配した長巻である。行基にまつわる竹林寺の創建と小野篁(おののたから)伝説を記している。</p> <p>竹林寺は河内町市街地の南方にそびえる釜山山頂に位置する真言宗の古刹で、中世、國人領主平賀氏の保護を受け栄えていた。</p> <p>※小野篁(802～852)…平安時代初期の学者・漢詩人・歌人</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色十六善神像	けんぼんちやくしよくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	三次市三良坂町田利(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	昭33.1.18	絹本着色	縦125cm、横60cm	<p>中尊、脇侍の円光の金線のみどりがどみなく鮮やかな良泥の金泥の描線であること、面絹(がけん)に一輪半の織目の荒い素絹を使用していることなどから室町時代中期(15世紀前半頃)の作と思われる。</p> <p>釈迦は宝座に結跏趺坐(けっかふざ)し、身光頭光の二重門の光背をそなえ、左手をひざに右手は説法の手を結び、その頭上高く宝珠を飾った天蓋を掲げている。前方左右には白象に乗る普賢、獅子に乗る文殊の二菩薩の脇侍と、左下方には玄奘(げんじょう)三蔵法師求法の姿を描いている。その他画面左右に十六神が記されている。</p> <p>所有者の田利八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面に位置し、鎌倉時代(1192～1332年)にこの地域を治めた地頭・広沢氏によって勧請されたと伝えられる。</p>		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色阿彌陀三尊来迎図	けんぼんちやくしよくあみださんぞんらいごうず	1幅	広島市南区堀越二丁目	昭36.4.18		縦87.5cm、横37.5cm	<p>室町時代中期(15世紀前半頃)の作。絹本は織り目の荒い素絹を用い、下地に顔料を施した上に描いている。</p> <p>中尊は雲上の踏分蓮座(ふみわけれんざ)に立ち、左手を垂れ右手を胸に弥陀の印を結んでいる。肌・衣ともに金泥で仕上げ、衣文ひだは繊細な網目文・亀甲文・狸沙門亀甲文・唐草文を金色の線で描いている。</p> <p>宝冠をいただき首に璎珞(ようらく)を垂れた左(勢至=せいし)右(観音)の二菩薩の脇侍もまた雲上の踏分蓮座に立ち、各々の字形の前かがみの姿勢で、勢至菩薩は合掌し、観音菩薩は蓮華形の器を持った動的な表現をしている。</p>		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色隅置鉄山絵巻	しほんちやくしよくすみやてつざんえまき	2巻	山県郡安芸太田町加計	昭36.4.18	紙本着色 卷子装	第一巻長さ740cm、幅24cm。 第二巻長さ760cm、幅24cm。	<p>江戸時代後期(18世紀後半～19世紀初め)に描かれたもので、芸北出身の幕末の狩野派画家、佐々木古仙斎の作ではないかと推定されている。</p> <p>古くから中国山地は砂鉄を原料とした製鉄が盛んであったが、江戸時代の「たたら製鉄」の状況をいままで描いた珍しい作品である。砂鉄の輸送が「ずく(鉄鉄)」「から(銅鉄)」を作る「高取たたら」での生産の様子を描く巻と、「かんば(鉄山事務所)」と鍛冶場の巻の二巻に分かれており、最後の部分に「たたら」鍛冶場で使った種々の道具類が描かれている。描写はきわめて写実的で、鉄山研究の貴重な資料である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人像	けんぼんちやくしよほうねんしやうにんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本着色 軸装	縦69cm、横42cm	<p>浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で、黒の法衣をまとい高麗鉢(こうらいべい)の置に坐り、数珠を手に頬骨を高く顔は二段に描かれたいわゆる法然顔である。法然の画像としてはごく古いもので、寺伝によると円光大師(法然)自筆の摹影というが、画面に建暦口年(1379～1381)正月六日とあり、室町時代初期(14世紀)の作であることが知られる。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土真宗光明派先徳像	けんぼんちやくしよくじやうどうしんしやうみやうこうはせんとうぞう	1幅	福山市駅前町倉光	昭38.11.4	絹本着色、軸装	縦122cm、横54cm	<p>明光派浄土真宗教団の、平安時代から鎌倉時代(9～14世紀前半)までの主な僧侶13人の肖像画。南北朝時代(1333～1392)ないし室町時代初期(14世紀前半)の作と推定される。</p> <p>明光派浄土真宗は、鎌倉時代末期以来、沼隈町山南(さんな)の光照寺を中心に備後南部一帯で信仰が盛んになった。</p> <p>向って左上の虚空以下、親賢、真良、源海、了海、聖海、明光、信光、良賢、明尊、性尊、勝尊の順で左右交互に描かれている。最後の一人はよくわからない。信光以下勝尊までは明光に従って来た浄土教団の指導者で、最後の人物は願主であろうか。</p> <p>像を墨線で描き、彩色を加えた華敷のすくれものである。初期真宗教団の研究資料として貴重である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絵馬(錢馬毛〇毛) ※錢の字、〇は馬へんに緑のツカ	えま(そうまうりくもう)	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm、横176cm	<p>天正5年(1577)播州明石郡船上山(ふなげ)(現在の兵庫県明石市船上山)の石井与次郎兵衛尉が奉納した絵馬。</p> <p>2枚1対の大型の絵馬で、細い杉材の薄板を縦に貼り合わせ、その表面に紙を張り、首をあげた[84a]毛の馬と首をふした姿の[84a1]毛の馬を一匹ずつ墨書淡彩で描いたものである。いずれも机に綱でつながれており、鞍はついていない(単力座敷な絵である)。</p> <p>巻軸の石井与次郎兵衛は、徳川幕府の水軍の一員としてその名がみえる人物であり、瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代(1573～1602)の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。</p>		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本着色、軸装	縦149cm、横91cm	光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので、古くは三幅一対であったが、その後一 幅のもの一般的となった。 本品は南北朝時代(1333～1392)のものと考えられ、本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院と ともに与えたと伝える。 中央に「南無不可思議光如来」の九字の尊号を配し、左下隅に「備命尽十万無量光如来」の十字尊 号、右下隅に「南無阿彌陀仏」の六字尊号を配し、取道、弥陀の二尊像を描いている。そして右に天竺 (てんじく)・震旦(しんだん)の十高僧を、左に和朝の像を描き、その下部に聖徳大師像を加えている。光明 本尊は東日本には多いが、西日本には少なく貴重な資料である。 福善寺は天正元年(1573)行宗法師が開いた浄土真宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人絵伝	けんぽんちやくしやくほうねんしやう にんえでん	3幅	福山市沼隈町中山南 (京都市下京区 龍谷 ミュージアム寄託)	昭42.5.8	絹本着色、軸装	縦150cm、横130cm	浄土宗の開祖法然上人及び新宗の仏教を積極的に受容した聖徳太子の二人は浄土真宗と浅からぬ 縁をもっている。 この絵は建武3年(1336)中国地方における浄土真宗布教の拠点である光照寺に、本願寺の存覚上人 が滞留した際、同寺所蔵の親上人絵伝とともに著したと伝えられるもので、裏書によると願主は明尊上 人、筆工は野野庵門と記され、建武5年(1338)に描きあげられたという。掛軸絵伝の初期のものとして 貴重な資料である。		関連施設: 龍谷ミュージアム(075-351-2500)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色聖徳太子絵伝	けんぽんちやくしやくしやうとくたいし えでん	4幅	福山市沼隈町中山南 (京都市下京区 龍谷 ミュージアム寄託)	昭42.5.8	絹本着色、軸装	縦150cm、横120cm	建武5年(1338)、明尊上人を願主として隆円が描いた作品で、親上人絵伝や法然上人絵伝と一連 の作品である。聖徳太子は浄土真宗においても重要視されており、聖徳太子を礼拝するために多くの作品 が作られた。 4軸にわたって聖徳太子の生涯を紹介したものである。1軸4段で16場面が描かれている。		関連施設: 龍谷ミュージアム(075-351-2500)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色春日曼荼羅	けんぽんちやくしやくかすがまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本着色、軸装	縦99cm、横36.4cm	曼荼羅には、儀軌(ぎき)によって密教の根本理念を図式化したものと、特殊な尊像を中心にその曼荼羅 が効果ありと信じられた加持祈祷の際に奉懸(ほうけん)される別尊曼荼羅がある。 本品は「春日曼荼羅」と称される別尊曼荼羅のひとつで、上方に蓮山を描き、中央に本地仏を下方に 春日大社の御使しと言われる神鹿の立つ姿を描いている。破損も少なく保存も良好な室町時代(1333～ 1572)の作である。		
県	重要文化財(絵画)	刺繍阿彌陀三尊種子曼荼羅	ししゅうしゃかさんぞんじゆじまんだ ら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繍、軸装	縦73cm、横27.5cm	着色絹糸で上方に天蓋を刺繍し、中央の三尊の円光の中の蓮座に、毛髪で刺繍した種子がある。その 下には三尊の円光上に火舎、花籠を刺繍して供え、三尊を祀る形をあらわしている。蓮座蓮弁の糸は、暈 籠(うんか)式の色調であらわし美麗である。表装中廻しの袈の上方には数華、下方には蓮池を織った豪 華なもので、刺繍技工を知らうえに貴重である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色宮景盛像	しほんちやくしやくみやかげもりぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	紙本着色、軸装	縦94cm、横43cm	戦国時代の永禄10年(1567)に描かれた西城宮氏の当主・宮景盛の肖像画。西城宮氏は、備後に勢 力をもった有力な國人領主・宮氏の庶家である。久代(東城町)を本拠としていたが、宮高盛の時に西城 大富山城に拠点を移した。 宮上総介景盛は高盛の孫にあたり大富山城の第二代城主である。画の上部には浄久寺二世の覚海禪 師の肖像像があり、それには宮氏は本来藤原姓であるが、高盛の時代に源姓を称したことが記されている。 浄久寺は宮高盛が創建した曹洞宗寺院であり、宮氏の菩提寺であった。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色覚海禪師像	けんぽんちやくしやくかくかいぜんし ぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本着色、軸装	縦92.5cm、横47.5cm	浄久寺は、備後における曹洞宗の巨刹徳雲寺(東城町)の二世開庵宗梅(いあんそうばい)が、宮 高盛を開基檀那として建てた寺である。覚海はその浄久寺二世で、画は天正8年(1580)に宮景盛が寄 進したこととともに覚海禪師自賛の七言律詩が記されている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色藤原盛勝像	けんぽんちやくしやくふじむらもりか つぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本着色、軸装	縦88.7cm、横37.5cm	安土桃山時代の天正10年(1582)12月作。西城宮氏一族であった藤原盛勝の肖像画である。盛勝の 没後、彼の子の盛和が描いたもので、浄久寺四世徳光禪師の賛がある。 浄久寺は宮高盛が開いた禅宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王像	けんぽんちやくしやくふどうみょうお うぞう	1幅	福山市駅家町新山	昭46.4.30	絹本着色、軸装、38cm幅と16.5cm幅の画 絹を継ぐ	縦120cm、横54.5cm	室町時代中期(15世紀前半頃)の制作。中央に火炎光を背にする不動明王立像を描き、制多迦(せいた か)、狛鴉羅(くわがら)の二童子を左右の脇侍に配した三尊形式の構図をとる。色彩及び描線は当初の ものをよく残しており、保存も良好である。 不動明王は、如来の使者、真言行者を守護するという性格を持っており、空海・円珍以後平安・鎌倉・ 室町を通じて流行し、今日に多くの作品を残している。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王像	けんぼんちやくしよくみょうおうぞう	1幅	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24	絹本着色、軸装	縦98cm、横40.5cm	室町時代中期(15世紀前半頃)の作。火炎光背を背にした中尊不動明王を中心に、脇侍に制多迦(せいたか)、杵羅羅(こんがら)の二童子を配する。当初の彩色がよく残している。不動明王像は平安時代(794～1191)以来流行し、彫刻に絵画に県内にもその作例は多い。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王画像	けんぼんちやくしよくみょうおうがぞう	1幅	広島市安佐南区祇園四丁目 (広島市南区宇品御幸二丁目 広島市郷土資料館保管)	昭48.12.18	絹本着色、掛幅装	縦105.4cm、横40.0cm	室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の作と言われる。もと軸装であったものを額装している。表面の墨書銘によると、広島藩主浅野吉長が、修復を加えた後、当惑神院と称した歡喜寺に寄進したものとされている。作者は神徳の玄沢といふ。経巻に立つ不動明王は、両眼を開き歯牙はあらわさず、右手に剣を左手に素象を持っている。火炎光背及び着衣には朱色を施した痕が見える。像は鋭い筆致で表されている。		関連施設: 広島市郷土資料館 (082-253-6771)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦涅槃図	けんぼんちやくしよくしゃかねはんず	1幅	三原市本郷町船木	昭49.4.25	絹本着色、軸装	縦157.7cm、横156.5cm	室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の作と思われる。軸金具は素文遣金(そもんときん)で、幅幅三幅と半幅を両端に継いだものを用い、絹本の織目はやや荒い。顔料の剥落は少ない。永禄4年(1561)に毛利元就が、その子小早川隆景を高山城に訪ねた時、その宴に待たし蓮華尼に与えたものであるといふ。江戸時代の安永6年(1777)に表装替えが行われた。箱裏に墨書銘がある。永福寺は小早川氏の祖・土肥茂平の菩提寺である。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色楽音寺縁起	しほんちやくしよくがくおんじえんぎ	1巻	三原市本郷町南方 (福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	昭50.4.8	紙本着色、卷子装	縦34.1cm、長さ1600.3cm	天慶年間(938～946)藤原倫実が純友の乱に受けた護持仏業師小像の靈験と恩に報いるため楽音寺を創建した経緯を、詞書と絵をつらね叙した絵巻物である。現存する絵巻は、江戸時代初期の寛文年間(1661～1673)浅野光辰によって原本を召し上げられたかかわりで行われた模写である。奥書に「狩野右兵衛尉安倍兼光の当時第一の画師が住持縁起を實に撰りてしたものとみゆらる。この縁起は鎌倉時代(1192～1332)の原作の写しとして、歴史的美術的価値は相当にあり、安芸国沼田荘や峯族沼田氏の起源を知るための好資料である。楽音寺は本郷町南方に所在する真言宗寺院。沼田荘開発領主の沼田氏の氏寺として創建され、鎌倉時代以後は地頭・小早川氏の氏寺となった。盛時は18院の子院をもっていた。江戸時代初期、福島正則によって寺領が没収された。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色十六善神像	けんぼんちやくしよくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭53.10.4	絹本着色、軸装	縦101.4cm、横49cm	十六善神とは、大般若經を守護する護法善神で、釈迦如来と共に描かれた画幅は、大般若会の本尊としていつか遺存している。この絵も他に多く見られる構図で描かれており、法衣を透層(つうけん)にかけ施無畏(せむい)印を結び獅子座に坐した中尊釈迦如来を中心に、その頭部に円光をあらわしている。釈迦の下方左右には、文殊菩薩、普賢菩薩等四菩薩と毘盧博多善神(びるはしゃぜんじん)等の十六善神を配し、最下方に弘安(げんじょう)三藏法師の求法象と鬼衆を描いている。釈迦の上方には、暹羅(どんらん)彩色と見られる天蓋を描き懸けている。剥落の部分はあるが補筆はなく、よく当初の状態をとどめた室町時代末期(16世紀)の作である。龍華寺は今高野山ともいひ、大田庄の中核寺院であった。		毎年6月20日のみ公開 関連施設: 今高野山龍華寺収蔵庫 (0847-22-0840)
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩楊柳観音像(巖絶道沖の賛あり)	けんぼんたんさいしよくやうかうかのんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩、軸装	縦35.7cm、横18.4cm	古くから仏画の画題として愛好され、種々の病除を本誓とするという楊柳観音を描いたもので、小幡ではあるが、繊細流麗な墨線は像の隅々にまで生きており、特に宝冠の描写は精緻である。寺伝によると牧路(もつち)筆といふ落款等もなく、精認の根拠を欠いているものの画幅上部の巖絶道沖(ぎげつどうちゅう)の賛に、南泉師代(12～13世紀)のすてい画工の手になる作品であるとみよすける。なお、賛者巖絶道沖(ぎげつどうちゅう)は、享保10年(1250)に死去しているから、この作品は13世紀半ば以前のものとされる。光明寺は、南北朝時代初期(14世紀前半)、足利尊氏の従軍僧によって天台宗から浄土宗に改宗したと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩十王像	けんぼんちやくしよくじざうじょうぼさつじゅうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本着色、軸装	縦94.3cm、横86.0cm	嘉禄41年(1562)朝鮮半島で描かれた仏画で、李朝朝鮮の國王や王妃等の寿命長久と国土の安泰、人民の安寧、仏法興隆を願って、清平山人が描いたもの。この十王像一面を描き清平寺に安置して香をたき、更にその功徳を一切衆生に及ぼさんと祈念したと記す。中央に地藏菩薩、その周辺に仏法を守護し死者を救く十王を描く。光明寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦涅槃図	けんぼんちやくしよくしゃかねはんず	1幅	福山市内海町田島	昭57.2.23	絹本着色、軸装	縦181.0cm、横156.7cm	涅槃像は肉身を金色に塗り法衣には袈裟(けさ)の田相を表わす。涅槃台の格狭間(ごうま)には暹羅(どんらん)彩色を施す円形を描き、涅槃像をめぐる比丘、鬼人、菩薩、婦人、動物等の描写は普通の涅槃図と異ならないが、天上にある麻那夫人がむかつて左上に描かれているのは珍しい。沙羅樹の筆致、画面に瀟々筆法の硬さは時代性かと思われる。涅槃像の法衣の田相をくまどり彩筆していること、涅槃台の格狭間の暹羅彩色にて円形を作っていることから室町時代末期(16世紀)の作と考えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色明光上人像	けんぼんちやくしよくみょうこうじょうしやうにんぞう	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本着色、軸装	縦112cm、横90cm	沼隈光照寺や宝田院を開いた明光上人の肖像画。南北朝時代(1333～1392)の作。冊子を置いた机を前に、数珠をつまんだ姿を描く。明光上人の銘を有し、金具の文様、絵画の描法などは工芸的にすぐれ、また宝田院の開山をはじめ本県における浄土真宗明光流の伝道の歴史を知り上でも貴重な資料である。明光(1286～1353)は、観聲上人道門の六菩薩の一人として伝えられている。關東鎌倉方面で布教活動していたが、西下して元応2年(1320)頃備後沼隈郡の中山に光照寺、更に宝田院を開き、布教にあたった。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色光明本尊	けんぽんちやくしやくこうみょうほんぞん	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本、軸装	縦168cm、横102cm	南北朝時代(14世紀)の作。 本画像の名称の由来は、画像の構成が中央に金泥にて「南無不可思議光如來」の九字名号の本尊形をなし、それより金線をもって光明を奏するところよってのものと思われる。中央名号と、向つて右側下方の壽命童十万光早光如來の十字名号との間に顔光背(ごうはい)を付す釈迦如來立像を描き、向つて左側下方の「南無阿弥陀仏」の六字名号との間に、これも光背を付す阿弥陀如來立像を描き、左右にはインドや日本の先師像が配されている。 本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を尾道・福善寺とともに宝田院に与えたと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色一流相承絵系図	しほんちやくしやくいちりゅうそうしやうえいけいず	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	紙本着色、卷子装	総長348cm、縦44cm	この系図には嘉暦元年(1326)の銘があるが、同年の紀年銘をもつ系図は他にも存在しており、どちらが先に描かれたものかはっきりしない。しかし、いずれにしても南北朝時代初期(14世紀前半)の製作とみてよい。また、工芸的にも当時の製紙の紙質を知る標本ともなり、系図の前書は国語学の上からも当時の仮名書の筆致を知る上の参考となるものである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土曼荼羅	けんぽんちやくしやくじょうどまんだら	1張	廿日市市廿日市	昭60.12.2	絹本着色、額装	縦187.0cm、横177.0cm	浄土曼荼羅信仰が盛んであった鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。奈良の当麻寺には有名な浄土曼荼羅があり、所謂当麻曼荼羅と言われるものである。この潮音寺蔵のものと形式にもなるものである。 もとは軸物であったと思われるが、今は破損を防ぐために額張りの形になっている。図柄構成は、全く当麻曼荼羅とその規を一にして、中央に阿弥陀三尊を配して上方には殿堂樓閣を配し、下方には仏菩薩衆生の極楽生活の様態を表わす。図面の左右両方には、十数区を区切って極楽の意趣を具現したと思われる図面を表わし、また下段も十数区に区切り、同じ手法を用いているが、中央の区には当麻寺のものと同様に製作意趣、禽獣等も書かれていたと思われるが、今は消えて見えない。鎌倉時代(1192～1332)のものは広島県には少なく、この曼荼羅は本県における貴重な仏教絵画である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色金剛用兼禪師像	けんぽんちやくしやくきんごうようけんぜんじそう	1幅	廿日市市佐方	昭60.12.2	絹本着色、軸装	縦109.2cm、横50.7cm	戦国時代の永正8年(1511)の描かれた禪師の由[84a2] [きょうく]に持座(さざ)する像である。その後の右腕に一本の長杖が描かれている(頂相(ちんそう)である。画面の法衣の筆法は直線的で陰影を与えていないのも製作時代のヒントとも思える。剥落で面様はうすくなっているが、由[84a2]文様も派手な手法であったと推測される。 画面に描き出されている長杖は、現在も同寺に保存されており、木製で別に一面小突起を彫刻した長さ205cmのもので、この長杖は禪師の常用のものであったと思われる。 製作年代の正確に知られる作品であり、絵画(肖像画)史の正確な基準作品として、本県における貴重な例品である。 洞雲寺は長享元年(1487)飯島神社主家が金剛用兼を開山として創建した禪宗寺院。 金剛用兼は永平寺再興に尽力し、阿波の守護大名・細川氏からも帰依を受けていた。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色如意輪観音像	けんぽんちやくしやくいらいんかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦90cm、横40.5cm	南北朝時代の建武元年(1334)の作で、図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したという。 六臂(び)の如意輪観音を墨線で描き、彩色はほとんどない。水墨画的な淡彩の画像は鎌倉時代末期から室町時代(1333～1372年)へかけて出始め、それは仏画本来の対象としてのものから経典的な面へと移行することを意味するものと言われる。本画像は、上記のような絵画史的な見解とその記年銘がほぼ一致する点からみて、貴重な資料であると考ええる。 如意輪観音は、変化観音の一つで、如意とは如意宝珠、輪とは法輪を意味し、それらの功德によって衆生の苦を抜き、業を与える観音である。像形には二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂等があるが、六臂の例が多く流布しており、その最も著名な例としては、大坂観心寺の本道如意輪観音坐像があげられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色千手観音像	けんぽんちやくしやくせんじゆかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦171cm、横82cm	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。 経典的な観点からは、画面下方の濃褐色の岩、上方の濃紺の岩山や虚空、そうした暗いバックを背景として、周囲に二十八部衆を配して中央に大きな金色の千手観音像、上方に同じ金色の五臂観音が浮かび上がるように鮮やかに表現されているのはまさに偉業である。千手観音のやや細面で沈つたような表情に元末期(14世紀)の画法の影響が見られるようである。光背(ごうはい)の文様にも見られるように繊細な表現がよくなされており、六観音を一面であらわす特異性にも注目すべきところである。 千手観音は四十本の脇手を持ち、舟形光背を負っている。 画面向つて右下に「備後國尾道潮」、右下に「浄土寺常住」の墨書銘が認められ、本画像が浄土寺伝来の什物であることが明らかである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土曼荼羅	けんぽんちやくしやくじょうどまんだら	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦128cm、横128cm	鎌倉時代の作で、もとの軸木の額によると寛元元年(1243)作、正慶2年(1333)修理と伝えられる。阿弥陀三尊を中心に多数の仏たちが集まる極楽浄土の情景を描いたもので、当麻曼荼羅と呼ばれる形態の図の一つである。左右および下端にはイダイク夫人が阿弥陀如來に帰依する物語や十六観想図などが描かれている。 額地が他に三幅に纏い、普通は縦書きであるのと異なる。このような横書きは幅広い画面の構成に見られる。また、画面右端の風景描写が日本的な図になっており、中央の阿弥陀三尊は、仏身は金泥で、衣文は切金を用いられている。 廿日市市潮音寺蔵の浄土曼荼羅(当麻曼荼羅形式)に次ぐ鎌倉時代末期の、本県には少ない逸例と言える。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仁王経曼荼羅	けんぽんちやくしやくにおうきょうまんだら	1張	尾道市東久保町	昭62.3.30	絹本着色、軸装	縦161cm、横128.5cm	鎌倉時代中期(13世紀)の作。方形の三区画に分けられ、中央に不動明王、周囲に四大天王や四天王などを描いている。 仁王経曼荼羅とは、国家人民の安穏を目的とする「仁王経法」という修法の本尊である。息災、増益、敬愛、調伏(ちようふく)など四種の修法を行つたときに懸けられていた。 この図は息災法用で、山口県神上寺に伝わる図の原本を写したと考えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぽんちやくしやくぶつねはんず	1幅	庄原市東城町川東	平1.3.20	絹本着色、軸装	縦163.0cm、横167.4cm	安土桃山時代の天正8年(1578)、石州佐波郡(島根県邑智郡邑智町)の大龍禪寺住持が武州(武蔵、東京都・埼玉県一帯)の画工益圃(いつぽ)といふ者に描かせた涅槃図。 釈迦の表現は、肉身は金泥(きんでい)、肉身線は赤、衣文(あもん)線は墨、着衣も金泥、金具表現の金泥は墨上彩色(しやうさい)が得意といふことが見られる。その他、騎青、騎赤、騎白、騎紅(にん)のほかに多様な彩色が見られる。保存もよく、上記のように制作年代及び由来も知られ、多くの顔の表情は類型化だが、大画面いっばいに丹念に描かれている。 千手寺(せんじゆじ)は、寺伝によると天平年間(729～766)開基の寺といわれ、永祿年間(1558～1570)に右見園色智徳佐波郡の領主であった佐波広忠が毛利氏の麾下になって奴可郡に知行を与えられ、東城に來住し、菩提寺としたと伝えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色五大明王像	けんぽんちやくしよくだいみょうおうぞう	3幅	庄原市東城町川西	平1.3.20	絹本着色、軸装	不動明王／縦152.4cm、横84.2cm 金剛・降三世／縦137.9cm、横55.1cm 大威・摩訶利／縦138.0cm、横55.3cm	五大明王像の五大明王とは、五大尊とも称し、彫刻絵画にあらわされ、密教修法(しよほう)の本尊として信仰された。 中央の不動明王は、遊樓羅熒光(からえんこう)を負い坐している。注目すべきは大威徳明王で、通形はうすぐる水牛の背に跨坐する姿であるが、ここでは疾走する水牛の上に立つ形式をとる。各尊とも墨線の「子午」は優れている。衣紋線には肥後のある墨線がつけられている。商顔(うでくしろ)など金具の表現には胡粉下地の念(おもてい)、いわゆる堂上彩色を施している。 年代はおそく鎌倉時代末期から南北朝時代ごろ。14世紀前半とみられ、作風も優れている。 法恩寺の由来は明かないが、平安時代(794～1191)の開基と伝えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色観音三十三身像	けんぽんちやくしよくあんのんさんじゅうさんしんぞう	4幅	三次市吉舎町吉舎	平1.3.20	絹本着色、軸装	縦119.0cm、横61.0cm	室町時代(1333～1572)の作と推定され、応永31年(1424)出雲国に多郡阿井郷(島根県に多郡に田町)の月溪良運が寄進したと大慈寺開山宗綱禅師の「宗綱語録」に伝えられることから、ほぼその頃とみられる。 『法華経』の観世音菩薩普門品第二十五によれば、観音は三十三身に变化(へんじ)して法を説くといふことが見える。大慈寺の4幅は、その三十三身像を表現したもので、3幅には各が体、1幅に3体が描かれている。その描写は一尊ずつ丁寧に描かれ、彩色は金泥塗りといわゆる堂上彩色を施してあり、その他、丹、朱、群青、緑青や、紫、茶、黄、その他多彩色を用いている。尊形部分のみ後世に修復したとみられる。 大慈寺は禅宗寺院で、三原市・佛通寺を本山とする仏通一六派の一である。中世、和智氏の崇敬を受けていた。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色当麻曼荼羅図	けんぽんちやくしよくたいまんだらず	1幅	庄原市東城町東城	平2.12.25	絹本着色、軸装	縦148.3cm、横153.6cm	描法や色調の点から鎌倉時代(1192～1332)の作と推定される。浄土宗西山深草派本山の笠懸寺が江戸時代の元和9年(1623)に入手し、宝暦7年(1757)西方寺の再建落成に伴い、笠懸寺から寄贈されたと伝えられる。 細地は縦方向四幅の縦ぎ合わせである。図柄は通例どおり中央に阿彌陀、観音、勢至(せいし)の三尊、諸菩薩、その他虚空、宝楼、宝樹、宝池などいっゆる極楽浄土の景観が表わされており、左右及び下辺の端にはそれぞれ区画を設けて説話等が描かれている。西方寺の曼荼羅図は、後世その中尊部の仏身、蓮台、頭光、身光部に補彩が加えられている。全体的に見てあたたか味のある色相で、菩薩像の目鼻立もはっきりし、かつふくらした表情をしているなど、美術的に見るべきところが多い。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色仏涅槃図	しほんちやくしよくぶつねはんず	1幅	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目) 広島県立歴史博物館寄託	平2.12.25	紙本着色、軸装	縦200.0cm、横190.0cm	南北朝時代(1333～1392)の作。当初、墨の線だけで描かれていたが、至徳4年(1387)に彩色されたことが軸木銘から分かる。9段に62～64枚の紙を貼り継いで描かれているが、貼り継いだときに下になる側にも墨の輪郭線があり、画の下方から順に描いては継いでいったものと推測される。軸木に墨書銘があり、江戸時代後期までの修復の経過を知ることができる。 仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。沙羅双樹(さらそうじゆ)の下に横たわる釈迦を中心に、その死を悲しむ人や動物の姿が描かれている。紙本の涅槃図は珍しい。 東音寺は、沼田益開発領主・沼田氏の菩提寺として、平安時代(794～1191)に開かれたと言われる。鎌倉時代(1192～1332)、小早川氏が沼田荘地頭となると、小早川氏の菩提寺となった。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色観音上人絵伝 附 溜塗鞘書 1口 包紙 4枚	けんぽんちやくしよくしんらんしやうにんえでん	4幅	呉市川尻町川尻	平3.4.22	絹本着色、軸装	縦135.0cm、横77.5cm	浄土真宗を開いた観音上人にまつわる縁起説話を描いたもので、寛文3年(1663)東本願寺から光明寺へ送られたものである。細部にわたって非常に緻密に描かれ、彩色顔料の質も高く、華麗な仕上げになっており、保存がきわめて良好である。 大谷派系の画像では古いものであり、また作者の京都の町絵師や表具師の名前も墨書によって知られるなど、貴重なものである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦十六善神像	けんぽんちやくしよくしゃじやうろくぜんしんぞう	1幅	府中市栗柄町	平6.10.31		縦210.0cm、横81.5cm	釈迦十六善神像は、「大般若経」を転読する大般若会の時の本尊として懸用されたものである。 この画像の時代的特徴は、釈迦の肉髻珠(にっけいしゆ)が低く扇形になり、衣の先端が尖って台座にかかると、衣や体の墨線に勢いを出すための打込みや肥後線が使われることなどで、宋元風の影響が強く、南北朝時代末期から室町時代初期(14世紀)の作と考えられる。 この画像にはセットになる大般若経60巻が現存しており、全体的にも稀な例であることから、歴史的意義と共に本県において貴重な仏画である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦八相図	けんぽんちやくしよくしゃかはっそうず	8幅	尾道市西土堂町	平8.3.18	絹本着色 三幅一鋪 第一幅「託胎」、第二幅「降誕」、第三幅「試芸」、第四幅「出家」、第五幅「半度叉」、第六幅「降魔」、第七幅「転法輪」、第八幅「涅槃」	第一幅／縦114.0cm、横119.5cm 第二幅／縦112.1cm、横120.1cm 第三幅／縦111.8cm、横119.4cm 第四幅／縦113.6cm、横119.0cm 第五幅／縦113.5cm、横120.4cm 第六幅／縦112.6cm、横119.1cm 第七幅／縦113.1cm、横119.4cm 第八幅／縦112.2cm、横119.8cm	持光寺の八相図には、第一幅から順に「託胎(たくたい)」「降誕(こうたん)」「試芸(しげい)」「出家(しゅつげ)」「半度叉(ろうどしや)」「降魔(ごうま)」「転法輪(てんぽうりん)」「涅槃(ねはん)」の場面が描かれており、各幅に数筆ずつ、30余りの筆蹟が描かれている。 この八相図は、微妙な筆(ぼ)かきによって立体感を表し、繊細な色使いが施され、わが国中世の傑作(大和絵)に特有の高い所から見下ろす空間法が用いられている。わが国に残る大和風形式の釈迦八相図は、これを含めて6例しかなく、中世に描かれた八相図八幅本の中で、完存している唯一の事例である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色伝足利尊氏像	けんぽんちやくしよくでんあしかがたかうじぞう	1幅	尾道市東久保町	平28.3.28	絹本着色、一幅一鋪、軸装	縦107.0cm、横56.7cm	画面中央部に、束帯姿で高麗鏡(こうらいのかがみ)の上げ墨に坐す人物像を描く。人物の容顔は穏やかな印象に整えられており、その描写には似絵的な特徴が見られる。着している袍(ほう)は足利將軍家家紋に用いた五七桐(ごしちのきり)が一面に散らされている。 本画像は、足利尊氏と深い関係があった浄土寺に尊氏像として伝来した肖像画である。面貫や花押、奉持文書などはなく、像主は未詳であるが、足利將軍家との関わりをかがむべき原縁などが高い技量をも身に蓄けた中央絵師の手による制作と見られる出来映えは、広島県内の中世に遡る数少ない武人肖像画の中でも大変貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぽんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市西土堂町	平28.10.27	絹本着色、六幅一鋪、軸装	本紙縦202.9m、横154.3cm	仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。持光寺に伝わるこの涅槃図は、沙羅(さら)双樹(そうじゆ)の下、宝(ほう)舎(しゃ)合(ごう)たい(たい)に横たわる釈迦を中心に、それを取り巻く衆(しゆ)衆(しゆ)か(か)い(い)つ(つ)や動物が華麗した筆致・面貫によって描かれている。 本図は、旧裏打ち紙の銘文により、弘安7年(1284)に面師(えし)法橋(ほつきやう)若狭(わかさ)に於て描かれ、江戸時代中期までに3度の修理が行われたと伝わる。後補箇所が多いものの、本図の主要部である釈迦と周囲の衆衆の表現はほぼ制作当初の状態をとりどっている。 制作年代が鎌倉時代に遡る涅槃図の遺例が少なく、本図は制作優秀であるとともに、度重なる修理を経ながら大切に使用され、受け継がれてきた歴史的価値を有するところから、貴重である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造四天王立像	もくそうしてんのうりゅうざう	4躯	三原市本郷町南方	昭28.6.23	寄木造、玉眼	像高171cm	東禅寺は、旧名基沼(ひきぬ)寺といい、小早川氏の氏寺として相当の大寺であったが、雷火によって焼失し、現在は一堂を残すのみとなった。 四天王像は往時の盛運をしのぶに力強い優作で、各々玉眼入り、多聞天(たもんてん)の首の柄と玉眼の伸え木の墨書銘により、鎌倉時代の元徳2年(1330)6月17日に、源信成が住持兼美を願って造像したことが知られる。またある并海神社旧蔵文書により、源信成は鎌倉時代末期(14世紀前半)に沼田庄梨羽(なしわ)郷并海名の名主であったことが知られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来座像	もくそうだい にちによらいざう	1躯	世羅郡世羅町	昭28.6.23	寄木造、玉眼入り	像高66cm、膝張57cm、台座高さ88cm、光背高さ103cm	玉眼入り、漆箔のこの仏像は金剛界の大日如来で、もとは今高野山境内の現在塔の岡と呼ばれている丘陵に立っていた。多宝塔の本尊であったと伝えられる。胎内の頸の部分に「元亨三年(1323)八月十五日源近宗」という墨書銘があり、造立年が明確で、仏体だけでなく光背、台座ともに当初のものが完存していることは極めて稀であり、このような例は、鎌倉時代(1192～1332)以前の仏像には非常に少ない。		関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫 (0847-22-0840)
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくそうじゅういちめんかんのんりゅうざう	1躯	世羅郡世羅町西神崎	昭28.6.23	一木造	像高100cm	観世音は大悲大慈の菩薩で、その功德により、千手、如意輪、馬頭などの観音に変化して人々の崇拜を受けたが、十一面観音もそのような変化観音の最初の菩薩で、十一種の威力を一身にあらわしたものである。 この観音は仏像を欠失しているが、口脛や唇の紅などに当初の彩色を残した平安時代(794～1191)の優れた作品である。小像ではあるが、木目を巧みに利用したこの菩薩は、かつて今高野山ゆかりの大寺の遺跡かと思われる大御堂に安置され、地元の人々によって大切に保存されている。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音座像	もくそうじゅういちめんかんのんざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	寄木造	像高61cm	龍泉寺の本尊で、繊麗な面相の平安時代(794～1191)の作。十一面観音としては珍しい坐像である。脇侍の多聞天・不動明王も広島県重要文化財である。 龍泉寺は小早川氏一族の小泉氏の氏寺で、標高340mの山上にある。当初は真言宗であったが、現在は曹洞宗になっている。		
県	重要文化財(彫刻)	木造多聞天立像	もくそうたもんてんりゅうざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	一木造	像高84cm	龍泉寺十一面観音の脇侍。顔かたちの引き締まった秀作で平安時代(794～1191)の作品である。一木造のため割れを防いでいる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくそうぶどうみょうりゅうざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	一木造、背割りあり	像高85cm	龍泉寺十一面観音の脇侍。長身で腰の張りが細く柔らかい感じのする平安時代(794～1191)の作。一木造のため割れを防いでいる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来座像	もくそうあみだによらいざう	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29	寄木造	像高64cm、膝張54cm	『芸叢通志』によると、江戸時代後期(18～19世紀前半)には善法寺は康寺になっており、相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で、かつては真言宗寺院であったと伝えられている。 平安時代(794～1191)の作で、衣の襷が異常に高く、出雲地方によく見られる地方色がある。陰障の文化交流を考える資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像残欠	もくそうやくしによらいざうおびざんけつ	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29		現在の高さ70cm	『芸叢通志』によると、江戸時代後期(18～19世紀前半)には善法寺は康寺になっており、相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で、かつては真言宗寺院であったと伝えられている。 平安時代(794～1191)の作で、腰からは切り落とされて現存しない。この仏像は衣の襷が異常に高く、出雲地方によく見られる地方色がある。陰障の文化交流を考える資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造多聞天立像	もくそうたもんてんりゅうざう	1躯	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29	一木造	像高114cm	平安時代初期(9世紀)の優作である。康和光寺にあった四天王像のうちの1体と言われる。 康和光寺は出土した瓦から推測して、奈良時代(710～793)の創建と思われる寺院である。周辺は和名類聚抄に載る津之郷の郷名を伝えることなどから、この地に有力な豪族が居住し、和光寺はその氏寺であったことも考えられる。 ※和名類聚抄(わみやういじゅうしやう)…平安時代の百科辞典		

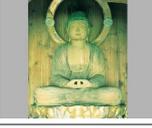
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造文殊菩薩座像	もくそうもんじゅぼさつざぞう	1軀	尾道市東久保町	昭29.9.29	寄木造、彩色	像高63cm	背に頭光身光を負い、右手に宝剣、左手に経巻を持ち、獅子の背上の蓮華座に半跏(はんか)坐している。金輪をまじい眼光爛々たる獅子は、文殊菩薩に比べて大ふりに造られ、南北朝時代(1333～1392)の作とされる。なお、本像を納める厨子の床板に、南都津波唐(つばい、椿井)仏所で造像され、永和4年(1378)7月4日に安置された旨の墨書銘が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木心乾漆日光菩薩立像	もくしんかんしつにっこうぼさつりゅうぞう	1軀	府中市本山市	昭30.3.30	一木造	像高88cm	弘仁4年(813)に創建された青目寺(しょうもくじ)に現存する代表的仏像で、寛保3年(1743)に、山の中腹の現在地へ移されたという。平安時代(794～1191)以来の古仏像群の中でもひとときわづくれたこの像は、平安時代初期の作品と言われ、本尊の十一面観音の臨侍として伝存している。衣文の彫りがやや浅く見えるが、これは乾漆(かんしつ)の手法によるためと思われる。		関連施設: 青目寺収蔵庫(0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木心乾漆月光菩薩立像	もくしんかんしつがっこうぼさつりゅうぞう	1軀	府中市本山市	昭30.3.30	一木造	像高88cm	弘仁4年(813)に創建された青目寺(しょうもくじ)に現存する代表的仏像で、寛保3年(1743)に、山の中腹の現在地へ移されたという。平安時代(794～1191)以来の古仏像群の中でもひとときわづくれたこの像は、平安時代初期の作品と言われ、本尊の十一面観音の臨侍として伝存してきている。衣文の彫りがやや浅く見えるが、これは乾漆の手法によるためと思われる。		関連施設: 青目寺収蔵庫(0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木造日光菩薩立像	もくぞうにっこうぼさつりゅうぞう	1軀	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高166cm	善根寺仏像収蔵庫は、古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸藩通志』によると「本徳山と称し、稲村山故城主田坂右馬允義忠が、祈願所なりしといふ」とある。この像は木造日光菩薩像とともに、この薬師堂の本尊臨侍で、背割(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造月光菩薩立像	もくぞうがっこうぼさつりゅうぞう	1軀	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高166cm	善根寺仏像収蔵庫は、古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸藩通志』によると「本徳山と称し、稲村山故城主田坂右馬允義忠が、祈願所なりしといふ」とある。本像は木造日光菩薩像とともに、この薬師堂の本尊臨侍で、背割(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造吉祥天立像	もくぞうきしょうてんりゅうぞう	1軀	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造	像高153cm	善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつで、吉祥天は神像風の髪形をした古様な像であり、福徳を司る女神として古くから恭敬されている。本像は、背割(せぐり)があり割れを防ぐ手だてを講じている。平安時代初期(9世紀)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくぞうてんぶりゅうぞう	1軀	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高135cm	善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつである。腐朽しており持ち物を欠失しているため像名を明確にできないが、平安時代初期(9世紀)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	世羅郡世羅町伊尾	昭30.9.28	一木造、彩色	像高54cm	狛犬は、宮中や神社におかれた守護獣の像で、普通の獅子と一角をもつ獅子の姿に作られ、それぞれ阿吽(あうん)をあらわすのが一般的である。鹿長楽寺跡にある石造不動明王(ふながたこうはい)に隣り彩色され、元享2年(1322)の銘がある。その簡潔な作風や独自な形式から、行者系彫刻の先駆的なものとして注目される。共存する多聞天(たもんてん)も銘はないが同時の作と考えられる。ここから高島寺に運ばれた水槽(みずうね)は石製湯槽とも推測されており、縁上面(ふちじょうめん)に元享2年銘が刻まれている。福木西山の康西福寺跡付近の供養碑(板碑)2基のうち1基には法華経臂輪品(ほけようひん)の1節がある。他の1基は正中2年(1325)銘がある僧入連の供養碑である。背後に立つ地藏菩薩(じそうぼさつ)像は石に隣り刻まれ背面に暦成4年(南朝年号、1341)銘がある。		関連施設: 大田庄歴史館(0847-22-4646)
県	重要文化財(彫刻)	僧行賢関係遺品 石造不動明王立像 1軀 石造多聞天立像 1軀 石造地藏菩薩立像 1軀 石造供養碑 2基 石造水槽 1口	そうぎょうけんかんけいひん	6点	東広島市高屋町中島	昭31.3.30	石造	不動明王/像高51cm、高さ82cm 地藏菩薩像/像高51cm、高さ1m	鎌倉時代後期から南北朝時代(13世紀後半～14世紀)にかけて、僧行賢が発願して作ったといわれる石造物群。東広島市高屋町福木を中心に分布する。行賢については詳細不明である。鹿長楽寺跡にある石造不動明王(ふながたこうはい)に隣り彩色され、元享2年(1322)の銘がある。その簡潔な作風や独自な形式から、行者系彫刻の先駆的なものとして注目される。共存する多聞天(たもんてん)も銘はないが同時の作と考えられる。ここから高島寺に運ばれた水槽(みずうね)は石製湯槽とも推測されており、縁上面(ふちじょうめん)に元享2年銘が刻まれている。福木西山の康西福寺跡付近の供養碑(板碑)2基のうち1基には法華経臂輪品(ほけようひん)の1節がある。他の1基は正中2年(1325)銘がある僧入連の供養碑である。背後に立つ地藏菩薩(じそうぼさつ)像は石に隣り刻まれ背面に暦成4年(南朝年号、1341)銘がある。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来座像	もくぞうやくしにょらいざざう	1躯	安芸郡府中町石井城	昭32.2.5	寄木造、彩色	像高86cm、膝張77cm	道隆寺は、平安時代(794～1191)に開創された安芸国府の古寺で、薬師如来はその本尊である。樟材で全体に素地木目があらわれ、容貌は端正で破綻の少ない佳作である。通肩(つうけん)にかけた衣がひびく薄感ぜられ、その腹部衣文(えもん)にすずかな翻波(ほんば)式をかかえる点は平安様式であるが、胎内に建仁元年(1201)の建立銘をもっている。また、この像には肉髻、白毫の痕跡がないところから、地方作との説もあるが、平安様式の流れをくむ本格的な作品であることは、各所の技法から十分分かる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間において光明を放つとされる		関連施設: 道隆寺仏像収蔵庫 (082-282-4636)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来座像	もくぞうやくしにょらいざざう	1躯	三次市三良坂町仁賀	昭33.1.18	寄木造	像高55cm、膝張42cm	福善寺は応永30年(1423)の創建と伝える田利(た)り八幡神社の別当寺で、今は曹洞宗の寺であるが、もとは真言宗であった。 薬師如来はこの寺の本尊で、宝髻は螺髪(らほつ)でなく、切り込みであらわれ、肉髻、白毫の痕はなく、容姿は素朴であるが、衣文、肌の線に用いられた刀法や用材の使用法は本格的な技法を思わせるものがある。ここに肩割(せきわり)を施して保存に留意し、面相は豊満のうちに威容をたえた作風は平安時代末期(12世紀後半)の製作と思われる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間において光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造神像 僧形神座像 1躯 女神座像 2躯	もくぞうしんざう	3躯	三次市三良坂町田利	昭33.1.18	一木造、彩色	僧形神座像 像高48cm、膝張39cm 女神座像 像高45cm、膝張30cm 女神座像 像高38cm、膝張28cm	室町時代の応永12年(1405)、和智元実によって寄進された神像。仏師はいずれも源中納言空心と記録されている。僧侶の姿をした八幡神像と女神2像があり、3像とも彩色され作調は素朴である。3像ともに底部に墨書銘がある。 田利(た)り八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面にあり、鎌倉時代(1192～1332)に和智氏一族の広沢氏によって勧請されたと伝えられている。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざざう	1躯	三次市海渡町	昭36.4.18	寄木造、彩色	像高88.2cm、膝張74.2cm	帰海寺の本尊で、黒漆塗でところどころに彩色の痕跡がある。台座に坐るこの像の胎内には墨書銘があり、それによると、天文12年(1543)8月、永真殿主が住持の時、広沢藤原朝臣豊実を大壇那として、京都烏丸の仏師雲漢の子孫という康正が作った旨を記している。 建立銘のある数少ない作品として仏像彫刻史上の資料となるものである。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうざう	1躯	竹原市竹原町	昭37.3.29	寄木造、玉眼	像高85cm、光背高さ94cm	西方寺(さいほうじ)は小早川隆景の創建と伝えられ、京都の清水寺を模して造ったという普明間に本像は安置されている。玉眼入りで、刀法は鋭く複雑な衣文の構成には宋朝風の影響が見られる。右足のほぞに「法印性圓」と、左足のほぞに「同四天王」の墨書銘があるが、紀年がないのは惜しまれる。宝相華(ほうそうげ)が唐草文様を透(すかし)彫にした金銅製舟形(ふなかた)光背も仏像と一具で、室町時代(1333～1572)の作と考えられる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざざう	1躯	尾道市東久保町	昭37.7.20	寄木造、漆箔	像高88cm、膝張72cm	浄土寺阿弥陀堂の本尊で、紙本墨書定証(じょうしゅう)起請文(きしょうもん)(重要文化財)に記載されている像と推定され、脇侍の観音・勢至(せいし)菩薩とともに内陣に安置されている。 寺伝では定朝作と伝えるが、定朝様を忠実に複製した仏師による平安時代末期(12世紀)の作と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造仁王立像 像内に永仁貳年の銘あり	もくぞうにおうりゅうざう	2躯	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	樟材、寄木造、玉眼	像高282cm	不動院の樓門にある樟材、玉眼入りの像で、阿形像の像内背板の墨書銘によると、両像とも大願主は内妙阿闍梨(あじり)快賢、仏師は性智房らで、永仁2年(1294)の作であることを伝えている。更に阿形頭部耳後の須目(すめ)に墨書があり、正保2年(1645)に長州藩主が仏師善助をして、仁王像の両眼を補修したことも記している。鎌倉時代(1192～1332)の在銘の仁王像は全国でも数少なく、時代相をあらわす雄健な作品である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造二十八部衆立像	もくぞうにじゅうはちぶしゅうりゅうざう	13躯	三原市大和町平坂	昭38.11.4	樟材、寄木造、玉眼、彩色	像高48～52cm	棲真寺(せいしんじ)は現在では小さな寺であるが、承久元年(1219)土肥実平・遠平父子が、源頼朝の娘であり遠平の妻であったと伝えられる妙仏尼の菩提のために建立したという小早川氏ゆかりの寺である。 二十八部衆像は樟製の玉眼入りで彩色されており、小型ながら木目を生かした写実的な入念の作で、28躯が完成していないのが惜しまれる。鎌倉時代(1192～1332)の作である。 なお現存するのは、密流金剛力士(みつりやくこんごうりきし)、摩羅菩薩王(まらびつざうおう)、金毘羅王(こんびらおう)、満喜車王(まんぜんしゃおう)、帝釈天(たいしゃくてん)、毘楼博叉天王(ひらうはくしあてんのう)、金色孔雀王(こんじくけうおう)、散首大尊(さんしゅたいしゆ)、沙迦羅羅王(さかろらおう)、阿修羅王(あしゅらおう)、乾闥婆王(けんたつばおう)、迦楼羅王(かろらおう)、大梵天王(だいぼんてんのう)の13軀である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩半跏像	もくぞうじざうはんざつはんかざう	1躯	東広島市河内町入野	昭38.11.4	寄木造、漆箔	像高84cm、膝張48cm	この像は竹林寺の寺院のひとつである乾蔵坊の本尊であったものである。漆箔、樟材のすぐれた作で、右手に鏡杖、左手に宝珠を持ち、右半跏(はんか)で左足をのびた姿で台座に坐っている。この菩薩像はかつてひどく破損していたため、その胎内銘が知られているが、それによると建武5年(1338)の作という。		

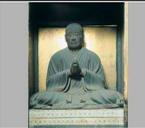
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造聖観音立像	もくぞうしょうかんのりゅうどう	1躯	府中市本山町	昭40.4.30	一木造	像高117cm	観音像の基本形ともいえるこの聖観音像は、青目寺(しょうもくじ)が亀ヶ岳の山頂で天台宗の大寺院として存在した頃の、いづれかの御堂の本身であったであろうと思われるが、現在は虫蝕が著しく、両面が後補であるのは惜しまれる。県重要文化財の日光・月光両菩薩と同じ平安時代初期(9世紀)の優秀な作品で、あるいは青目寺創建当初からの仏像かと思われる。		関連施設: 青目寺収蔵庫 (0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくぞうてんぶりゅうどう	2躯	府中市本山町	昭40.4.30	一木造	像高118cm, 117cm	この像については、四天王のうち持国天(じこくてん)及び多聞天(たもんてん)との伝承はあるが、各々の両腕を江戸時代(1603~1867)に修復しており、その名称を明らかにするだけの確証はない。ともに平安時代初期(9世紀)の作で、保存は良好である。平安時代から南北朝時代(9~14世紀)にかけて栄えた青目寺(しょうもくじ)の仏像として、見るに足る作品である。		関連施設: 青目寺収蔵庫 (0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像	もくぞうしゃかにらいざそう	1躯	三次市吉舎町吉舎	昭40.4.30	寄木造、玉眼、彩色	像高43cm, 膝張35cm	善逝寺(ぜんぜいじ)は、現在、臨済宗仏通寺派の寺で、和智筑前守資実の開基と伝えられる。胎内の墨書から、応安2年(1369)藤原師実が同寺の本尊として寄進し、宝徳3年(1451)修理したことが明らかである。玉眼、彩色の保存もよく、地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいざそう	1躯	三次市吉舎町清綱	昭40.4.30	寄木造、漆箔	像高96cm, 膝張75cm	浄土寺は、応永14年(1407)南山山3代城主和智信謙守師実開基の和智氏の菩提所で、もと臨済宗の浄土宗に改宗している。胎内の墨書から、同寺の本尊として七代和智筑前守資実が天文4年(1535)に寄進したことが明らかであり、かつ保存が完好である。地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいざそう	1躯	廿日市市宮島町魚の棚	昭42.5.8	寄木造、玉眼半間の相、台座・光背は後補	像高56cm, 座張44cm	結跏趺座(けっかふざ)して定印(じょういん)を結ぶ。衣は通肩(つうけん)に懸け、螺髪(らっぽう)は右旋回(みぎまわ)りに密に刻している。肉髻、白毫は水精をもとのまま残す。玉眼半間の相で、額の三道を豊かに表す。『芸州嚴島図説』に「龍上山西方寺宝寿院、本尊阿弥陀、座像御長一尺とあるもので、盛徳の観音、勢至(せいし)は欠失、後補のなす形蓮座(れんざ)の上面に天文2年(1533)の修理銘がある。衣文は袈裟を欠くが、線刻の意をうける彫法は顔部顔面のやわらかい表現とともに室町時代初期(14世紀)をあまり下らない頃のものと思われる。伝来も正しく保存も良好である。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいりゅうどう	1躯	三原市西町	昭42.5.8	寄木造、半眼の玉眼	像高77.5cm	衣は通肩(つうけん)に懸け、袈裟の環は金具をもって作る。衣文は流麗な写実風にしかも袈裟を偲ばせ、いわゆる安阿弥流(あんあみりゅう)といわれる容姿を思わせる。袈裟は金泥にて繊細なワックスの文様と唐草文を施している。保存は良好で、左足のほぞに「巧匠口口」の墨痕を残している。台座は後補で、もと胎内にあたいたが「慶長七年六月十七日」の墨書銘がある法名蓮記の矩形の料紙を添えているが、慶長7年(1602)に修理をし、これを納めたと思われる。写実的作風、面顔の表現は鎌倉時代末期(14世紀前半)、あるいはそれをあまり下らない作と思われる。西国寺(尾道市)の釈迦如来をしるしをさせるものがある。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいざそう	1躯	福山市沼隈町上山南	昭44.4.28	寄木造、半眼木眼	像高67cm, 膝張56cm	寺伝の古記によると、本尊は当地の鹿寺西大寺(西提寺とも書く)の本尊であったと伝え、衣を通肩(つうけん)にかけ、木彫の眼を半眼に結跏趺坐(けっかふざ)し、弥陀の定印(じょういん)を結び後補の襴合蓮座に坐す。衣文の彫り後補の盛りでやや異なることもあるが、全体的によく似せとどめている。衣の裾の縁に、当初の金定で描いた文様の痕を残している。光背(こうはい)は左上方部を欠失しているが、本体と同時代の作かと思われる。室町時代初期(14世紀)の作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造四天王立像	もくぞうしてんのりゅうどう	4躯	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭45.5.14	一木造	像高ノ佐持開天立像 155cm、佐増長天立像 190cm、伝広目天立像 155cm、伝多聞天立像166cm	四像とも檜材の一木造で、各像ともに腹部の天衣(てんぬ)に翻波(ほんば)式の彫法が見られる。天邪鬼(あまのじゃく)を踏んで立つ佐増長天(さけつちやうてん)像の腹部及び臀部には、寄木造の初期彫刻段階を示すものかと思われる手法が見られる。各像の台座はともに後補。鹿寺の御堂に保存されていたためか、欠損し易い部分は当初のものではなく補修されているものが多い。平安時代中期(10~11世紀)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫 (三原市教育委員会文化課 文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造兜跋毘沙門天立像	もくぞうとばつびしゃもんてんりゅうどう	1躯	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭45.5.14	一木造	像高170cm(台座を含む)	兜跋毘沙門天については、唐の玄宗皇帝の時代(8世紀前半)、安西城が敵軍に包囲された時、城の樓門に兜跋毘沙門天が出現して敵を追い払ったという伝承があり、そのため都城の樓門に置かれたわしがあつたためかその作例は少なく、県内にはほとんどない。本像は台座まで一木で彫成して、腹部の天衣(てんぬ)に翻波(ほんば)式の彫法が見られる平安時代前半(9~10世紀)の作品と見られるが、両肩から手先まで、持物など後補の部分が多く、顔面を彫成しなわしているのは惜しまれる。		関連施設: 善根寺収蔵庫 (三原市教育委員会文化課 文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造男神坐像	もくぞうだんしんざぞう	1躯	三原市八幡町宮内	昭45.5.14	樟材、一木造	像高89cm、腹部の幅51cm	神像は、神仏習合思想の中で、仏像の影響を受けて作られ始めたものである。神像が製作された文献上最古例のものは天平宝字7年(763)であるが、現存するのは平安時代初期(9世紀)のものである。本像も七ノ半製の平安時代(794～1191)の作である。社伝では藤原百川(ももかわ)像という。髷に朱色を、口髭などは繊細な墨線をほぼ当初のまま残している。両手先及び膝、それに冠の前部を欠失しているのは惜しまれる。		関連施設: 御領八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	広島市安佐北区深川四丁目	昭46.4.30	寄木造	総丈270cm、膝張237cm、肩張145cm、顔面長93cm、顔面横92cm、右手幅28cm	室町時代中期(15世紀)の作である。肩より腹にかかる両衣にはかさかな翻波(ほんば)式の彫法の痕が見え、体内には寄木(よせぎ)を支える組み木がうかがえる。寄木を継ぐには、要所を約12cmの鉄製カスガイでもめている。また、彫木の表面には荒目の麻布をはり、その上に黒漆を塗り、そして金箔をかいた本格的な手法がうかがわれ、更に差こみになっている左手首の柄には、時代を語る手弄(ちよぶる)の削り痕が残っている。		
県	重要文化財(彫刻)	木造仏殿様厨子	もくぞうぶつてんようずし	1基	尾道市向島町	昭46.4.30	桁行26cm、梁間17cm、棟高(基礎とも)73cm、木造漆塗		本品は、工芸品であるとともに、和様の一部に交えた禅宗様の室町時代(1333～1572)の仏殿建築を彷彿しており、多少の欠損と塗りの剥落はあるが、小さな作品であるにもかかわらず、細部に究巧な時代の特色を示しており、この種のものとしては珍しい秀逸な作品である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	福山市西町二丁目	昭47.4.24	寄木造	像高97cm、膝張47cm	平安時代後期(12世紀)の作と思われる傑作で、寄木造である。顔面及び胸部を金色に塗っているが、これは後補と思われる。左肩と右腰部の寄木は一部欠損しているが、腹部の辺の衣文には翻波(ほんば)式の手法が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩立像	もくぞうじぞうぼさつりゅうぞう	1躯	福山市西町一丁目	昭47.4.24	寄木造	像高60.5cm	室町時代中期(15世紀)の作と考えられる像。寄木造、玉眼入り。顔及び胸部に金泥を塗り法衣に金箔をいたした上に、繊細優美な宝相華(ほっそうげ)文様を描いている。衣は通肩(つうけん)にかけ、右手の鐙杖(しゃくじょう)は当初のもの、左手の宝珠は後補と思われる。岩座の上の白形蓮座に立つ写実的な作風の秀作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像ならびに脇侍二菩薩の獅子座および白象座	もくぞうしゃかにょらいざぞうならびにわきじにぼさつししざおよびはくぞうざ	3座	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24	寄木造、獅子座、白象座	本尊/像高86cm、膝張76cm 獅子座/高さ93.5cm、長さ101cm 白象座/高さ66cm、長さ132cm	南北朝時代の貞和3年(1347)頃の歌遊三尊像(脇侍は後補)、現在の福山城跡の丘陵(崇興寺山)にあつたとされる禅宗寺院・崇興寺に安置されたが、江戸時代初期(17世紀)の福山城築城の時、現在地に移されたと言われる。寄木造。釈迦三尊像が残る例は県内でも少なく、両脇侍の動物座がそろうものは更に少ない。本尊は、衣の下に漆を塗り布を貼った座が見られる。手の指間に弁細をあらわし、跏趺印を結び細脚跏坐(けっかふざ)して、装飾蓮華座に坐している。造像時、像内に金銀製五輪塔や経典類が納入されていた。胎藏寺は真言宗寺院で、もと神辺(かんべ、深安郡神辺町)にあり福島丹波の折廻所であった。福島正則の改易後に福山城下へ移り、17世紀中頃、現在地に移ったといわれる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像	もくぞうやくしにょらいりゅうぞう	1躯	福山市朝町後地	昭48.12.18	寄木造、玉眼、白毫、螺髪は左螺旋、肉髻相	像高79.0cm	室町時代中期(15世紀)の作である。寄木造。医王寺の秘仏として厨子に納められていたため大変保存がよく、台座等すべて当初のものである。着衣の彫法は写実的で、特に胸部の衣文及び左右両手のひから垂れる法衣のたもとにはよく室町時代中期の特色を表している。法衣は通肩(つうけん)にかけ、右手を上げて掌を前に、左手は下げて掌の上に薬壺を握する立像である。頭部螺髪(らほつ)は螺線(らせん)を施した緻密な作で肉髻を施しているが、耳朶(じだ)には孔を貫く。口唇にされた紅の顔料は当初のものと思われる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩半跏像	もくぞうじぞうぼさつはんかぞう	1座	福山市金江町金見	昭48.12.18	寄木造、円頂玉眼、水晶製の白毫	像高55.0cm、膝張41.5cm	室町時代中期(15世紀)の作。寄木造。室蔵坊に伝わるものだが、像底部の六角柱に承応3年(1654)銘の墨書があり、もと京都・龍淵寺にあつたことが知られる。この像は蓮華座上に半跏(はんか)して坐り、法衣は通肩(つうけん)にまとい装束をかけた衣文は写実的である。胸の下部に播帯(こんたい)をあらわしているのは珍しい。円頂で白毫をほめ、眼は玉眼に造る。頭部に三道があり、耳朶(じだ)には孔を貫くなど時代的技法を残している。 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造毘沙門天立像	もくぞうびしゃもんてんりゅうぞう	1座	福山市神村町字平	昭48.12.18	一木造、獅子岩座	像高66.5cm	平安時代(794～1191)の作。一木造。胃(かぶと)を着、後補の鬼座に立つ天部の姿に彫成し、腹部には五式の翻波(ほんば)をかみをおろす。腹から丹田形に垂れる腰紐は巻蓮度(まきづな)で、翻波(ほんば)式の彫法を用いていることを明らかに示している。更に背中の寄尾垂(かぶとだれ)も短かく時代の特徴をよ(表)したものである。なお、材質の木目を巧みに利用した秀作ではあるが、円光背・打抜銅製宝冠(うちぬきどうせいぼうかん)・持物及び腰部左右に垂れる體(むれ)は後補である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造観音菩薩立像及び胎内納入品 木造十一面観音立像1軀、木造不動明王立像1軀、小骨片1片、印仏1,840枚	もくぞうかんのんぼさつりゅうぞうお よびたいないのうにゅうひん	1軀	呉市安浦町内海宇寺迫	昭50.4.8	一木造、背割りあり	観音菩薩像高107cm、十一面観音像高55cm、不動明王像高14cm、印仏縦15cm、横8cm	観音像の衣文の表現の刀法は遅く、背部の衣文を彫縁で表す手法が見られ、前部の衣文には微かに翻波(ほんば)式の刀法が見える。この像には背割り(せり)があり、胎内には印仏した紙葉をこりて束ねて3段に安置している。 印仏紙は文書を利用したもので、正和4年(1315)や「延慶」、「元応」など鎌倉時代末期(14世紀前半)の年号が見え、観音立像も同時代の製作であろう。		
県	重要文化財(彫刻)	磨崖和霊石地藏	まがいわれいしじぞう	1軀	三原市麓浦町向田浦字地藏窟	昭50.4.8	磨崖式半肉彫り	石の高さ28m、厚さ4m、幅5m、坐像の高さ96cm、膝張85cm	波打際の花崗岩に彫刻された磨崖式半肉彫りの像で、頭部のうしろに円光背(えんこうはい)を浮き彫りにし、衣を透肩(つうがけん)に胸に環珞かけ、蓮台上に結跏(けっか)している。右手に錘杖(しやくじょう)、左手に宝珠をのせている。像の左右には花箱を浮き彫りにし刻銘があるが、海と風雨にさらされて銘文は判読しにくくなっている。他の石脚に移刻された銘文によると、「于時正安二庚子年九月日大願主敬位平朝臣茂盛 幹縁道俗都合七〇余人 仏師念心」とあり、造立の縁故を知りうる。なお、正安2年は西暦1300年にあたる。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづつた首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじぞうぼさつぞう	1軀	尾道市御調町今田	昭50.9.19	寄木造、臼形二重蓮座	像高41cm、膝張34cm、光背の径29.1cm、台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらわし、半眼に開いた眼は本影で、首には三道がある。透肩(つうけん)にかけた法衣及び身肌は金色で、衣には唐草や定数を描き、その彫法は写実的で流麗である。胸には透彫(すかしぼり)金具の環珞をかけている。右掌には当初の錘杖(しやくじょう)をもち、左掌には宝珠をのせていたと思われるが今は欠失している。台座、光背(こうはい)ともに当初のもので、室町時代(1333～1572)の作である。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづつた首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造持国天立像	もくぞうこくてんりゅうぞう	1軀	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造(頭部・胴体は一木彫成)	高さ40.5cm	寄木造ではあるが、頭部と胴体は一木彫成にした小像である。鎧を着け右手を肩の上まで上げて鉢(ぼく)を持ち、左手は腰に掛けている。肩裂(かたぎれ)及び袴布を掛け、腰の圓筒から懸(ひれ)ぎぬを垂らし、おり、もとは彩色されていたと思われる痕跡があるが、今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んだ秀作で、頭部に前立(まえだて)を走り、頭髪を束ねて五眼をほめ、口を強く縮んだ気力にあふれる相の像である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	木造日蓮上人坐像	もくぞうにちれんしょうにんざぞう	1軀	三次市向江田町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	昭53.1.31	寄木造、玉眼、裳懸座式台座	像高13.5cm、像幅14.7cm 台座/高さ24cm、横10.5cm、幅8.4cm	本像は玉眼入りの小品で、裳懸座(もかけざ)式台座と一体をなし、その下の礼座座(らいばんざ)座部の裾張に文相9年(1473)に真淨初日仏が寄進したことを示す遺書があり、この本像の製作年代を推定できる。本像は、右手に新(しやく)を持ち左掌は開いているが、経巻を持っていたと思われる。額はすこぶる強豪鋭利で堂々としており、保僧日蓮の面影を十分伝えている。 ※日蓮(1222～1282)…日蓮宗の開祖		関連施設：広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(彫刻)	木造聖観音菩薩坐像	もくぞうしょうかんのんぼさつぞう	1軀	竹原市吉名町	昭53.1.31	一木造	像高93.5cm、膝張72cm	この菩薩像の所在する場所を観音谷と称しており、『芸通志』によると古くは大寺であった廃長福寺跡の観音堂に安置されている。法衣を透肩(つうがけん)にかけ結跏趺坐(けっかざ)の姿勢のこの菩薩像は、頭部及び胴体を一木で造り、膝張部のみを寄木にしている。宝髪を高く結い、そのはえむちには冠座の痕が見られるが、冠は欠失している。眼は本影で、口紅・口籠ともに当初のまま残っている。法衣衣文の彫法は速く全体に薄着に見えるが、これは像の木地に布をほり付けた痕を残しており、その上に漆を塗る乾漆の手法によつたためと思われる。現在も黒漆の上に置いた当初の金箔をよく残している。当初の姿をよく伝える平安時代後期(12世紀)の作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像	もくぞうしゃかにらういざぞう	1軀	東広島市安芸津町上立花	昭53.1.31	寄木造、複合装飾蓮座、水煙透彫の舟形光背、玉眼	像高41cm、膝張32cm 光背/高さ30.5cm、46.5cm 台座/高さ37.5cm	当初のままの光背(こうはい)を背に両手を定印(じょういん)に結び、これも当初のままの複合装飾蓮座に坐すこの仏像は、頭髪を細密な螺旋(らせん)状に表し、頭頂肉髻を小型で高くした室町時代中期(15世紀)と思われる時代的特色をよく表している。白毫は透明で、眼は玉眼である。像は下地に黒漆をかけた。その上に金箔をおいた金色(一部後補)でその法衣の上に描かれた唐草文の痕も製作時代を知る手がかりとなる。舟形に作られた光背は、上部及び左右に都合額(たけぶつ)を記し、化仏を中心に水煙の昇る状態を透彫(すかしぼり)で表した珍しい遺品であるが、左方上部の一角を欠失しているのは惜しむれる。 ※肉髻(にせき)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらういざぞう	1軀	世羅郡世羅町田打	昭53.10.4	寄木造、漆箔	像高68cm、膝張66.5cm、光背の高さ139cm、幅102.5cm、台座の高さ47cm	頭部髪(らまつ)を大型に造つたこの仏像は、衣文に翻波(ほんば)式の彫法をうかえる部分を所々に残した、本格派仏師の作と思われる。像全体は表面に漆を塗り、その上に金箔をおいている。像体を倒して内部を見ると寄木の状態及び釘(かすがい)の使用がよく分かる。右手を肩にはめこむ技法を用いていることは、寄木造の手法を知るうえで重要である。また、胎内の背の部分に承元4年(1210)の造立銘、膝部の裏に天文2年(1533)の修理銘があり、この仏像の造立年やその趣旨を知ることができ、貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにらういりゅうぞう	1軀	福山市内海町	昭54.3.26	寄木造、玉眼	像高83.5cm	木彫寄木造である。頭部胴部を一木をもってよく応用して、木目を左右均等に衣文にまで応用するなど、巧みな彫法を施している。 台座、光背(こうはい)は後補と見られる。室町時代中期(15世紀)の作である。 西音寺は真言宗寺院である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	府中市上下町上下	昭54.3.26	寄木造、開敷蓮座、円頭光背	像高149cm、膝張101cm、台座高さ19cm	木彫寄木造で、鎌倉時代後期(13世紀)作の半丈六仏である。顔面・胸部の金色、薄墨色(灰色)の法衣の彩色、頭部螺髪(らぼつ)と円光背(こうはい)の表面の青色は江戸時代(1603~1867)に彩色されたものと思われる。 ※半丈六仏(はんじょうくろぶつ)…いわゆる丈六仏(1寸6尺の略で立像は約4.8m、坐像は約2.4m)の半分の大きさの像。		
県	重要文化財(彫刻)	木造一願上人坐像	もくぞういちがんしんしょうにんざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造、乾漆、玉眼	像高80cm、膝張82cm	時宗の寺院である西郷寺の開基と伝えられる六代遊行(ゆきよう)上人一願の坐像である。この像は非常に写実味豊かで、顔面・顔面の筋骨や肉付きは巧みに表現されており、顔面・両手の皮膚色・唇の赤色等の彩色にすぐれている。像の仕上げは、木彫の上に麻布を貼り漆を塗布する方法を二度くり返し、像全体に堅牢性を蓄わせた工夫がなされており、作者は不詳ながら、その確かな技術がうかがえる。南北朝時代(1333~1392)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	金銅阿彌陀如来及び両脇侍立像	こんどうあみだにょらいおひりょうきょうりゅうざぞう	3躯	尾道市東土堂町	昭55.6.24		中尊阿彌陀如来立像/全長57cm、宝身48cm、台座9cm 脇侍観世音菩薩立像/全長38cm、宝身31cm、台座7.5cm 脇侍勢至菩薩立像/全長38cm、宝身31cm、台座7cm	鎌倉時代(1192~1332)以降、全国的にその造立信仰が流行した。信濃国長野の善光寺(ぜんこうじ)の本尊を模したと称せられている「善光寺如来」の一例である。本来あつたはずの一光三尊の板光背(こうはい)を欠落しているのは惜しいが、室町時代(1333~1572)のすぐれた遺品である。中尊の両手とも刀印であるのはさぞ珍らしい。東日本に多く西日本に比較的少ないと従来いわれてきた善光寺如来像の分布に、新しい一例を加えるものである。 光明寺(こうみょうじ)住職印が、文明元年(1469)善光寺本尊を写した本尊を、大永2年(1522)同じく融印が開削した塔頭南之坊に安置したものと同一。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	広島市安佐南区沼田町伴	昭56.11.6	ヒノキ材、一木造	高さ95cm、膝張75cm	ヒノキの一木造りの坐像だが、膝張り部は他の木材を合わせて鑿(かすがい)止めしている。法衣は通肩(つうけん)にかけ両掌は膝上に弥陀の定印(じょういん)を結ぶ。白毫は木製品をはめ込んでいるが、後補と思われる。眼は彫眼になる。衣は薄いつかすかに彫波(ほんば)文を現す。像は重量削減とともに彫れを防ぐため、内割(うちわり)が施されている。鎌倉時代前期(13世紀)の作である。現在は、『雲湧通志』の廃寺の項にも記載されている雲岸寺跡と伝えられる小堂宇にまつられている。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光を放つという		
県	重要文化財(彫刻)	木造仁王立像	もくぞうにおうりゅうざぞう	2躯	福山市駅家町新山	昭57.2.23		阿形力士/像高190cm 咩形力士/像高182.5cm	寛元3年(1245)、鎌倉時代の作。寄木造、阿形(あぎょう)力士、咩形(うんぎょう)力士の二軀(ふたご)からなる。作者は僧昌快(しょうかい)と記される。県内の指定仁王像の中では最も古のものである。阿形力士は、頭部・胴体から左側にかけて一木彫成し、両腕はともに肩に鑿(かすがい)止めしてある。口を開いて歯を表し、眼は木彫に造る。右側髪垂れ、右足すねは寄木に造り鑿(かすがい)にて止め、背割(せきり)覆板は鏡で胴体に固定している。右肘先、左手先を欠失、両足先は後補である。 咩形力士は頭部・胸部・腹部を一木彫成し、腕部は肩に於いて寄木、背骨及び腰部に於いて背割して板をはめ込み、鏡にて止めている。その一枚の三角形の板の内面に造像銘が記されている。口を開き筋骨隆々たる忿怒(ふんぬ)の力士像で眼は木彫に造る。彫法技法は阿形力士とほとんど同形である。両足先、右手先などを欠失する。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町清綱	昭58.3.28	寄木造、裝飾複合蓮座、円頭光背	像高51.5cm、膝張39.5cm	本像は、吉舎町南天山に城を築いた和智氏の3代目、和智実勝によって応永14年(1407)に創建された浄土宗の寺院である浄土寺に所蔵されている。像の仕上げ、着色はよく時代色をあわらわしており、寄木の技法を知る好資料である。破損もなく、台座の型も時代の特徴を具現している。また、室町時代末期(16世紀)の作である当時の本尊像とあまり時代のへだたりを感じさせない作とみられ、保存も良好である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 附 体内仏、木造阿彌陀如来坐像 1躯	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	三次市吉舎町敷地	昭58.3.28	寄木造、玉眼	像高43.5cm、膝張35.5cm 体内仏/像高18cm、膝張15cm	西光寺は中世にこの地方を支配した和智氏ゆかりのある寺で、この像も同寺に古くから伝えられている。眼は玉眼で顔面・胸部に梨地の金泥(きんじ)を塗っている。彫法に彫波(ほんば)式刀法を採すなど古い形を現している。保存もよ全体的にバランスの整った像である。室町時代(1333~1572)の作である。なお、体内仏は寄木造、像高18cm、膝張15cmの小像で、法衣の文様などから江戸時代(1603~1867)のものと考えられる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音菩薩立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうざぞう	1躯	庄原市実留町寺上	昭59.11.19	一木造	像高179.0cm、頭頂より額まで48.0cm、肩幅50.0cm	顔面が少々摩滅しているのが残念であるが、眼は半開の木眼になり、当初の威厳をうかがうことができる。頭には三道を表わし、象鼻(しょうびく)は左肩より右脇にかけ法衣は両肩より下腹・膝前に2段にかけ、その形成には頭髪を彫波(ほんば)文を彫出している。右手は垂れて着しく長く不自然に見えるが、この一種の不自然感が欠点とは感ぜられず、かえって仏像の彫法的な表情をよく表現している。左右両腕手頭には同形の鬘(くわう)を彫作している。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	東広島市西条町吉行	昭60.3.14	一木造	像高130cm、膝張り100cm	平安時代後期(11~12世紀)の作。国分寺の薬師堂に安置される。一木造のいわゆる丈六像と言われる巨像である。顔の長さは47cmとかなり大きく、螺髪(らぼつ)は切り込み式に仕上げ、肉髻が見られる。顔には白毫を嵌(め)目、目を木眼にする。耳は長大で耳朶は貫孔につく。唇は厚き縷まり、面相は雄渾に見える。顔には三道を表わしている。平安時代末期の藤原の戦い(1184~1185)の時に火災にあい、その後修理が行われたが、江戸時代の宝暦9年(1759)再び火災にあい、その痕を留めている。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光を放つという		

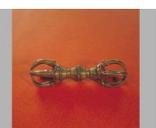
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくそうやくしにらいごぞう	1躯	東広島市西条町寺家	昭60.3.14	寄木造	像高87cm, 膝張68cm	長福寺に伝わる寄木造の仏像。膝裏及び肩裏削りの手法、漆塗り下地の布貼り手法などから室町時代初期(15世紀)の作と推測される。一部の法衣の彫刻線に翻波(ほんば)文的技法が見える。なお、顔面や胸肌、手先などに彫削し金色を塗り、法衣の無文黒色仕上げはまた、室町時代の仏像にも表われる当代の彩色表現法である。また、髪際が下からす直線的になるのは当代の前期の作の特徴である。		関連施設:長福寺宝物収蔵庫 (082-423-4143)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像 附 木造日光・月光菩薩立像 2躯 木造十二神将立像 12躯	もくそうやくしにらいりゅうぞう つけたり もくそうにっこう・かっこう ほさつりゅうぞう もくそうじゅうにしんしゅう りゅうぞう	1躯	呉市川尻町川尻	昭60.3.14	薬師如来像、日光・月光菩薩像、十二神将像ノ一木造	薬師如来像ノ像高67cm, 肩幅21cm, 台座高25cm, 総高(光背含)96cm 日光・月光菩薩像ノ像高30cm, 台座高13cm, 肩幅8cm 十二神将像ノ像高29cm, 台座高4cm(1体のみ7cm), 肩幅10cm	螺旋(らほつ)は切り込み式に仕上げ、眼は影眼になる。法衣は通肩(つうけん)に着け、顔面、胸肌、手先は彫削しの金色に塗る。右手は施無長(せむい)印を結んで胸の高さに上げ、左手は掌を上にした高さにして、薬重を手と同木で作し出す。光背(こうはい)は蓮弁円形頭光のみ当初のものを残していると思われる。 本像は、顔面などの肌の彫削し金色仕上げ、法衣を写実風に作りながらも彫刀の運びの硬直的なところなど、また眼の半眼開き、唇の小さく締まる形相は、室町時代中期頃(15世紀)の作と見られる。 木造日光・月光菩薩立像は、彫刀の運び、衣文の高曲の線、すなわちの直線など彫成技法は中尊薬師如来像と同じ技法で、中尊の脇侍として建立されたものである。 木造十二神将は、薬師如来の十二の大願に応じて現われた神、あるいは本尊の周囲を囲んで守護する神ともいわれる。彫法は中尊、脇侍とよく似る。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくそうあみだにらいりゅうぞう	1躯	呉市川尻町川尻	昭60.3.14	寄木造	像高61cm, 頭長13cm, 面長8cm, 面幅8cm, 肩幅20cm, 裾幅19cm, 光背長90cm	鎌倉時代末期から室町時代(14~16世紀)の作。右手は胸に上げ、左手は垂れ、ともに弥陀の印を結ぶ。法衣は通肩(つうけん)にまと。像の腹部に見る法衣の翻波(ほんば)様の彫法、袂(たもと)のなびきの写実風は、室町時代中期頃(15世紀)を思わせる。 この像については、特に光背(こうはい)に見るべきものがある。頭光頭光は木彫になり金箔を施す。その外周は金銅板を宝相華(ぼそうげ)唐草文に透彫(すかしぼり)した舟形光背となし、室町時代の金工技法を推知する貴重な作品といえる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面千手観音坐像	もくそうじゅういちめんせんじゆかんのんざぞう	1躯	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高207.0cm, 膝高135.0cm	極楽寺本堂の本尊であり、平安時代中期(11世紀)の作と考えられる。一木造り。 体の両側から出す千手は、ほんたうが小形のもので後補ではあるが、古い様態をよく留めている。左肩より法衣の下に掛けける翻波(ほんば)文的技法を出しているのは、この像の製作年代を知る一つの手がかりともなる。頭光の円光背(えんこうはい)及び台座は後補のものである。その面相の雄渾な彫成、木目の利用等、県内には珍しい貴重な文化財である。 ※極楽寺…標高693mの極楽寺山頂にある真言宗寺院。		
県	重要文化財(彫刻)	木製半肉彫虚空藏菩薩像	もくぼんはんにくぼくこぞうぼさつぞう	1面	廿日市市原	昭60.12.2	木製板、半肉彫、漆塗の上に金箔、肉身が彩色	外縁ノ縦74.4cm, 横45.0cm 内法ノ縦73.8cm, 横39.1cm	安土桃山時代の文禄5年(1596)作で、極楽寺求聞持(くもんじ)堂の本尊である。 方形で半肉彫成(はんにくちようせい)、黒漆塗りの枠に板をはめ、その板の中央は円形彫成で、その円は、開敷蓮華座の上に置かれ、その蓮華座の上に結跏(けつが)の虚空藏菩薩像を半肉彫している。 像は衣に花文を施し、右手を膝の上に垂らし、法衣は通肩(つうけん)にかけ、宝冠を頂き、肉身は肌色に表われ、頭光・身光は、ともに円光背(こうはい)にも彫出している。肌色以外は二面漆を下地に塗り、その上に金箔張りした豪華なレリーフ像である。あかも銅製鏡面に磨かれた鏡像を思わせる構造である。 背面は黒漆塗りに仕上げ、大願主の小野寺法印祐宗や作者の肥後国(現在の熊本県)全知院快楽をほしめ、宮島や廿日市の町人や女性と思われる人々の名が記録されている。極楽寺との関係次第、僧俗等人間関係を知る資料を残している。安土桃山時代の仏像彫刻技法を知る貴重な資料であるとともに、地方の信仰状況を知らる好資料でもあり、広島県内にはまことに珍しい資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくそうどうみょうおうりゅうぞう	1躯	廿日市市廿日市	昭60.12.2	檜材、寄木造、岩座	像高81.5cm, 台座高16.5cm, 彫形部14.5cm	正覚院本尊。三鉗弁(さんくわんべん)の彫形の鋭さ、衣文の刀法などより、室町時代中期(15世紀)を思わせるので、部分的には珍しい形を残す秀作である。 頭髪は牙髻(しゃげい)に結し、前面に花形の花冠を付けている。みづらは肩に垂らす花弁しりに結んで、耳朶(じだ)に孔あり、口は結んで上下より一本ずつの牙を表わし、目に玉眼を入れた忿怒(ふんぬ)の面相である。頭は三道(さんどう)につく。両側に花形を付けた額(くわ)を巻き、同じ両手首、両足首にも付けている。右手は腰に上げて剣を持つ。左手は垂れて衆索を持つ。肩衣は左肩より右脇下に着け、裳を着け、その裾の垂れがやや長きと思わせるのは製作時代の特徴でもある。この像は、岩座に立っている。岩座を載せている箱形台座の構築間(こうざかん)に、密教法系の三鉗弁(さんくわんべん)の(右側は欠失している)のは注目する。像の建立にかつる年次の推定には大いに参考になる資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくそうどうみょうおうりゅうぞう	1躯	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高68.0cm	県内には数少ない鎌倉彫刻である。 頭髪は牙髻(しゃげい)に作り、頭頂には蓮華を頂かせている。髪は左肩に垂らせ、耳は長丈につく。目は木眼につくが、明玉の鋭さを表わす。口は面く閉じているが、牙が上下より一本ずつ現われて忿怒(ふんぬ)の相を示す。肩はかり、力量相に充つ。右手は腰に上げ、剣を持つ首欠し、左手は下で衆索(しゅうさく)を持つ手先を失っている。なお、裳先(背面)を人為的に切り取られ、両足先も欠失しているが、用材の巧妙さと肩衣、裳袴(はかま)の彫刀の鋭さは、本像の動的表現を巧みに具現している。その力強さは鎌倉彫刻の明王、力士像に見る特徴を充分に窺わすものも残している。		
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくそうてんぶりゅうぞう	1躯	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高75.0cm	鎌倉時代(1192~1332)の像で、大きさや彫り方などから、不動明王(県重要文化財)と同じ所に安置していた可能性がある。 目は長軸の衣を着け、その上から甲冑(かっちゅう)をまとった武装の姿をしている。背(かた)の腹側には革帯の花形獅噛(しうかみ)を表わし、右手を腰に、袖を翻して動的姿勢をよく表現している。用材の巧みな使用法は、同寺の不動明王像に劣らぬものがある。頭部甲等の欠損及び左肩以下の欠失は残念である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくそうこまいぬ	1対	廿日市市上平良	昭60.12.2	寄木造	阿形ノ像高34.5cm, 身長40.0cm 吽形ノ像高34.0cm, 身長41.0cm	室町時代中期(15世紀)の作品であり、速谷(はやたに)神社に伝わる。 頭部は金色(箔置き)に塗り、眼は玉眼である。胸張り前足の踏ん張りには力感に富む。 阿形(あぎよう)は、頭髪を青白色に仕上げ、髪は黒漆にて表われ、髪先端は渦巻き様に表わしている。時形(ときがた)は、頭髪を緑色に表われ、髪先端は垂らす。 両者ともに力重感に富んだ彫成(ちゅうせい)技法の秀作で、初め木彫に仕上げ、次に木割れを防ぐ古紙を貼り、胡粉(こふん)をおいて膝をかけ、着色にて仕上げる技法を知り上からも貴重な資料で、ほとんど完形の状態に残る。県内ではまれな作品である。 速谷神社は古代以来の古社で、安芸国造との関連も指摘され、平安時代(794~1191)の記録には神階(かみ)の記事もみえる。中世には安芸二宮に位置付けられ、人々の信仰を集めた。		関連施設:速谷神社宝物館

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 金剛界 附台座	もくぞうだいにちによらいざぞう こんこうかい つけたり だいざ	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm、膝張60.0cm、台座高43.0cm	いわゆる智拳(ちきよ)印を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の金剛界大日如来である。本像は寺伝によれば、別件胎藏界大日如来坐像(県重要文化財)とともに浄土寺末寺の極楽寺の本尊であったと伝えられている。面部の彫り口は種和で、また着衣の衣文の彫り口も深く、像底からも内割り(うちくり)が施されており、内割りは大きいと平安時代(794～1191)の特徴がよく出ている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 胎藏界 附光背	もくぞうだいにちによらいざぞう たいぞうかい つけたり こうはい	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造、舟形板光背	像高90.0cm、膝張68.0cm、台座高118.0cm	法界定印(ほうかいじょういん)を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の胎藏界大日如来である。檜材寄木造である。頭頂には余り高くない宝髻(ぼうけい)があるが、これは別達りて地髪部に短(は)ぎ合む。金剛界の像とは彫技や製作技法も異なり、別人の作とみられるが、胎・金二界の大日如来が遺存することは珍しく、平安時代(794～1191)の作ということとあわせて重要な作例と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像 附 木造天部像 2躯 木造神符像 2躯	もくぞうやくしによらいざぞう	1躯	広島市佐伯区五日市町石内	平1.11.20	寄木造	像高85.0cm、膝張68.0cm	平安時代末期、12世紀の作。石内地区の町内有志により運られた仏像である。薬師如来像は後述の寄木造、印相(いんそう)は右手の掌を前方に向けて挙げる施無畏印(せむいゐん)で、左手は左膝上において掌を前方へ向ける身願印(みやんいん)の上に薬巻を巻いている。頭部は刻み螺髪(らぼう)で、眉間に水晶の白毫を入れ、丸顔で眼は彫眼で伏眼となり、瞳力は墨書き、耳は長大で耳朶(じだ)に貫孔がある。口元は小さく閉じていて全体として温雅な面相である。頸には浅い三道(さんどう)を刻み、衣は造肩(つうけん)にかけ、結跏趺座(けっかふざ)する。本像のほか天部像2躯と十二神符像2躯が遺存しているが、ともに損傷は甚だしい。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	山県郡北広島町大朝	平2.4.23	檜材	阿形ノ像高35.0cm、胸張17.5cm、座長24.0cm 吽形ノ像高35.5cm、胸張17.0cm、座長26.5cm	枝宮(えだのみや)八幡神社の木造狛犬は阿吽(あうん)の一對をなし、枝宮本殿内の左右に守護獣として奉安されていたもので、阿形と吽形(うんぎょう)はほぼ同寸である。ともに蹲踞(そんぎょ)の姿勢をとり、ケヤキの一本造りで、彩色されている。 阿吽ともに裏には墨書銘文があり、本狛犬は、応安7年(1374)に千鶴丸と比(ひ)に(び)に某(たが)と連名で寄進したものであることがわかる。銘文中の千鶴丸は吉川家文書にも見える在地の人物で、遺品と文献がよく一致している。富士神社の狛犬(県重要文化財)も、枝宮の狛犬とほぼ同寸法で、阿吽両像の足裏に墨書銘文が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	山県郡北広島町大朝	平2.4.23	檜材	阿形ノ像高34.0cm、胸張17.0cm、座長25.5cm 吽形ノ像高35.5cm、胸張18.0cm、座長24.5cm	躯体が直立気味で、胸にも張りが見られ、吽形(うんぎょう)の髪が垂れ髪に表現される古様を引いている。また、吉川家文書に見える千鶴丸が応安7年(1374)とともに墨書で残されているなど、南北朝時代(1333～1392)の在銘の狛犬として、近隣の枝宮八幡の狛犬(県重要文化財)とならんで貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだによらいざぞう	1躯	三次市品敷町(三次市小田原町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25	檜材、一木造(像身)、玉眼、上から蓮台・円形数茄子・八花形反花座・八花形二重椀座から成る蓮華座	像高18.3cm	像容は定印を結び、袈衣を通肩(つうけん)に着し、玉眼を入れた坐像で、熊野神社の前身である王子権現に、天文4年(1535)三吉政高・同高勝が奉納した典型的な本地仏である。厚い衣の皺など、うねりが大きく重たい感じで、室町時代後期(16世紀)の特徴をよく示しており、同時代の基準作となりうる貴重な仏像である。 ※袈衣(のうえ)…僧などが着る一枚布の衣 ※玉眼(ぎよくがん)…眼珠部をくりぬいて内側から凸レンズ状の水晶をはめたもの ※定印(じょういん)…阿弥陀如来に特徴的な印相の中で中指を表す印相		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館 (0824-66-2881)
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうざう	1躯	福山市朝町後地宇古城跡	平3.4.22	寄木造、玉眼	像高145.7cm	室町時代(1333～1572)の作。前後左右に四材を短(は)ぎ合わせた寄木造で、目には玉眼を嵌入(かんじゅう)し、肉身や着衣の表現において写実的に彫られた点を認めることができるものである。目は微笑をあらわし、口は開いて上歯四本をのぞかせており、「歯吹き観音」と称される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゆかんのりゅうざう	1躯	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、金泥彩漆箔	像高139.0cm、膝張34.0cm	頭頂から足下、脇手、瓔珞金具、表面彩色等、細部まですべて当初のまま残っており、その保存状態はきわめて良好である。作風は、細部まで非常に丁寧な作りで、優れた技術をもった仏師の作と思われる。光背(こうはい)、台座も同時代のものと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期(13世紀中頃)の作である。 ※瓔珞(ようらく)…珠玉をつづつた首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうしょうにんざぞう	1躯	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、彩色	像高82.0cm、肩張48.0cm、膝張74.0cm、面長18.0cm、面幅16.0cm	時宗の開祖一遍上人の高弟「真教」の僧形坐像である。法衣は白衣の上に墨染めの衣を著し、袈裟を懸けた姿を写實的に彫り出している。一遍の死後、教団として実質的に組織化した真教上人の数少ない彫像であり、貴重なものである。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代(14世紀)と推定される。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじぞうぼさつざう	1躯	三次市吉舎町三五	平6.2.25	寄木造	像高48cm	この地藏菩薩は、もともと中世にこの地方に南天山城を築き、勢力を持った和智氏の持仏(じぶつ)で、和智隆春が毛利氏によって殺された際、城外へ持ち出され、町内の寺院を隠れ、宝壽寺に伝えられた。本体は両脚を半跏坐(はんかざ)として、顔の表情も上品で洗練された表現で、生氣が感じられるものである。全体的に繊細な彫り上げに終始しており、秀麗な印象を受ける仏像である。保存状態も極めて良く、南北朝時代(1333~1392)の優美さを感じさせる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうざう	1躯	呉市倉橋町	平5.10.18	檜材、寄木造、埋色彫	像高134.0cm	本像は埋色を加えた檀像(だんざう)彫刻の特色である木目の美しさを示している。因像的には通常の十一面観音であるが、像の保存が全般的に良好なのが特色である。また、頭髮毛筋の丁寧な刻出、知的で秀麗な面相、宋風を加味した写実的な髪(むか)の処理、正面側面にわたる肉体の把握感覚など、いずれも鎌倉時代(1192~1332)の標準的な様式を示している。		
県	重要文化財(彫刻)	木造宝冠阿彌陀仏坐像	もくぞうほうかんあみだぶつざう	1躯	三原市本郷町南字丸	平7.1.23	一木造、背割	像高110.0cm	この像は、頭天冠台上に五面筒形の宝冠をかぶり、身に朱衣を通肩(つうけん)にまとい、両手の掌を膝前で重ねる印相を示し、結跏趺坐(けつかにざ)する相になっている。基本構法は、わずかに背割(せくり)を入れたのみで完全な一木造で、材はやが材と推定される。様式的特色から平安時代前期(10世紀前半)の作と考えられ、備後・安芸地方の平安時代(794~1191)の地方信仰を考えて行く際に、重要な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざう	1躯	府中市元町	平7.9.21	割削造、漆地金泥彩、玉眼	像高71.7cm	本像は、割削(わりはぎ)造りで、頭・体とも前後に二材を合わせている。螺髪(らっぽう)は切付螺髪である。面貌は若く張りがあり、引き締まったやや胴長の肉身にまといかかる袈衣(のうえ)は、胸襟で動きがある処理がなされているなど、像の各部が見事な彫刻的均合をもち、前身に若々しい生氣あふれた勇健な表現となっている。全体的に見ても鎌倉時代前半期(13世紀)を代表する傑作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音菩薩立像	もくぞうせんじゆかんのんりゅうざう	1躯	安芸高田市吉田町吉田	平10.9.21	一木造、素地、一部彩色、檀像仕上	像高192.0cm	本像は四十二臂(ひ)像で一木造である。合掌手先及び脇手全ては後補になるなど、他にも後世の修理箇所が認められるが、独特の優麗なる面相表現が印象的なもので、袈衣(もすそ)には翻波(ほんば)文が見られる。平安時代前期(10世紀)の製作とされる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造行道面 附 菩薩面頭部 1頭、宝冠残断 2枚、幡竿付 電扇 1本、■ 1個、鼓 1個、鼓胴 1個、蓮華 1本	もくぞうぎょうどうめん	8面	三原市沼田東町納所	平15.4.21			鎌倉時代後半、14世紀頃の製作と推定されている面。仏教行事のひとつ「行道」において使用されていた。保存状態もよく、本県の歴史と文化を語るうえで貴重な資料である。菩薩面を演じる役者が冠る木造頭部や、菩薩面に打ち付けられていた皮革製宝冠の残断をはじめ、行道で用いられていた幡竿付電扇、&#40727;ふりつづみ、鼓、鼓胴(袋裏けいろう)、蓮華なども残されている。 ※行道 極楽世界の聖衆来迎を現世で演じてみせる仏教行事。「練供養(ねりくよう)」、「迎講(むかえこう)」又は「迎接会(むかえかい)」とも呼ばれる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造佛通禪師坐像	もくぞうぶつづせんじざう	1躯	三原市高坂町許山	平16.2.26	ヒノキ材、寄木造、玉眼嵌入、彩色	総高112.8cm、坐高74.3cm、 腰張68.1cm、腰奥49.5cm	室町時代の応永32年(1425)に、京都の高辻富小路(たかつとみこのこうじ)の仏師「大夫法眼」が制作した頂相彫刻(ちんぞうちようこく)。顔部に墨書銘がある。ヒノキの寄木造である。肉体的把握や衣文表現は巧みで質感があり、生氣と力強さを感じさせる。彫刻史上の基準例であるとともに、本県の歴史と文化を語るうえで重要な資料である。 現在は、木造大通禪師坐像とともに、佛通寺舎摩院開山堂(ぶつうじがんきいんかいざんどう)に安置されている。 ※佛通禪師 即休契了(しつきゅうけいりょう)の諡号。即休契了(1269~1351)は中国・元の禪僧で、佛通寺を開いた愚中周及(ぐちゅうしゅうきやう)の師であった。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大通禪師坐像	もくぞうだいづせんじざう	1躯	三原市高坂町許山	平16.2.26	寄木造、玉眼嵌入、彩色	総高113.0cm、坐高73.8cm、 腰張66.7cm、腰奥49.5cm	室町時代の15世紀中頃に製作されたと推定される頂相彫刻(ちんぞうちようこく)。現在は、木造佛通禪師坐像と並んで佛通寺舎摩院開山堂(がんきいんかいざんどう)に安置されている。 寄木造である。木造佛通禪師坐像と比べ、衣文表現などにやや硬さがみられ、木造佛通禪師坐像より後作の製作と考えられている。 本県の頂相彫刻を代表する作品のひとつである。 ※大通禪師 愚中周及(ぐちゅうしゅうきやう)の諡号(しごう)。愚中周及(1323~1409)は室町時代の禪僧で、中国に渡り佛通禪師の教を受けた。帰国後、応永4年(1397)小早川春春の懇請を受けて佛通寺を開いた。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうざう	1躯	廿日市市宮島町	平22.4.19	寄木造、玉眼嵌入、白雫水晶嵌入	像高:193.8cm、髮際高: 159.7cm 面張:16.1cm、面奥:22.5cm 頭上仏面 頂上阿彌陀仏面高:11.5cm その他仏面高:9.5cm前後 台座高:21.4cm	本像は、大聖院観音堂の本尊として、内陣(ないじん)須弥壇(じゆみだん)上の厨子(ずし)内に安置されている。本面の清楚な表情や豊潤な肉身には生氣があり、均整のとれたプロポーションや頭上仏面の面貌も的確に丁寧に仕上げられている一方、衣文(えもん)は全体的に形式化している。 本像は、元祿島社本地堂(ほんじどう)に祀られ、明治初年の神仏分離により大聖院に移されたことがわかると、伝来由緒の確かなものである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりやうぞう	1軀	尾道市西久保町	平28.10.27	檜材、寄木造、差し首、玉眼嵌入、白毫水晶(新補)嵌入、肉髻珠(後補)嵌入、着衣全体に鍍金・盛り上げ彩色	像高:130.9cm	常務寺本堂本尊である本像は、頭部部の(パンス)がよく整えられているとともに、流麗な衣文(えもん)が的確に彫成され、着衣全体には精緻な文様が敷き(きり)金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これは当初の状態ではほぼ完全に残っている。 本像は、平成24年度の保存修理の際、足納(あしな)の銘文から、正中2年(1325)に仏師美作(みまさか)法橋(ほつきょう)宗隆(そうたんにん)(又は「宗雲(そうせうい)」)により約3か月間の期間で制作されたことや、50人以上の仏名の時進(ときしん)者(しやう)等院(じやういん)の遺構(いこう)である本堂本尊として制作年次などが分かることに加えて、制作優秀であり、特に着衣全体の精緻な装飾が当初の状態ではほぼ完全に残っている遺例がほとんどないことから、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造五劫思惟阿弥陀如来坐像	もくぞうごこういあみだにょらいざぞう	1軀	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材が、寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入、肉髻珠(後補)貼付	像高:112.0cm	五劫思惟阿弥陀如来像は、五劫という長い時間思惟にふけり、理髪をしなかったために長大な頭髪となったことを表す大きく膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本堂本尊である本像は、風格のある姿態の(パンス)ふくよかであるが目鼻立ちのすっきりとした面部の表現、整えられた衣文表現などに優れた造形感覚が認められる。 本像は、寛政(かんせい)5年(1792)に仏師(ぶつし)法橋(ほつきょう)安(あん)清(せい)により造像されたことが記されている。 江戸時代以前の木造形像の五劫思惟阿弥陀如来像は全国的にはほとんど遺例がない中で、本像は彫技が的確であり、造形的に優れているだけでなく、制作年代や作者などの由緒が分かるものとして、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及び両脇侍立像 附 観音菩薩像内納入品 十五枚 阿弥陀如来印仏 勢至菩薩像内納入品 十一枚 阿弥陀如来印仏、包紙添 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥陀如来像内納入品(遺納) 一、台座光背寄蓮状、包紙添 一通 一、位牌 一柱	もくぞうあみだにょらいりやうぞう きやうりやうぞう	3軀	尾道市東久保町	令和元年(2019)10月21日	檜材、寄木造、金泥塗付、鍍金、玉眼嵌入	阿弥陀如来立像(中尊) 像高:98.9cm 髮際高:91.8cm 観音菩薩立像(左脇侍) 像高:66.0cm 髮際高:55.8cm 勢至菩薩立像(右脇侍) 像高:66.4cm 髮際高:55.7cm	本三尊像は、時宗寺院・西郷寺の本堂本尊で、阿弥陀如来像を中尊として、前傾の観音菩薩像と勢至(せいし)菩薩像を脇侍とする、来迎形の阿弥陀三尊像である。檜材、寄木造、阿弥陀如来像は、ふくよかな顔貌、矩形(けいけい)のがっしりした体態に緩やかな衣文線が施され、立体的で端正な造形を持つ。両脇侍像は、髪の高い細身の像容で、随所に細かな彫材を組み合わせて破綻のない微妙な姿態が生み出され、絵画的な律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚と高い技術を読み取ることができる。 寛政24年の保存修理の際、両脇侍像の像内から印仏が発見され、その中に弘安8年(1285)の年記が確認された。納入品は遺像当初のものと思われる。本三尊像は同年に制作されたと考えられるに至った。以上より、本三尊像は、制作優秀であるとともに、年代の明らかでない来迎形阿弥陀三尊像の基準作に位置付けられるため、本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。 また、印仏を始めとする納入品も、本三尊像の由緒・伝来を示す重要な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造弥勒菩薩像及び木造不動明王坐像・木造薬染明王坐像	もくぞうみろくぼさつぞうおよびもくぞうぶどうみょうおうざぞう・もくぞうあいぜんみょうおうざぞう	3軀	福山市草戸町	令和2年(2020)3月23日	寄木造、鍍金、盛り上げ彩色、玉眼嵌入	像高:弥勒菩薩 52.7cm、不動明王 28.8cm、薬染明王 34.4cm	本文化財は、南北朝時代(貞和4年(1348))創建の明王院五重塔(国宝、以下「五重塔」といふ)初層に安置される。 中央の弥勒菩薩像は、端正な慈悲相を表し、ゆつたりとした横えに格調の高さを示す。着衣には鍍金(きりかね)や盛り上げ彩色による文様が施され、装飾的にまとめられる。 不動明王像・薬染明王像は、忿怒(ふんぬ)の形相をよく表し、肉身や着衣には丹念に施された華麗な彩色・文様が残る。 いずれも小像ながら、彫技や装飾が繊細で巧みであり、仏師の高い技術と優れた造形感覚が認められる。特に、各像の着衣に見られる彩色・文様は、五重塔内証面とほぼ同様のものでして違和感がなく、五重塔の創建に近い時期の遺像になると考えられる。 この三像の組合せは、県内唯一の制作時期が中世に遡る作例である。 以上のことから、本文化財は、制作優秀であるとともに、五重塔とも共通する制作当初の装飾が良好に残る、稀少な像種の組合せであることから、貴重な作品であると評価できる。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	東広島市西条町下三永	昭28.6.23	銅製	総高126cm、口径69cm	室町時代・寛正2年(1461)福成寺(ふくじょうじ)に奉納された銅鐘。現在の三原市を中心に活動した鑄物師(しもし)「三原鑄物師」の作品である。鐘身に作者名「宗吉」や奉納された寛正2年の年号などが刻まれている。 三原鑄物師は中世の広島県地域を代表する鑄物製作者たちであり、鎌倉時代(1192～1332)以後、瀬戸内海中部地方各地で銅鐘などを製作した。 福成寺は中世以来の古刹であり、中世の西条盆地を支配した周防大内氏と深い関係を持っていた。		関連施設:福成寺宝物収蔵庫(082-426-0523、082-423-3486)
県	重要文化財(工芸品)	三鉢	さんこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	金銅製	長さ20cm	これは独鉢(どっこ)とともに密教の修法に用いられる法具の一つで、仏教では心中の煩惱をくだき仏性の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹高野山龍華寺に伝わるもので、独鉢は断面方形、鬼目(おにめ)はよく時代の特色を示す鎌倉時代(1192～1332)の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	廿日市市宮島町	昭28.8.11		高さ109cm、口径57.8cm	仏教では、その宗教的雰囲気が高めるための多くの鳴物が使用されるが、それら梵音具(ぼんおんぐ)と言われるものの中で最大のもので、天正15年(1587)に豊臣秀吉が、島津攻めの際に持ち帰って、嚴島神社に寄進したものと云われ、応永5年(1398)の銘がある。銘は「筑前州宗徳郡赤馬庄鎮守八所大明神社頭洪鐘也 応永5年2月16日 大工了業」と記されている。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	安芸高田市吉田町	昭28.8.11		高さ90cm、口径46cm。	この銅鐘の銘文によると、もとは高田郡甲田町甲山にあった石室寺に懸けられていたものといひ、銘文中「建武第二刻(1335)十月廿四日と録された年月日」が刻まれている。鑄物師は河内国の名工丹治友重である。「国郡志下調帳(こくくんしたしらべちやう)」吉田村によると、甲山の穴戸氏が降鐘にしていたものを当寺に寄進したと記しており、石室寺の荒廃後、一時穴戸氏の手に残っていたのであろう。		関連施設:安芸高田市吉田歴史民俗資料館(0826-42-0070)
県	重要文化財(工芸品)	独鉢	どっこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.8.11	金銅製	長さ21cm	三鉢(さんこ)とともに密教の修法に用いられる法具の一つで、仏教では心中の煩惱をくだき仏精の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹高野山龍華寺に伝わるもので、鉢部は断面方形、鬼目(おにめ)はよく時代の特色を示す鎌倉時代(1192～1332)の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	金銅仏具 五種鈴5個、輪宝1個、羯磨4個、輪宝台1個、羯磨台4個	こんどうぶつぐ	15個	府中市元町	昭28.8.11		五種鈴(狹輪鈴)高さ21.2cm、径7.4cm (三鈴鈴)高さ19.8cm、径7.4cm (五鈴鈴)高さ19.0cm、径7.4cm (宝塔鈴)高さ22.3cm、径7.4cm (宝珠鈴)高さ19.5cm、径7.4cm 輪宝 径11.8cm、 輪宝台 径12.5cm、 羯磨 径11.5cm、 羯磨台 径11cm、 火舎 高さ8.4cm、径10.1cm、 六翼 高さ3cm、径7.5cm	栄明寺は、弘法大師の開基と伝える真言宗の大本寺で、この仏具は密教大壇の仏具だが、それが一括具備している室町時代(1333～1572)の作品として貴重である。 仏具の内容は、五種鈴5口(狹輪鈴(どっこい)、三鈴鈴、五鈴鈴、宝塔鈴、宝珠鈴)、輪宝(りんぼ)1口、輪宝台1口、羯磨(かつま)4口、羯磨台4口、火舎(かしゃ)1口、六器(ろっぎ)6口である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	安芸高田市甲田町高田原	昭28.10.20		高さ99cm、口径50cm	銘文によると、永徳3年(1383)豊後国遠見郡(大分県)吉祥寺の鐘として鑄造されたものである。更に追銘があり、それによると、毛利氏によって厳島神社で鑄造された和知鐘の善提を甲うため、天正7年(1579)厳島大願寺の円海上人が、喜捨を集めた金と真鍮の鍍金を活して買得し、佐伯郡玖波(大竹市)栢雲院に寄進した旨を刻んでいる。その銅鐘がこの寺に伝わった経緯については不明である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	三次市三次町	昭29.4.23		高さ87cm、口径50cm	永和2年(1376)播州永良荘(兵庫県神崎郡市川町)の護聖寺のために鑄造されたもので、追銘によると長享元年(1476)周防大島三浦本庄(大島郡大島町)志駄岸八幡宮の鐘となっており、大塚那として大内政弘の名前が見える。更にその銅鐘が、どのような経緯を経て三勝寺に納まったかは不明である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製鐺口	どうせいわにぐち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm、重量15kg	鐺口は、鉦鼓(しょうこ)を二つ合せた形に似て、神社仏閣の軒先に懸けてあり、前面に鉦(かね)の輪という布綱を垂らし、参詣人はこの綱を手に持ち、振って鼓面に打ち礼拝するもので、本品も浄土寺本堂(国宝)の正面に懸けられている。刻銘があり、貞和5年(1349)の作であることが分かる。 「備後国尾道浦浄土寺観音堂也」貞和五年己丑月十八日大工阿部房綱」		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	達磨大師位牌	だるまだいしはい	1基	福山市朝町後地	昭30.1.31	木製、朱漆塗	高さ68cm	臨済宗法燈派の宗祖達磨大師の位牌である。文永10年(1273)金宝山寺(現在の安国寺釈迦堂、重文)が造営されたのを記念し、大工藤原季弘が施入したものである。鎌倉時代(1192～1332)の位牌形式を知るうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅五鈴鈴	こんどうここれい	1口	福山市駅家町新山	昭30.3.30	金銅製	高さ18cm、口径6cm	弘法大師将来と伝える唐代(7～10世紀)の作品で、鈴の胴には五大明王が刻まれており、鈴の下部はややぼんた形状をしている。五鈴(ごご)の痕跡は残しているが、江戸時代中期(17世紀後半～18世紀前半)に堂宇が焼亡し、本品は一時土中に埋れていたため、柄の五鈴の部分をはほとんど欠損している。福盛寺は真言宗の古刹である。		
県	重要文化財(工芸品)	戸張 永祿十年丁卯五月吉日と墨書がある	とばり	1幅	世羅郡世羅町東上原	昭32.2.5		縦174cm、幅183cm(幅61cmの布3枚をつづる)	給来の蝦子(どんす)と思われる布の上部をつづったもので、これには梵字、観音経の一節のほか、永祿10年(1567)に吉光宗三郎なる者が奉納した旨が墨書してある。 「敬白、春掛御八幡戸張之事」 「具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故応頂礼」 「右為、護持信心之大施主立願成就、皆令満足、息災延命、如意吉祥祈所而已」 永祿十年丁卯五月吉日、吉光宗三郎主、黄歳敬白」		
県	重要文化財(工芸品)	銅製鑄杖頭	どうせいしやくじやうとう	1柄	福山市新市町宮内	昭33.1.18	銅製	長さ31.5cm、環横外径15cm、柄管12cm	柄管(えかん)の上部に円形の環をつけ、環の両層ならびにその対角の環上に弧月形の突起がついている。環の上頭には五輪塔を鑄出し、その五輪塔と柄管を結ぶ環内直線上には、両脇に華瓶をもつ宝篋印塔(ほうきやういんとう)を鑄出ししている。普通の鑄杖(しやくじやう)に見ると同様に、仏教の六道を意味する6個の小環を左右3箇ずつ穿存している。この鑄杖は環に古い形式をとめており、大形であるのも珍しい。柄管に応仁3年(1469)の紀年銘がある。 「備後国一宮吉備津彦大明神願主口口応仁三年己丑」		
県	重要文化財(工芸品)	神輿	みこし	1基	三次市甲奴町小堂	昭34.10.30	高さ340cm、方213cm		神輿は神霊がお旅所その他へ遷御される際に用いられる乗物で、お輿(こし)とも称される。この神輿は八角形で、その基盤側面の剣巴(つるぎともえ)文の文様はすぐれており県内では他に例を見ない。また、普通の神輿は各角に柱を立て、内部を一室とした構造形式であるのに、本品は心柱を持つ珍しい構造で、古くはこの心柱に祭神を斎き祭ったのであろうか。この心柱の意味については、大社遣りにある大樞柱の系統をひくものか、または神輿を振り立てる神輿振りのための構造か今後の研究課題である。内部左板壁に永正14年(1517)創建の墨書がある。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	金銅蓮花輪宝文置説相箱	こんどうれんげりんぼうもんおきせつそうばこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm, 横36cm, 高さ12cm	長方形の箱で、導師が説教の原稿などを入れる。 木製黒漆塗りで周囲に金銅の蓮華(れんげ)文や輪宝(りんぼう)文などの金具を置き、ふちに唐草文を浮彫にした帯板金具を貼り、上付底の脚部は金銅板覆輪(くわりん)を施した格狭間(こうざま)を透かす。製作の年時は「慶長第三成成(朱漆書の銘)」すなわち慶長3年(1598)で、手法と様式は安土桃山時代(1573~1602)の特徴を示している。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製髭口	どうせいわくち	1口	三次市布野町下布野	昭36.4.18	銅製	直径22.5cm, 高さ7.5cm	知波夜比売(ちはやひめ)神社は、備後における式内社17座のうちの一つで、10世紀初めにはその存在が認められる古社である。この社に伝わる髭口は、建武元年(1334)の紀年銘をもち、県内における在銘最古の髭口である。 「尊皇魂神社鐘一枚」 「建武元年才次甲戌十二月十八日施主清二良敬白」		
県	重要文化財(工芸品)	白紫緋糸段威腹巻附 兜肩庇	しろむらさきいとだんおんどしはらまき	1領	尾道市因島中庄町寺宇道金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm, 胴回り72cm	腹巻は、背中引合せ形式の初期のものは袖も兜もない軽装用の腹巻で、鎌倉時代末頃(14世紀前半)発生したと思われる。その後、室町時代(1333~1572)には大流行し、背中の引き合せ部分に背板をつけ、更に袖をつけ兜も具備するようになる。 本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威(おど)した、美しく軽快な姿の腹巻である。 伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が、小早川隆景より拝領したと言い、村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅五鈷絆	こんどうごこしよ	1口	広島市安佐北区可部町線ヶ谷	昭37.7.20	金銅製	長さ23.5cm	室町時代初期(14世紀)製作と推定される。福王寺(ふくおうじ)に伝えられた作品。広島県内では厳島神社所蔵の五鈷絆について古い作品と言われる。量感のある大ぶりなすぐれた作品である。 五鈷絆は、梵語(ぼんご)で鍔折羅(ぼざら)と言われ、心中の煩悩をなき仏性の智行を表す意味で用いられる金剛杵の一種で、密教の修法に用いられたものの一部である。 福王寺は福王寺山山頂にあり、中世、安芸守護武田氏や熊谷氏と深い関係を持っていた。		関連施設: 福王寺宝物収蔵庫 (082-814-3930)
県	重要文化財(工芸品)	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鉄製製の屋蓋や柱を組み合わせたもの。	高さ37cm, 幅28.5cm	もと浄土寺利生塔(りしようとう)にあったと伝えられる一対の燈籠。春日厨子の形をとる。鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもので、軒を美しくするため、かやの中央に折れを作るなど、時代の建築の作風をよく反映する。屋根の上には三鈷(さんご)のすかしを二つ並べるが、ひねりこ連子(れんじ)に菱形をきざんだ欄間、きびきびしたくり形の格狭間(こうざま)などは南北朝時代初期(14世紀前半)ころの様式をよく示している。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	木遣厨子 木遣厨子台(旧太子堂安置) 1基	もくぞうし もくぞうしだい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	春日厨子 大(高さ1.6m)中(高さ1.3m)、小(残欠) 厨子台 幅2.7m, 奥行1.28m, 高さ32cm		3基の厨子は春日厨子で、それぞれ聖徳太子像(重要文化財)を納めていたものである。 厨子の台は、重ねの文様を遣子の中にきざみ出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで、厨子とともに南北朝時代(1333~1392)ころの作と推定される。台及び厨子とともに関係なすきりした秀作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	なぎなた 銘藤原輝広尾州	なぎなた	1口	三次市吉舎町三五	昭38.4.27	鎌刀遣り、三ツ棟。鍛えは板経流れに小空目まじり、肌立って鎧地柱がかかる。刃文はのたれ刃に小互の目を交え、刃中に砂流しがかり、鍔子のはたれ込みが鋭く、刃先は少し磨り上げ、先は生ふで浅い裏刃となり、鍔は勝手下り、彫物は表裏ともに鎌刀種に棒鍔があり丸留となる。	刃長51.7cm, 反り2.3cm	江戸時代の雲州広島島の刀工初代輝広の作である。輝広は福島正則の移封に従い尾張から移住したと推測され、その後広島藩を代表する刀工のひとりとなった。輝広の作風を知るうえの有力な資料で、仕上げもよく抜群の技量のほどを示している。		
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘清貞 附 雲波文合口拵小刀播磨守輝広	たんどう	1口	広島市西区高須	昭38.4.27	反りなし、鍛え小板目、刃文直刃、小乱れ砂流し金筋入る	長さ28.5cm	室町時代初期(14世紀)の周防(山口県)の刀工・二王清貞(におうきさだ)の作品で、三原物に近い作風であるが、額内真の俱利伽羅欄間(くりからんま)透かしの彫り物は二王鍛冶独特である。この短刀は、打ちおろしのような健全さを保ち、彫り物も珍しい。 付の拵(こしらえ)も質素で気品のあるみことな出来ばえて、広島藩抱えの名工、一方堂明政の作品である。もと淺野長副の所用と伝えられる。		
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘播磨守輝広寛永五年八月日	たんどう	1口	庄原市西本町	昭38.11.4	刃長29.3cm, 反り0.24cm。平遣り。庵棟でわずかに反りが付いている。鍛えは板目柱がかり肌立ちこころに地湧きつく。刃文はかのたれに互の目乱交り、砂流しがかり湧きつき、ところどころに金筋がかかる。鍔子のはたれ込み先小丸で、わずかに拵かけてやや長く返る。鍔は先栗尻丸く、鍔は大筋遣である。	長さ29.3cm, 反り0.2cm	江戸時代の寛永5年(1628)作。 播磨守輝広は、肥後守輝広の弟で養子となった者で、最も古い年紀は慶長15年(1610)である。寛永5年の年紀をもつこの短刀の資料的価値は高く、姿があかぬけ地の出来も最高のものである。		

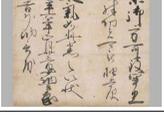
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ、紙とめ	径96cm、高さ88cm、胴回り301.5cm	胴内銘によると、正和5年(1316)に大工教通・友延により製作されたもので、皮に墨で雲龍と鳳凰がかかれており、紙留(びよどめ)である。また、皮の張り替えは、延元元年(1336)・延文4年(1359)・応永6年(1399)・応永34年(1427)・元和4年(1618)の5回あり、何年で張り替えたかがわかり、歴史的資料としては珍しい。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	世羅郡世羅町東上原	昭41.4.28	胴張なし	径55cm、胴の幅56cm。	胴内に墨書銘があるが判別しにくい。分かったものでは、文明18年(1486)と天正10年(1582)の銘がある。太鼓の作り方が珍らしく、胴張がなく自然木をくたまま、胴側の皮は、細い皮ひもで引っぱってしめてある。胴の内側には、三方から紙のつなぎがあり、何らかの音響効果をもたらしたものと考えられる。		関連施設: 大田庄歴史館 (0847-22-4646)
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいぐち	1口	廿日市市原	昭42.5.8	銅製	直径45cm	戦国時代の明応2年(1493)に製作された髷口。本願を明賢とし、大工久信が製作したもので、中世から近世にかけて活躍した廿日市鑄物師の作品とも推定されている。髷口の中心には鎌倉運筆の押型(つぎぎ)を鑄出し、これを中心とし四段の内帯を鑄出し、上部懸環を支える二重の突起は先端剣先に表わしている。外縁から二段目の内帯の内側には刻銘がある。中心から外に二段目の内帯は幅広(しかも手持帯となっており、さらに髷口口縁の両側の突出が少ないのは、この製作年次を表づける形態である。均衡のとれた傑作である。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘芸州三人住二王真清天正九年十一月吉日	かたな	1口	広島市中区鞆町	昭45.1.30	本造、中鋒、鑄柄高く庵棟、鍛え板目、刃文皆焼	刃長67.6cm、反り2.3cm	天正9年(1581)、可部三入(みいり)、広島市安佐北区)に住む刀工・二王真清(におうまさきよ)の作品。中世における中国地方西部の刀工として著名なものには、周防の二王一派、石見の直綱一派があげられるが、安芸国においては見るべき土着の刀工は非常に少ない。わずかに室町時代末期(16世紀)に、大山住宗重と二王真清をあげることが出来る。 二王真清は、可部三入の城主熊谷氏の招きにより周防から移住した吉刀芸州刀工の中の名工で、その作品は極めて少ないが、本品は相州伝鑄法で作った刀として保存のよい傑作である。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘芸州大山住宗重作永禄十一年八月吉日	かたな	1口	三次市十日市東一丁目	昭45.1.30	冠塚し造、大鋒、丸棟、鍛え板目刃縁交互地沸つく、刃文互の目逆乱交り砂流れかかる	刃長70.3cm、反り1.0cm	宗重は二王真清(におうまさきよ)とともに、中世の芸州刀工を代表する名工で、刀刻古書によると宗重の銘は三代続いたようであるが、初代及び二代作で現存するものはなく、三代宗重の作もきわめて少ない。本品は三代宗重作の数少ない一つで、保存もよくすぐれた作品である。 大山治治は、鎌倉の礎(14世紀中頃)京前の定一派が大山(広島市安芸区瀬野川町大山)に来住したものであるとされ、現在も鍛冶跡や墓が残っている。		
県	重要文化財(工芸品)	姫谷焼色絵皿	ひめたにやきいろえざら	6口	福山市加茂町(5口) 呉市広吉松(1口)	昭46.4.30	紅葉文の皿 5客1組(5口) 飛雲桜間山水文の皿 1口	紅葉文の皿/径約16cm、高さ2.4cm 飛雲桜間山水文の皿/径18cm、高さ2.6cm	姫谷焼は、肥前系の磁器製造技術を持つ陶工市右衛門(?~1670)が焼いた磁器である。17世紀後半のごく短期間焼かれたものであるが、色絵の磁器としては、日本でも早い段階の作品である。紅葉文皿は五客一組、紅葉の一枝を置き、染付青筆で下絵を置き、赤、緑、黄色で絵付けされている。飛雲桜間山水文皿は、平緑白磁の中皿に染付の飛雲と流水、樹木は緑と黄色の絵付けがなされている。 なお、姫谷焼窯跡(県史跡)から同様の染付部分の破片が出土している。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄錆漆塗二十八間二方白総覆輪阿古陀形筋彫鉢 漆塗兜櫃 1合	てつきびうるしぬりにじゅうはっけんにはうしろそうふくりんあこどなりすじかぶとばち	1頭	三次市十日市東	昭47.4.24		前後径25.7cm、左右径24.0cm、高さ14.8cm、重量1.690kg	この兜は、室町時代(1333~1572)特有の錦張的なふらみをもった阿古陀形で、錆塗を厚く塗り上げ懸巻も水平となり、[849f](しころ)を欠失しているのが当時流行の笠[849f]を付けていたものである。前立の三線形(みつわがた)を欠失し、肩庇(まびさし)の漆塗子の絵草と鉢裏の張革は後補であるが、彫刻漆金は精巧で定形を保ち、保存も良好であり当代を代表する兜鉢である。 備後国山内首藤家に伝来したと伝えられ、天辺の座に定紋の三拍鼓(みつかしわもん)が浮彫されている。		
県	重要文化財(工芸品)	密教法具	みつぎょうぼうく	1具	福山市金江町金見	昭48.12.18	金銅製 五鈴杵、五鈴鈴、金剛盤、各1口	五鈴杵/長さ14.6cm 五鈴鈴/高さ19.0cm、口径7.6cm、鈴の厚さ0.4cm 金剛盤/高さ3.8cm、縦17.8cm、横24.5cm	鎌倉時代~室町時代(12世紀末~16世紀)制作の、密教儀式に用いる法具。いずれも金銅製。 五鈴杵(ごしよ)は鈴の柄はは強く、握柄の二重帯もよしまり、猪目もよく現れている。連弁の順すじの細さは精巧で、制作年代に相当する作品である。 五鈴鈴(ごしよ)は鈴の肩の連弁は握柄の連弁と同じ手法で、鈴胴には手持ち帯をもち、この時代の特色をよく示している。 金剛盤(こんこうばん)は三つの脚がいており、形は四角形である。外縁部の断面は三角形になり、前面の裏の両側の猪目ともこの時代の特色をよく表している。 杵は煙燻を辟き仏の智慧(ちえ)の光を表す。鈴は密教の儀式の時、護摩を覚めさせ喜ばせるために鳴らす。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘備州三原住貞正近作天正三年二月日	かたな	1口	呉市音戸町音戸	昭50.9.19	鑄造、庵棟、身中尋常で反り深く太刀姿、小鋒、鍛え板目圭目つまり地沸厚くつき淡く映り立つ	総長79.1cm、刃長63.4cm、反り2.4cm	天正3年(1575)作。表に九字銘、裏に年紀七字銘がある。 三原鍛冶は、代々大和伝の鍛法を伝える伝統的な作風を示し、しかも地刃健全である。当時繁栄した多くの末三原の刀工一派の中で最も傑出した作品である。。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	質量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	革包茶系威二枚胸具足	かわづつみちやいとおどしにまいどくそく	1領	福山市寺町	昭52.3.4		胴高さ43.5cm、兜高さ35.0cm、同前後径22.5cm、同左右径19.0cm、袖幅20.5cm、同長さ28.0cm、総重量10.2kg	福山水野氏の菩提寺・賢忠寺に伝わる当世具足で、福山藩初代藩主・水野勝成の所用と伝えられる。 兜は、唐冠形の鉢の左右に黒い熊毛で包んだ長い縷(えい)をつけ、前立(まえだて)には木製漆塗の鉢(しかみ)が取り付けられている。胴は敷を革包し茶漆塗りした桶側面で、その下部二段は茶色糸で毛引威(けりきおどし)にするなど、旧来の甲冑に比べ特異な意匠をもち、防禦にすぐれ軽快望んで、備前は少くほろろ形である。 当世具足は室町時代末期から安土桃山時代(16世紀後半～17世紀初頭)にかけて発達したもので、この具足はその完成期に武将が着用した例として、武具の歴史を知るうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	福山市沼隈町下山南	昭54.3.26		総高111cm、直径67.6cm	周防に本拠をおく戦国大名大内義隆が天文13年(1544)安芸厳島神社に寄進した。銘文があり、龍頭中央の宝珠の火炎を四方に付けた中世の和鐘である。 追鐘から、後に賀茂郡西条四日市(東広島市西条町)真光寺に移されたことが分り、明治時代になって西光寺所有となった。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製独鉾杵	こんどうせいどっこしよ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵(きね)の形をして、両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵(こんごうしよ)とい、もともと武器だったものが象徴化されて、仏性を表わすための法具となった。その中でも両端が一本のものを独鉾杵という。 この独鉾杵は金銅製で、鉾の先四方に鋭を入れて、握部の猪目・連弁のしぼり強く、全体の仕上げはよくまとまり、鋭さを思わす。製作は室町時代初期(14世紀前半)を下るものではない。 ※鐘(しのぎ)…刀身の背から刃へ移る境の線。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製三鉾杵	こんどうせいさんこよ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵(きね)の形をして、両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵(こんごうしよ)とい、もともと武器だったものが象徴化されて、仏性を表わすための法具となった。その中でも刃が湾曲して分岐した鉾(ほこ)の数が三本のものを三鉾杵という。この三鉾は室町時代初期(14世紀前半)の作と推定される。金銅製で、握部は扁平形となる。猪目の突起も著しく、連弁のしぼりも強く、両端の鉾(こ)の張りも著しい。時代の特徴をよく表している。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいむくち	1口	福山市神辺町八尋	昭55.6.24	銅製	直径35.5cm	髷口は寺社の軒下(かき)に叩き鳴らして使用するものである。 この髷口は銅の表裏二面を同じ型で鑄造し、合わせた形式である。表面は銘帯と中区、槽座(つぎざ)区の三区にわかれ、銘帯には最初に刻まれた銘文を消し、後に追刻されている。髷手(かきて)である耳は角丸の四角形に近く、目は耳の下方にごく短かく凸出し、中央下部の目の間に裂け口を開き、鉦鼓(しやうこ)線状の飾を収めている。 最初の銘はかすかに残るものと「右首座者口天下泰平口口口」に左側にあり、右側の文字は追刻の「備後国安那郡八尋村神宮寺」の銘文で消されて判読できない。裏面の銘文は、神宮寺の銘文と同刻で右側に「應永一六年二月日」、左側に「大願主惣目申」と刻んでいる。 これらの銘文から、この髷口が室町時代中期の応永16年(1409)に神宮寺(現在の深安郡神辺町八尋にある吉備津神社)に寄進されたことが分かる。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄打出漆塗仏願取胸丸具足 附 立浪文陣羽織 1領 袴 1本	てつうちだりうるしめりほとけどうしとりどうまるぐそく	1領	広島市西区古江東町	昭57.2.23		総重量13250kg 兜/高さ35.5cm 面頬当/胸/高さ45.0cm 籠手/胴幅/横30.0cm、長さ24.5cm 陣当/高さ22.5cm 陣羽織/両巾45.5cm、身丈82.0cm 袴身/長さ38.5cm	安土桃山時代(1573～1602)の当世具足の一つ。広島藩家老で茶人として知られる上田宗箇(うへだそうこ)が大坂夏の陣(1615年)の時に着用したと伝えられる。大形の風折烏帽子(かざおれえぼし)形の兜に、鉄の一枚板で作られた胴で、胴の前面と背面には銀箔で日の丸文が描かれている。製作も優れ、保存も良く、安土桃山時代を代表する甲冑である。 ※仏願…当世具足の胴の形式の一種。鉄の一枚板で作られ、仏像の胸のようなところからその名がある。		
県	重要文化財(工芸品)	黒鞆威胸丸	くろかわおどしどうまる	1領	山県郡安表太田町	昭58.11.7			南北朝時代(1333～1392)に製作されたと推定されている。威鞆(おどしかわ)あるいは紐所(ひもどころ)に後補が施されているが、総体的に原形をよくとどめ、南北朝時代の特色をうかがい知ることが出来る。現存する同様式の胸丸は、大山祇神社の宝物に多くみることが出来るが、全国的にみて遺品は極めて少なく、しかも脇板を用いておらず、注目値する稀有の遺品といつべきであろう。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅磨草文板蓮華文金具置戒体箱	こんどうらからくさもんいたれんげもんかなくおきかいたいばこ	1合	東広島市西条町下三永	昭59.11.19	木製金銅装	縦37cm、横12.7cm、高さ8.7cm	福成寺(ふじじょう)に伝わる室町時代末期(16世紀)製作と推定されている戒体箱。木製で、周囲を金銅製の板で覆っている。長方形で、蓋と身にわかれ、身の下部は格狭間(こうざま)の透かしが入った脚になっている。底板の四方縁辺部に「一・二・三・四」の数字が墨書してある。 ※戒体箱…密教灌頂(かんじょう)と呼ばれる仏教儀式の会場で用いる。戒文を納める箱		関連施設: 福成寺宝物収蔵庫 (082-426-0523, 082-423-3486)
県	重要文化財(工芸品)	金銅輪宝瓶庵文置説相箱	こんどうりんぼうかづまもんおきせつそうばこ	1合	東広島市西条町下三永	昭59.11.19	木製金銅装	縦33.5cm、横24.5cm、高さ11cm	福成寺(ふじじょう)に伝わる。室町時代末期(16世紀)製作と推定される説相箱。長方形の木製箱で、側面に金銅製の飾り金具が取り付けられている。下部は高台(こうだい)状の脚に繋がっており、格狭間(こうざま)の透かしが入る。底板の四方縁辺部に「一・二・三・四」の数字が墨書してある。 ※説相箱…僧侶が仏教儀式の時に用いる衣や法具、原稿などの必要なものを納めて例に置いた箱。居箱(すえばこ)とか撥借箱(せつせうばこ)とも呼ばれている。		関連施設: 福成寺宝物収蔵庫 (082-426-0523, 082-423-3486)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	金銅製五鈴鈴	こんどうせいごこれい	1口	甘日市市甘日市	昭60.12.2	金銅製	高さ18.0cm、鈴口径外回り7.5cm、内径5.0cm	密教法具の一つである金剛鈴には、独鈴鈴、三鈴鈴、五鈴鈴、宝珠鈴、宝塔鈴がある。この金剛鈴は金銅鑄造である。五鈴の張りはやや弱いが、蓮弁のしぼりは強く、柄の中程の積目(いのめ)もいまだ大目がほしが、鈴傘部の蓮弁の跡も顕著で、その外を廻る芯も細芯につり、鈴網を巻く子持ち帯も製作時代を特徴づけている。室町時代中期(15世紀)に製作されたと思われる数少ない遺品である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製地藏菩薩懸仏	どうせいじぞうぼさつかけぼとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫、半肉彫、毛彫	径24.2cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。円形銅板上中央に宝珠と錫杖(しゃくじょう)とをもつ地藏菩薩が蓮台上に坐し、頭光身光を負う姿に表されている。地藏と蓮台は、一枚の銅板を植て起して薄肉に押出して現われ、衣文蓮台などの細部は、よどみのない流れるような彫彫(しゅうりょう)で表現し、頭光・身光とともに円形銅板上に彫出されている。懸仏は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので、神社や寺院の内陣に懸けられていた。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄製釣燈籠	てつせいどうろう	1基	三次市島敷町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25	鉄製、六角燈籠	総高33.0cm、総径64.0cm	熊野神社の前身である王子権現に天正8年(1580)比叡尾山(ひえびやま)城主三吉隆亮が奉納したもので、六角燈籠の形態や、打ち抜き模様の優美な彫刻など、工芸美術的に優れたものであり、数少ない安土桃山時代(1573~1602)在銘の釣燈籠として貴重である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(工芸品)	金銅製板塔婆	こんどうせいいたうば	2基	三次市島敷町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25		総高62.0cm、台幅20.8cm	熊野神社背後の比叡尾山(ひえびやま)城主三吉隆高・隆亮父子が戦国時代の弘治2年(1556)、熊野神社の前身である王子権現に寄進したものである。中世末期(16世紀)この地方を支配した三吉氏と神社の関係を示す資料である。熊野神社の前身王子権現神殿左右の柱に打ちつけられたものと思われる。いづれも金銅製の板を三重塔形に打ち抜き、線刻で九輪三層の屋根・塔身・回廊等を詳細に線刻し、台座部分には梵文銘文が刻されている。精巧に彫金加工されたすぐれた遺品であり、また地域史の資料としても貴重である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2882)
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平5.2.25	和鐘、撞座に蓮華文	総高93.5cm、口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鐘で、三原鑄物師の製作したものである。撞座(つきざ)には蓮華文を鑄出している。また、慶長の追銘には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に供出されようとした本鐘が、町衆の寄附によって免れたことが刻してあり、天文年間(1573~1591年)当時の和鐘様式を良く伝えているのみならず、向上寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。向上寺は徳宗崇徳寺の大通禅師の開山になる寺で、瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることでも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	太刀附 鉄はばき	たち	1口	山県郡安芸太田町	平5.2.25	鑄造、庵棟、腰反り深く、大鋒	刃長86.7cm、反り28.8cm	大振りにつられ、身巾が広く、総体的に長寸で、切先は長く、豪壮な姿の作刀が多く造られた南北朝時代(1333~1392)の特徴を良く示している。また、茎(なかご)は製作当時のままであるため、茎全体が錆で朽ち込んで、本来あったものと考えられる作者名が不明になっているが、備中青江一派の作と思われる。このほか、大蔵神社には同じく果重文の黒重威願丸(くろかわおとしどうまる)が伝えられている。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	甘日市市吉和	平5.10.18		総高89.0cm、口径48.5cm	南北朝時代の明徳5年(1394)に製作された鐘である。銘文に「筑前国遠賀莊黒山千手寺」とあり、本来は現在の福岡県の寺の鐘として鑄造され、江戸時代末期に京都太秦広隆寺に移動し、現在は本寺に傳すという転変をたどったものであるが、その経緯については不明である。遠賀莊黒山が遠賀郡戸座町に近いことから戸座鑄物師の作品として注目される。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄地黒漆塗三十八間総覆輪筋兜	てつちくろうるしぬりさんじゅうはっけんそうふくりんずじかぶと	1頭	甘日市市宮島町	平5.10.18		高さ11.7cm、前後22.5cm、左右19.5cm	本兜鉢の黒漆は製作当初の状態をよく表し、兜の筋には靛金(とぎん)の覆輪(ふくりん)を施し、鍔形台の唐草の浮彫りなど、細部に多くの意匠が加えられた優品である。兜鉢鍔金具等は製作当初のものが残っており、室町時代初期(14世紀)の美術工芸品として貴重な兜である。		関連施設: 熊島神社宝物館(0829-44-2020)
県	重要文化財(工芸品)	太刀	たち	1口	庄原市西本町三丁目	平7.1.23	鑄造、庵棟、切先はやや小さい、刃文直、鑄目は浅い勝手下がり	全長91.3cm、刃長71.3cm、反り1.7cm、目釘孔1個	戦国時代の天文2年(1533)三原の刀匠正興が製作した太刀。この時代は刀が主流であり、実用刀としての太刀はまれである。保存状態もよく、芸術的にも非常に価値がある。製作者の正興は、時代、銘、反り、鑄目(やすりめ)などから初代正興と考えられる。銘太刀表「備後国三原住正興作」裏「天文二年八月日」		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	太刀	たち	1口	福山市引野町北二丁目	平8.9.30	鑄造、庵棟、鍛え板目、小鋒	全長92.0cm、刃長74.3cm、反り2.3cm、目釘孔1個、重量670g	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作。備後神辺の国分寺助国の作品である。国分寺助国は三原刀工と並んで鎌倉時代(1192～1332)の備後を代表する刀鍛冶であり、大和系の技術で製作する三原鍛冶に対して、備前・備中系統の刀剣類を製作していた。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頭五輪塔形舍利塔	こんどうせいゆうけいごりんどうがたしゃりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目) 広島県立歴史博物館寄託	平8.9.30	銅造、鍍金	総高6.45cm、舍利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)にかけて製作された舍利容器である。通常の五輪塔と異なり、火輪と水輪の間に円筒状の部分で作られており、むしろ宝塔を意匠したデザインと言える。水輪内部に舍利を納める円筒との蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され、洗練された美しさを感じさせる。光明坊は鎌倉時代以来の古例であり、西大寺流律宗の影響が伝わる。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	琵琶 附 旧押撥革1枚	びわ	1面	廿日市市宮島町	平14.2.14	四絃琵琶(よんげんびわ)	全長101.2cm 腹板幅(ふくばはば)40.5cm	厳島神社の社伝によると「玄上の琵琶」と称し、別名「谷川の琵琶」ともいう。腹板裏面の墨書きから、弘長2年(1262年)10月11日に玄上の琵琶を模して唯念(ゆいねん)が製作したことが知られる。四絃琵琶(よんげんびわ)として、鎌倉時代(1192～1332)の年号並びに作者名をも明記する稀有の品であり、正倉院の遺例と比較しても、その製作に古例をとどめている。		関連施設: 厳島神社宝物館 (0829-44-2020)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火焰宝珠形舍利容器	こんどうかえんほうじゅがたしゃりょうき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高 14.2cm、基壇径 5.6cm、独結杆(高さ)4.6cm、輪宝径 4.3cm(輪宝中央納穴)、縦横 0.4cm×0.5cm、蓮華座径 4.4cm、宝珠(高)3.9cm(径)3.2cm、火焰最大幅 5.6cm	当該舍利容器は、下から、台座、輪宝(りんぼう)及び宝珠から成る。台座は、六角隅入りの円形の基壇の上に反花(かえりばなざ)が載り、その上に独結杆(とっしや)が立てられる。独結杆の上部は輪宝と宝珠を連結するほぞとなる。輪宝は、中央部に独結杆の先が入るよう四角い穴が設けられている。宝珠は、蓮華座の上に載り、四方を火焰が囲んでいる。蓮華座は、5段で各段8弁の計40弁の蓮弁から成る。宝珠内部には、白色とやや黄色味を帯びた米粒状の舍利が納められている。いずれも水晶製と思われる。宝珠は水晶製で、これ以外は金銅製で鍍金が施されている。広島県重要文化財「浄土寺文書」によると、應暦3(1340)年、足利尊氏の直載(ただし)が仏舍利2粒を浄土寺に奉納したことが知られる。当該舍利容器の制作時期は南北朝時代と思われる。これがこの仏舍利を収めた容器である可能性がある。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘口州国分寺住人助国作 嘉暦二年正月日	たんとう めい(一字不明)しゅうこくふんじじゅうにんすけにさくかりやくにえんしょうがつにち	1口	福山市草戸町	平成30年(2018)3月22日	平造、庵棟、鍛えは板目に交互じり、目釘穴二個。	全長34.8cm、刃長24.8cm、わずかに内反り、目釘穴2個、重量142g	鎌倉時代末期の嘉暦2年(1327)、現在の福山市神辺町下御領の備後国分寺を拠点として活動した刀工の助国(すけくに)によって製作された短刀。助国は、備前伝(一文字派)の流れをくみ、大和伝(手掻系)の流れをくむ三原派(古三原)とともに、備後地域において最も古く鎌倉時代末期から南北朝にかけて活躍したことが知られる。助国には代があったと考えられ、本短刀の作者と考えられる二代助国は、初期は備前伝の作風であるが、徐々に大和伝が強くなる作風を示す。本短刀の内反りとなる姿は、鎌倉時代の短刀の特色を表す。板目に交互じりの地肌(鍛え)や筋線りを見せる点などに備前伝(一文字系)の特色が認められるとともに、直刃調の小湾つき刃文などに大和伝(手掻系)の特色が認められる。備前伝と大和伝が混在する点は、二代助国中期の作風を顕著に示しており、全体として鍛えの出来映えである。助国一派の現存する作品は非常に少なく、特に短刀の遺例は稀有であるが、その中において本短刀は在銘で嘉暦2年の年紀を有しており、同刀工の研究上において重要な作品である。県内に所在する国又は県指定文化財の刀剣類に照らして、年紀を有するものでは最も古い年代に位置付けられることから、本県の刀剣史上においても貴重な資料である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	25帖	三次市吉舎町吉舎	昭28.4.3	紙本墨書		平安時代の保延4年(1138)播磨国(兵庫県)揖保郡の住人桑原貞助の発願により、同国書写山円教寺(兵庫泉鏡路市)の僧道が一斉に書写した頓写(とんしや)経、いわゆる「円教寺経」で、平安写経の名品の一部である。もとは巻子装であるが、現在は折本装になっている。また、大般若経は本来600巻あるが、25帖だけ伝わっている。戦国時代の明応2年(1493)守近善秀が願主となって、大慈寺の山麓近くにある吉舎村八幡宮に施入されたと記されている。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書小田家文書	しほんぼくしよおだけもんしよ	3巻	廿日市市津田	昭28.8.11	紙本墨書		平安時代の永久3年(1115)から江戸時代の慶安4年(1651)にかけての91通の文書群である。戦国時代、厳島社領の佐西郡玖島(しお)郷(佐伯郡佐伯町玖島)の刀柄(とね)であった小田家に伝えられた古文書である。厳島社領の刀柄は村落や郷の中心人物であり、この文書も玖島郷における在地支配や収納関係を主体としている。中世の土地支配の状況を明らかにするうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書宝治二年二月領家下文地十二通	しほんぼくしよほうじにねんががつりょうけだしふみほかにしゅうにっつ	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目) 広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装		豊田郡本郷町の楽音寺文書6巻のなかの1巻。楽音寺文書は計56通で、うち54通が県指定である。文政9年(1819)巻末に記されたこの巻子は、12通の文書を1巻にまとめたもので、宝治2年(1248)楽音寺の支配下にあった葛沼寺(ひきぬめ)領乃力名(のりきめ)の方難公事(まんごうし、荘園内の雑税)を免除し葛沼寺の修理に必要であることを命じた領家下文書は、弘安11年(1288)4月の沼田庄雑事と地頭の争論を載せた関東下知状の英文、天正18年(1590)毛利氏惣領地にあつた楽音寺境内の守護不入を確認した毛利氏板地奉行入道書状とが含まれる。楽音寺は豊田郡本郷町にある真言宗の古刹である。沼田荘の開発領主・沼田氏が平安時代(794～1191)に創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した土肥遠平が氏寺とした。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書正応三年四月比丘尼浄蓮寺遣状他十一通	しほんぼくしよしょうおうさんねんしがつしよにしようれんきんしんしよほうかじゅういっつう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目) 広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装		楽音寺文書6巻のなかの1巻。小早川茂平の娘地頭元浄蓮が鎌倉の将軍家や自身及び子孫の菩提を弔うため、三重宝塔建立助成田を寄附した正応3年(1290)4月の寄進状など、鎌倉時代から安土桃山時代(12世紀末～17世紀初め)にかけての小早川氏や毛利氏による土地寄附や宛行(あてがい)に関する文書がまとめられている。楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書天正十二年五月仁和寺法親王令旨他十三通	しほんぼくしよてんじゅうごにねんごがつにんじほつしんのうりょうじほかじゅうさんつう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装		楽音寺文書6巻のなかの1巻。 仁和寺法親王に法親王を西国下向の途中楽音寺で宿泊接待を受けたことを感謝し塔頭のひとつに院号を与えた天正12年(1584)5月の2通の令旨をはじめ、南北朝時代の永和5年(1379)から明徳4年(1393)にかけての時期の院主職関係の文書や室町時代(1333～1572)の役良担に関する小早川氏の文書など13通がまとめられている。 楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書弘安四年正月領家下文他十一通	しほんぼくしよこうあんよねんしゅうがつりょうけかくだしふみほかじゅういっつう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装		楽音寺文書6巻のなかの1巻。 弘安4年(1281)正月の沼田庄領家下文をはじめ、楽音寺への土地寄進や役免除に関する鎌倉時代から室町時代(永享12年(1440))までの文書11通がまとめられている。 楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書慶長五年五月毛利輝元寺領寄進状一通	しほんぼくしよけいごごねんごがつりょうていもとりょうきしんじゅうほかじゅういっつう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、軸装		楽音寺文書の中の1巻。 慶長5年(1600)4月付けの毛利輝元の楽音寺領寄進状写しや羽子型沼田南方(豊田郡本郷町南方)の楽音寺領を一筆毎に列記して渡した奉行人通書打戻状など3通でまとめられているが、寄進状などの江戸時代の写し2通は対象外である。 楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書慶長元年検地帳	しほんぼくしよけいごごねんげんちちょう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装	本紙縦31.9cm、横637.5cm	楽音寺文書6巻の中の1巻。 慶長元年(1596)毛利氏の惣国検地の一環として行われた楽音寺法持院領分の検地帳。田畠屋敷一筆ごとに地名・面積・年貢収納高・耕作者(所有者)名が記されている。現状は卷子装に改装されている。 楽音寺は平安時代(794～1191)に沼田庄の開発領主・沼田氏が創建した寺で、法持院はその18の塔頭の一つである。源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	葛原勾当日記 附 印刷用具1具及び琴、三味線箱古墨筆記録10冊	くずはこうとうにっき	3帖・11冊	福山市神辺町新湯野町(音楽日記念館 保管)	昭29.9.29 昭50.4.8 (追加指定、名称変更)			葛原勾当は文化9年(1812)現在の深安郡神辺町八尋に生まれた。3歳の時ほうそうにかかり失明、9歳で京に上り松野校校(げんぎょう)の門に入り、生田(いた)流の華曲(そうきょく)と地歌(ぢか)を学んだ。15歳で勾当の位階を授けられ、福原の地名をとって葛原勾当と称した。帰郷して後は、備後、備中(岡山県西部)両国を中心に広く教授に当たり、関西の名手として聞こえた。 勾当日記は、26歳から71歳で病没するまで、みずから案出した木活字を使って記したものである。活字はひらがな。数字、句点からなり、線を刻み無感で判別できるよう、また行は定本で正すように考案されており、今日のタイプライターの原理に通じるものがある。その記載は簡潔素朴、音の世界を詠んだ歌が260首も収められており、勾当の感受性の鋭さがうかがわれる。		
県	重要文化財(典籍)	坂本大般若経 附 経櫃 3櫃	はんぼんだいはんにゃきょう	600巻	府中市栗柄町	昭29.11.11	木版刷り		奈良興福寺で印刷・出版された春日版(かすがばん)大般若経の3櫃600巻である。櫃の銘によって室町時代の応永29年(1422)12月に南宮神社に寄進されたことが分かる。 大般若経の遺品は県内に多いが、600巻が完存しているものは比較的少ない。また、原則どおり200巻ずつ櫃に納められ、櫃が経巻と同時代のものであるは更に少なく、貴重である。 神宮寺は、南宮神社の別当寺である。この大般若経と同じ時期に寄進された十六善神像も保存されており、貴重な事例となっている。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書啓迪集	しほんぼくしよけいてきしゅう	8冊	三原市円一町	昭30.1.31	紙本墨書、冊子装	縦27.1cm、横20.9cm	日本医学史上に画期的な功績を残した曲直瀧道三(まなせどうさん、1507～1595)(正盛)が天正2年(1574)に編出した道三医学の集大成本で、動命によって僧東彦(さくげん)が題詞を認め、医学全般にわたって論述されている。 天正11年(1583)小早川隆景の侍医・水野松林軒に贈ったことが自筆奥書によって知られる。永禄年間(1568～1570)、毛利元就が出雲出征中に病になったとき、道三は將軍足利義輝の命で出雲に下向してこれを治癒して以来、毛利氏一族の知遇を得ており、その縁でこの本を隆景の侍医に贈ったのであろう。この啓迪集の刊本はなく、現存を確認できる自筆本は他に一書しかない。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺寄附帳	しほんぼくしよさいこくしきふちりょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本		南北朝時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけて行われた西国寺の講堂宇の建立再建に関する寄附を中心にして記録したもの。巻頭の山名持聖(宗全、1404～1473)をはじめ山名氏一族や備後守護代・犬崎清泰などの山名氏家臣を中心とした36名の名前と寄進内容が記されている。「沼原郡新庄長乗秀」の名もみえ、中世の富裕層の一掃を見ることが出来る。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺建立施主帳	しほんぼくしよさいこくしきりゆうせしゅちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦33cm、横122.4cm(八折)	室町時代(1333～1572)の西国寺再建で施主となった人たちの署名帳である。筆頭の「征夷將軍」は花押から見て足利6代將軍義教(1394～1441)と考えられ、次いで本願導師である西国寺の尊章(ゆゑん)僧正、次いで、細川持之、畠山持国、山名持隆、大内教弘など、幕府の重臣や守護大名たちの名が見える。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺不断経修行事及西国寺上録帳	しほんぼくしよさいこくふだんぎょうしゅぎょうじおよびさいこくあげせんちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦30.3cm、横702cm(52折)	戦国時代の文明3年(1471)6月16日、西國寺の不断経修行を再興するため、西國寺支配下の各坊に上録をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197室にのぼり、尾道をはじめ、吉香・今高野山・御調などの備後国内の者や備中栗王寺などの名が見える。不断経修行は天文元年(1168)堀川院通福のため始まったが、武家の舊地押領のため中断していた。西國寺は今までの幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	版木大般若経 附 経櫃 3櫃 中箱 60箱	はんぼんだいはんにゃきょう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本、折本	縦26.3cm、横10cm程度	近江源氏の佐々木氏頼が康暦元年(1379)に開版した版木で摺った大般若経で、600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書録により、応永9年(1402)6月に西國寺業師堂(金堂)に施入されたことが記されている。 「寄進備後国御調郡尾道浦西国寺業師堂 応永九年壬午六月八日勅主権律師慶舟願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 経櫃 1櫃 中箱 18箱	しほんぼくしよさいいはんにゃきょう	112帖	尾道市西則末町	昭30.1.31	紙本墨書、冊子、旋風葉(せんふうよう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛時が三島大明神に施した大般若経。全巻に施入の奥書がある。1行17文字で、界線は墨書である。旋風葉(せんふうよう)の表装を施したこの経巻は、全巻を同時期に書写したのではないようだが、奈良-平安時代初期(9世紀前半)の書風も見える。 天文22年(1553)に栗原六村の氏子により八幡宮に寄進され、以来、栗原八幡神社に伝えられた。櫃の蓋裏に墨書で寄進した旨が記されている。 「天文廿二天災丑栗原之惣六村願主八幡宮御経五百内六百内住侶清正月十三日氏子諸人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよさいいはんにゃきょう	2帖	尾道市美ノ郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書、折本		平安時代の永久6年(1118)に明法生藤原季行が書写した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられ、各巻に奥書がある。1行17文字、界線は墨書である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺塔婆勧進帳	しほんぼくしよさいこくしうばかんばんちょう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書、卷子装	縦42.0cm、横255cm	室町時代の永享元年(1429)に寄尊(ゆうそん)僧正が西国寺三重塔(重要文化財)の建立を発願した際、寄附を募るために趣旨を記した勧進帳である。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書三吉鼓家文書 正平六年正月廿五日後村上天皇翰旨 1通1巻 観応二年二月十五日足利尊氏下文外 20通1巻 附 三吉鼓家系図 1巻 康永二年五月廿一日僧覚弁軍忠状外 10通写1巻	しほんぼくしよさいみやまのうらみもんじょ	2巻	広島市中区千田町三丁目	昭33.8.1	紙本墨書、軸装		南北朝時代(1333～1392)、備後の豪族であった三吉少納言房覚弁(かくべん)及びその子孫の活動を物語る古文書20余通からなる。この文書中、覚弁に関するものが最も多く、それも正平6年(1351)から2年間にかけての。この時期は観応擾乱(かんのうのじょうらん)の直後であり、在地武士の動きは複雑で、覚弁も正平6年正月に南朝の後村上天皇より翰旨(りんじ)を受け、観応2年(1351)2月には南朝方となった足利尊氏から下文(くだしるみ)を受けており興味深い。 ※観応擾乱(かんのうのじょうらん)…南北朝時代、足利尊氏と直義の対立を中心とする争乱。1350～1352年を中心とする時期に起こった。		関連施設: 広島県立文書館 (082-245-8444)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書因島村上家文書	しほんぼくしよさいのしまむらかみけもんじょ	3巻	尾道市因島中庄町宇字道 (水軍城資料館寄託)	昭37.3.29	紙本墨書、卷子装	第一巻長さ222.7cm、幅40.6cm、第二巻長さ746cm、幅40.6cm、第三巻長さ450cm、幅40.6cm	因島を中心とする中世荘園関係文書、感状及び書簡など50通からなる因島村上家伝来の古文書群。鎌倉時代から戦国時代(12世紀末～16世紀)の毛利・小早川関係のものまであるが、すべてが因島村上家に関係するものではない。その関わりについて種々論議されているが、確たる説はない。いずれにしても、中世における因島及び瀬戸内海地域の状況を知るうえで貴重な資料である。 因島村上家はいわゆる三島村上家のひとつである。室町時代(1333～1572)以来因島や向島などを拠点に活動し、金蓮寺や中庄八幡宮など因島村上家ゆかりの社寺も数多く見られる。後、小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財(典籍)	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじざいめいかわら	4巻	尾道市因島中庄町宇字道 金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦、銘へら彫刻	丸瓦縦32cm、横14cm、高さ7.6cm 棟瓦縦30cm、横29cm	因島村上吉資が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年(1450)に御堂の上葺の事を銘書(へらがき)した丸瓦と棟瓦である。尾道の瓦大工が製作したもので、住持快秀(かいしゅう)、大進那宮大炊助妙光(おおいのすけみょうこう)、瓦大工尾道住衛門五郎経次などとともに、浦々の結縁合力者の名が列記されている。宮地妙光は俗名明光、村上吉豊・吉資の老成であったという。また、伯耆大山の僧侶の名前も見られ、瀬戸内と日本海の交流の様子をうかがうことができる。 金蓮寺は、因島のほぼ中央にあり、因島村上家の菩提寺である。宝徳元年(1449)村上吉資が創建したと言いが、開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書出三蔵記集録上巻第二 「文永十二歳萩原之御於斗山寺書写之の奥書あり」 附 紙本墨書広弘明集(断簡) 1巻	しほんぼくしよさいゆづきんぞうしきゅうらくしゅうかんだいて	1巻	三原市八幡町宮内	昭38.4.27	紙本墨書	縦25.4cm、横1190.9cm	文永12年(1275)頃に斗山寺(賀茂郡大和町萩原に跡がある)において行われた一切経書写の一部と思われる。鎌倉時代(13～14世紀前半)における地方仏教史を研究するうえで貴重な資料である。 出三蔵記集録とは、梁の僧祐撰の漢訳大蔵經の目錄で、記録目錄としては最古の仏教史上貴重なものである。		関連施設: 御調八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書不動院文書 附 新山安国寺不動院由来 1冊 新山安国寺不動院雜記 1冊	しほんぼくしどういんもんじよ	4巻	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	紙本墨書、卷子装		安土桃山時代から江戸時代初期(16世紀後半～17世紀)にかけての文書群。4巻24通からなる。安国寺意理(えいり)圓徳の書状。豊臣秀吉朱印状。毛利輝元や福島正則の書状などが見られる。不動院の前身は平安時代(794～1191)の創建と伝えられ、南北朝時代(1333～1392)に安国寺の安国寺に設定された。戦国時代、蓮雨惠運(うしほけい)が京都東福寺住持に出立し、毛利輝元・豊臣秀吉の信任を受け政治的にも活躍するようになると寺運は興隆し、堂塔の再建に力が入れられた。福島氏の広島入部後は、正則の祈禱師有珍(ゆうちん)がこの寺に入り、臨済宗から真言宗にかえられ、寺号も有珍が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
県	重要文化財(典籍)	法華経版本	ほけきょうほんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	南北朝時代の応永2年(1395)9月から3年正月にかけて、僧行安の勸進により、浄土寺で開版された版本。広く俗人の理解をはかるため、経文に送り仮名や返り点を施しており(巻八の刊記)、付刷の版経の古い資料として貴重である。また、この版本は、応永5年(1398)重刊近江八幡神社蔵の倭点法華経と本文訓点が大体同じであり、播磨書写山の心空の校定版の改刻版の一つと言われる。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	梵網経版本	ぼんもうきょうほんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	室町時代の応永11年(1404)浄土寺で作られた版本。「備後国尾道浦於浄土寺開版応永十一年甲申」の刊記があり、地方における印刷文化発達の事例として貴重である。梵網経は5世紀後半に中国で成立したと推定されている経典。日本仏教でも尊重され、多くの注釈が作られた。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	浄土寺文書	じょうどじもんじよ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書		鎌倉時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけての文書類である。浄土寺が、天皇家をはじめ足利将軍家・管領・守護・守護代などと密接な関係を保ちながらその信仰を集めるとともに、寺領荘園の維持に努めてきたその時代推移を語る資料類である。これらを大別すると1.信仰関係、2.皇室・足利氏以下諸豪族から荘園までを網羅した文書、3.寺領年貢書付となり、それらは相互にからみあっている。寺内にあった利生庵の料所種田村(双三郎君田村)の百姓等が、武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署起請文のような、庶民の動きを示す文書も含まれている。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	知新集	ちしんしゅう	25巻25冊	東広島市鏡山一丁目	昭41.4.28	和装本袋とし、楮紙	縦26.4cm、横20.0cm	「知新集」は、江戸時代における広島町奉行管内(町領と新開組、すなわち旧広島市域)の地誌としてほとんど唯一で、しかもわけて詳細な文献で、広島藩地誌「芸藩通志」の編集の下調査書の一つである。西町奉行宮求馬、町役人の山泉屋、安田屋らが史料を集め、更に藩士で文人の飯田利矩(萬老)と(うろ)が主任として加わって文政2年(1819)から文政5年(1822)までの間に整理編集されたものである。第一巻には地名・群名・風俗など総本を記し、第二巻から第八巻までは広島五畿及び新開について町村別に詳記している。第九巻から第二十巻は寺社別の位置、沿革、第一十五巻は広島城のことを記している。「新修広島市史」の第六巻「資料編その一」に全巻収録されている。		
県	重要文化財(典籍)	西備名区	せいびめいく	123冊	福山市駅家町向永谷	昭41.4.28			向永谷村(福山市)の庄屋・馬屋原重帯(1762～1836)が著した備後全域の地誌。草稿本90巻34冊(完備)、清書本89巻89冊(初巻欠、第27巻後補)からなる。草稿本は文化元年(1804)成立、その後も改定増補が続けられ、清書本には「文化五年夏四日馬屋原重帯記」の跋文(はつぶん)がある。部別に各町の地誌的情報を詳細に記し、後の「福山志料」などのもととなった。他の伝写本と異なり著者の自筆であり、完全な家で子孫に所蔵されていること、備後全域のほとんど唯一の詳細な地誌として史料価値のあることなど、県地域に密着した著作として貴重である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金字大般若経	こんしきんでいだいはんによきょう	1巻	三原市八幡町宮内	昭42.5.8	紺紙金泥経、卷子装	縦24cm、横510cm	平安時代(794～1191)の装飾経。大般若波羅蜜多経(だいはんにやほらみだきょう)600巻の中の第591にたる「第十五靜慮波羅蜜多分一」である。紺紙に金泥(きんてい)をもって一行16字から18字よりなり、経巻中の脱字は朱で加筆されている。見返しには金泥で三尊仏が描かれているが、奥書はない。江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の三原の学者・青木充延が著した「備後八幡雜記」には、「文化八辛未正月七日青木充延奉納」とあり、文化8年(1811)青木充延が神宮寺を経て御頭八幡宮へ納められたことが分かる。		関連施設:御頭八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 中箱 60箱	しほんぼくしだいはんにゃきょう	600巻	東広島市豊栄町乃美宮迫	昭42.5.8	紙本墨書、折本		この大般若経の主体をなすものは、平安時代の建久元年(1190)僧延増が、商人からかなりまとまった本経典の一部を入手し、欠巻を、僧延増自ら補写して完本としたものようである。したがって、それらは平安時代中期(10～11世紀)ごろの書写と認められるもの、保安4年(1123)書写の奥書を有するものなどがあつた。「承久五年(1117)細工師日代主親寄山永継」が寄進した旨の奥書を有するものが特に多い。また、鎌倉時代(1192～1332)の補写や版本も交っている。嘉慶2年(1387)政信が郷内に勧進して小窠60個を寄進し、文明9年(1477)則光の幸福寺において経巻を修復した。江戸時代に取壊したが、延享3年(1746)乃美村庄屋児玉政勝以下の寄進をもって凡そ100巻余に及ぶ欠巻を補い、前欠、後欠等の補写を行って完備させた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 11巻	しほんぼくしだいはんにゃきょう	570巻	三原市久井町江木宮の本	昭42.5.8	紙本墨書、折本		室町時代の応永13～17年(1406～1410)の間に書写されたもので、各巻奥書に執筆者名と、応永17年11月22日僧清篤が大願主兵衛三郎宗義並びに女、また一部は村上義興を施主として伊予国大浜八幡宮(愛媛県今治市大浜)に奉納した旨が記されている。執筆者は清篤が最も多く(253冊書写)、その他29人の人名がみられる。そのうち聖純(28冊書写)は讃岐国豊田郡坂本郷藤田村柏木住の僧であることが知られる。これらの経巻は天正13年(1585)8月小川隆景が伊予の領主となったことにより、同年9月18日付をもって隆景から井稲生神社に寄進されたものである。版本5巻と寛延年間(1748～1750)岡地千光寺と伝通寺において重複書写された6巻を含む。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書田所文書 安芸国衛領注進状(前欠) 1巻 正応二年正月二十三日 沙弥謙状の奥書のあるもの 1巻	しほんぼくしよたごころもんじよ	2巻	安芸郡府中町	昭44.4.28	紙本墨書, 卷子装		平安時代後期(12世紀)から安芸国衛(くが)の田所職(たごころしき)を世襲した在京官人・田所氏に伝えられた文書群。 国衛領注進状(ちゅうしんじょう)は各種免田と輸租田を列記した注文である。巻首部を欠くが、奥書に「十二月日大前官代(花押)とあり鎌倉時代初期から中期(12世紀末～13世紀)にかけてのもので推定され、当時の安芸国領領の様相を知るための貴重な資料である。 正応2年(1289)正月23日沙弥謙状(しずしじょう)のある巻は田所氏の財産を書きあげた注文である。国衛における船所・惣税所職以下田所氏が世襲している諸職の得分、散在する数十町歩の私領地数十人に及ぶ所従など田所氏の家族的性格、具体相を知る貴重なものである。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	514巻	神石郡神石高原町油木	昭44.4.28	紙本墨書, 折本	縦27.5cm, 横9.2cm	南北朝時代の応安6年(1373)5月頃から永和元年(1375)10月頃までの約2年をかけて完成し、永徳2年(1382)尾道持光寺に納められた経。勅主(勅進元)は、すべて稚少僧部阿闍梨(あじり)稱喜という僧で、願主は頼朝のほか武士、名主、庶民、僧侶などさまざまな階級の者38人を数える。写経場所は尾道浦の各寺院がほとんどだが、豊後(大分県)などの僧侶の名も見え、港町尾道の活況をも見ることができている。 この大般若経は、奥書の「尾道持光寺常住也」の文字や、これを納める唐櫃の朱書「永徳二年壬戌六月一日」(備後尾道浦)により、尾道浦の共有として持光寺に置かれていたが、なんらかの経碑をえて、油木八幡神社に奉納されたものと思われる。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大乗十法経	こんしきんぎんでいだいじょうじっぽうきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長1.012cm, 幅25.7cm	紺紙十八紙を縫いで作られた経巻で、巻頭表には金泥をもって宝相華(ほうそうげ)唐草文様に題箋を描いて「大乗十法経一巻」の経題を書いている。見返しには、釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描き写した表紙をつけている。本文は「仏教大乗十法経」から書き始め、金銀泥で全行行間に金銀一行ずつ交互に書き写す交書で記され、流麗な楷書で書かれた装飾経で、奥書はないが平安時代(794～1191)の作である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥無量義経	こんしきんぎんでいむりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長846cm, 幅26.6cm	紺紙十七紙を縫いだ経巻で、巻頭に見返し経があつたと思われるが、ほとんど欠失してその残部をわずかに残すのみである。巻末には杉原の軸牌をつけ、その両端の金銅(84x3形)は「ばちがた」金具は完存しており、魚々子(ななこ)で宝相華(ほうそうげ)文様を彫り出し、当時の工芸技術を知るうえで資料となる。本文は、金銀泥で全行行間に金銀一行ずつ交互に流麗な楷書で書き写したいわゆる交書で、奥書はないが平安時代(794～1191)の装飾経である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大日盧遮那成仏経巻第三	こんしきんでいだいびるしやなじょうぶつきょう かんたさいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長802cm, 幅25.8cm	紺紙十六紙を縫いでおり、紺紙の表には金泥で宝相華(ほうそうげ)文と「大[84x]盧遮那成仏経巻第三」の経題を書き、見返しには山水、家屋、蓮池を描き、屋内には二人の僧が対座し、外には数人の僧が異なる様子が描かれている。杉原の軸の両端には金銅(84x3形)は「ばちがた」金具を止め、魚々子(ななこ)で宝相華文様を描いている。本文は「大[84x]盧遮那成仏神変加持経巻第五」から書き始め、銀泥の間に金泥で楷書で書き写した装飾経である。奥書はないが平安時代末期(12世紀後半)の作。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大日盧遮那成仏経巻第五	こんしきんでいだいびるしやなじょうぶつきょう かんたさいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長900cm, 幅26cm	紺紙十七紙を縫いだ経巻で、紺紙の表には金泥(きんでい)で宝相華(ほうそうげ)文様を描き、題箋に「大[84x]盧遮那成仏経巻第五」の経題を書き、見返しには龍雲山での釈迦説法の図を描いている。軸木は杉製で、両端に金銅(84x3形)は「ばちがた」金具に魚々子(ななこ)で宝相華文様を彫り出したものをつけている。本文は「大[84x]盧遮那成仏神変加持経巻第五」字輪点第十から書き始め、銀泥の間に金泥をもって楷書で記した装飾経で、奥書はないが、鎌倉時代初期(13世紀前半)の作。		
県	重要文化財(典籍)	法華経版木	ほけきょうはんぎ	61枚	三次市吉舎町検	昭50.9.19	版木, 材質様	縦25cm, 横90cm前後, 厚さ2.4～3cm, 刻字面/縦22.5cm, 横60cm(30行)と70cm(35行)	版木の材質は桜で、室町時代(1333～1572)の製作。 収蔵場所は、能引寺と言われる神宗寺院跡で、南天山城主和智信守の開基による仏通寺末貴梅院の支配であつたという。永禄9年(1566)小早川隆景が仏通寺に法華経版木を寄進しているが、現在仏通寺には当該版木はなく、あるいは龍泉寄進の版木が門元の能引寺に移されたものかとも考えられる。 樺村国郡志書出版によると、この版木は鎮守の四主殿に納められ、この版木が村を出ると異変があると記しており、文政年間(1818～1829)以前ののり前から同寺に所蔵していたと思われる。		関連施設: 吉舎歴史民俗資料館 (0824-43-4400)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	393帖	世羅郡世羅町田打	昭50.9.19	紙本墨書, 折本	縦27.6cm, 横11.5cm	南北朝時代の永和3～5年(1377～1379)に備後国三原金剛院開山源恵が願主となり、同寺のために、三原、沼田荘付近の寺院で多数の僧が協力して書き写したものであることが奥書によって知られる。書写の場所として三原大智坊、壺沼寺(ひきぬでら)、築音寺、香根島長善寺等、当時の真言宗寺院の分布状況が知られる。 その後、文明2年(1470)に伊予国越智郡朝倉郷(愛媛県越智郡朝倉村)の神社に奉納されているが、これは小早川氏の所領関係によると考えられる。更に後には再び海を渡り豊田郡舟木村(本郷町)の永福寺の所有になったようで、經典の裏に永正末期(1520年ごろ)から永禄年間(1568～1570)にかけての永福寺等の記事がある。更に三統して永寿寺に入ったのは江戸時代に入ってからである。		
県	重要文化財(典籍)	清神社棟札 附 在銘蓮子窓断片 1枚	すがじんじむなふだ	16枚	安芸高田市吉田町吉田 (安芸高田市歴史民俗博物館寄託)	昭50.9.19		長さ81.8～163.4cm, 幅0.4～23.7cm 蓮子の縦53cm, 横80.8cm	清神社社殿の造営、修理、屋根葺替の際のもので、南北朝時代の正中2年(1325)から江戸時代の元禄7年(1694)までの16枚からなる。 毛利時代までのものには荘園本家の呼称及び毛利氏歴代の当主の名が見られ、近世には村の鎮守へと変化する経過がたどれる。 蓮子(れんし)窓断片の落書き、元亀3年(1572)に京の神道家・吉田兼右が参詣したこと、天正4年(1576)に吉田兼中が公卿の九条権通から源氏物語を聴いたことを記す。 清神社は、中世には京都祇園社の荘園吉田荘の鎮守で、のち毛利氏の氏神となった。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	福成寺文書 附 福成寺縁起文 1巻	ふくじょうじもんじよ	9通	東広島市西条町下三永	昭63.10.4	軸装		福成寺に伝わる南北朝時代(1333~1392)から安土桃山時代(1573~1602)にかけての9通の文書群。西条盆地の歴史を知るうえで貴重な資料である。 後醍醐天皇論旨(りんじ)と後村上天皇論旨は福成寺が建武政権の庇護を得、南朝勢力の拠点であったことを示す。毛利弘元書状は山口の永上山興隆寺(大内氏の氏寺)別当宛で、室町戦国時代に東西条(西条盆地と高瀬川下流域)が大内氏直轄領でこの寺がその精神的拠点であった時期のもの。天正12年(1584)6月付の毛利隆元書状と同奉行入道兼兼制は伊予の河野通直が土佐の長宗我部氏の攻撃を受け、毛利氏の救援を求めて室堂に渡来し、この寺で書くと念及したことを示す史料である。 福成寺は西条盆地東側の海拔500m余の山上にある真言宗の古刹で、寛仁年中(1017~21)に現在地に寺地を移したと言われる。南北朝時代から室町時代(14~16世紀)にかけて大内氏と関係を深め、山口興隆寺末寺になっている。		
県	重要文化財(典籍)	洞雲寺文書	どううんじもんじよ	42通	廿日市市佐方	昭63.2.18			戦国時代初期の明応2年(1493)から桃山時代の文禄元年(1592)までの100年間にわたる。広島藤原神主家歴代、周防大内氏、陶晴賢、毛利氏当主乃至松尾城主等から受けた尊崇・保護を示す洞雲寺伝来の文書42通。県内では尾道浄土寺や広島大願寺を別として、武符の建立による寺院の中世文書としては来言寺文書に次いで、保存も良好であり、学術資料・古文書として貴重である。 洞雲寺は戦国時代初期の長享元年(1487)広島社神主藤原教親が金剛用兼を開山として建立した名刹である。戦国時代には藤原神主家をはじめ周辺の支配者がめぐるしく交代したが、洞雲寺は寺勢を維持している。		
県	重要文化財(典籍)	洞雲寺本正法眼蔵	どううんじほんしやうほうげんぞう	20冊 (60巻)	廿日市市佐方	昭63.2.18	袋綴	縦25.0cm、横18.5cm、厚さ1.5cm	永正7年(1510)阿波国勝浦(徳島県勝浦郡勝浦町)の桂林寺で、当時桂林寺住持で洞雲寺開山の金剛用兼や桂林寺品柱首座を中心に、数人の筆者によって写された写本である。金剛用兼の自筆を含んでいる。 正法眼蔵は曹洞宗(そうとうしやう)開祖・道元の説法・示衆を集大成したもので、大きく分けて75巻・60巻・12巻・28巻の4種が存在する。洞雲寺本正法眼蔵は60巻に属する。 書写時期が奥書によって明らかになるものが大部分を占め、かつ平仮名交じりで書いてあるため、道元の撰述当初の本文に近いと見られるものである。 戦国時代前期(16世紀前半)書写の良質の正法眼蔵写本として広く知られており、成立事情・由来の明らか極めて貴重な典籍といえる。		
県	重要文化財(典籍)	五輪塔形曳覆曼荼羅版本木	ごりんとうがたひきおおいまんだらほんぎ	1面	府中市本山町	平7.1.23		縦124.8cm、幅48.5cm、厚さ4.5~5.0cm	曳覆曼荼羅は、中世以来の葬送儀礼に用いられたもので、棺に納められた遺体を覆う白布に成仏を祈願するため曼荼羅等を描いたもので、これを印刷するための版木が寺に伝わっている。 比較的歐式の板材の一面に高さ90.5cmの五輪塔形を彫刻し、梵字・漢文を配している。裏面は一切無地である。 この版木は図像等から、鎌倉時代(1185~1332)の作と考えられるので、全国的にも室町時代(1333~1572)以前の版本は5例しか確認されておらず、全国でも最古級のものと推測される。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大願寺尊海文書(大願寺領所務帳)	しほんぼくしやうだいがんじそんかいもんじよ(だいがんじりやうしよむちやう)	1巻	廿日市市上平良字堂埋内	平8.3.18		幅30.8cm、長さ505.1cm	戦国時代(16世紀)の天文16年(1547)11月、大願寺尊海作成の広島島内所在の屋敷分を除く大願寺領の年貢徴収台帳。縦目裏には尊海の花押がある。 島内や廿日市などの大願寺領の全容が詳細に記録され、寺領形成の過程や負担の実態などを知らることができ。 大願寺は広島神社の寺院のひとつで、社殿の造営や修理などに係ることで大きな勢力を築きあげていた。尊海は戦国時代の大願寺住持のひとりで、天文8~8年(1537~1539)には高麗版大蔵経を求めて朝鮮半島に渡っており、「尊海上人渡海日記」を残した。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 経櫃 3櫃 中箱 60箱	しほんぼくしやうだいはんにゃんきやう	583帖	東広島市志和町志和郷	平9.5.19			南北朝時代の正平20年(1365)10月天野道隆が願主となって志芳(しわ)庄八幡宮(現在の大宮神社)に寄進した大般若経である。天野道隆は志和庄地頭天野氏一族と推定される。 巻子装であったが、後に折本装に改装されている。600巻のうち17巻が失われているだけで、471帖はほぼ古い形を残しており、広島県の中世史を語る貴重な資料となっている。 また、経櫃3合・中箱60合が伝えられている。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥細字法華経 附 木製漆塗六角経櫃 1基	こんしきんでいさいじほけきやう	1巻	三原市高坂町許山	平9.5.19	卷子本	本紙/縦5.4~5.5cm、全長886.8cm 木製漆塗六角経櫃/全高12.3cm、屋蓋幅7.5cm、基台幅7.2cm	鎌倉時代の弘安6年(1233)の作。極めて小さい巻子(かんす)本で、紺紙上に金泥を用いた細字で法華経8巻28品分を一巻により巻に書写している。小品であることから、祈願経が奉納経であったことがうかがえる。 附属する経櫃(きやうどう)は六角形で、木製黒漆塗、一部棧線に朱塗を入れ、屋根頂部に漆箔おしの宝珠が載っている。		
県	重要文化財(典籍)	佛通寺文書 紙本墨書47通、板刻2枚、書冊7冊	ぶつづうじもんじよ	44点	三原市高坂町許山	平9.9.25			佛通寺に伝来した室町時代から江戸時代初期(14~17世紀前半)にかけての古文書44点。 佛通寺の形式、小早川氏や毛利氏の縁組、あるいは15世紀中頃の沼田小早川氏による佛通寺経営の実態など多様な内容を含み、学術的にも貴重な文書群である。 佛通寺は応永4年(1397)小早川春方が愚中周及を招いて創建した禅宗寺院である。		
県	重要文化財(典籍)	佛通寺正法院文書	ぶつづうじしやうほういんもんじよ	10通	三原市高坂町許山	平9.9.25		(cm) 23.1×52.3 29.9×39.6 41.8×40.7 30.9×41.0 29.0×45.0 17.0×45.5 32.0×69.9 31.7×45.0 28.3×42.2 16.8×41.7	佛通寺の塔頭のひとつ・正法院に伝わる。室町時代の永享4年(1432)以後安土桃山時代(1573~1602)までの中世文書群。正法院領の形成が小早川氏の家臣であった真田氏によって行われたこと、小早川氏の庇護を受けていたことなどが記録されている。 点数は少ないが、佛通寺文書とあわせて、佛通寺の歴史を全体として捉えるうえで重要な資料である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	質量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	菅波福道一代記 附 箱2合	すがなみのふみちらいでき	75冊	福山市神辺町川北	平14.2.14	形状ノ半紙二ツ折冊子装(箱)覆箱 桐材	縦27.3cm 横19.7cm 縦33.3cm 横25.4cm 深さ40.4cm 身 縦31.5cm 横23.5cm 深さ40.7cm	本書は、備後国安那郡川北村(現安那郡神辺町大字川北)の尾屋菅波家11代当主であった菅波信道(寛政4年～慶応4年(1792～1868))が口述筆記して作成した自叙伝である。 本書には、彩色の挿絵が多用され、災害や事件に関する挿絵もとり、酒造や酒販売の実況を伝える挿絵など、当時の日常生活・世相・風俗を余すところなく伝えている。		
県	重要文化財(典籍)	東禅寺文書	とうぜんじもんじょ	18通	三原市本郷町	平21.4.23	紙本墨書		東禅寺(元・基沼寺(ひきぬでら))に伝来した鎌倉時代末期から室町時代にかけての文書(もんじょ)群(11通)とある時期に同寺に流入した弁海名(べんかいなま)に関する文書群(7通)から成る。 前者は、沼田庄(ぬたのしょう)地域の政治や宗教の在り方を明らかにする上で貴重である。 後者は、記載地名が今日でも現地比定でき、弁海名の広がりや経営状況などを明らかにすることができる基本史料である。		
県	重要文化財(考古資料)	寿和光寺塔址出土遺物 風鏝破片3、九輪破片3、中心礎石1	はいわこうじとうあとしつどういぶつ	7点	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29		九輪は復元推定直径32～42cm 風鏝は復元推定長約20cm	和光寺は奈良時代後期～平安時代初期(8世紀後半～9世紀前半)の古代寺院である。その後荒廃し、永禄5年(1562)、時の津之郷領主田辺氏が寺域の一角に田辺寺として再興し現在に至るといわれる。 塔の中心礎石は、縦115cm、横87cmのやや長方形の自然石に直径38cm、深さ22cmの穴が掘られ、両側に幅24cm、深さ3cmの溝が形成されているが、元の塔基から移動している。 九輪の破片は、青銅製で、長さ43cm、38cm、32cmのものが3個である。本来、塔の頂部に建てられていたものである。 風鏝(ふうこう)は、堂塔の軒先につるされていたものである。復元すると約20cmほどの大きさで推測され完全な姿が想像できる貴重な資料である。		関連施設: 福山城博物館(084-922-2117)
県	重要文化財(考古資料)	平形銅剣	ひらがたどうけん	1口	福山市草戸町	昭32.9.30	銅剣	長さ45cm、幅9cm、茎巾5cm	昭和6～7年(1931～32)頃、福山市熊野町の熊ヶ峰山麓の熊野神社裏山から折損した一口とともに発見されたもので、折れた方は現在散逸している。銅剣は、突起部から刃先になるほどややふくらみもっている。茎部は扁平な円筒状で、その両側には樋が通っている。沼隈郡沼隈町中山南の日枝神社の平形銅剣(県重要文化財)と同型の可能性がある。平形銅剣は、弥生時代後期(2世紀～3世紀)、まづりに使用したと考えられている青銅製の剣で、伊予を中心とする瀬戸内海中部地域一帯に分布している。		
県	重要文化財(考古資料)	平形銅剣	ひらがたどうけん	1口	福山市沼隈町中山南	昭32.9.30		長さ45cm 茎幅5cm	この銅剣は、日枝神社の神宝として伝世し、同社宮司新良真家に保管されてきた。同家の史料によると、神社の東方100m余のところに石兜の窟(巨大な立石)から出土したことが記載されている。この銅剣は、福山市熊野町の熊野神社裏山から出土した平形銅剣と同型の可能性がある。平形銅剣は、弥生時代後期(2世紀～3世紀頃)、まづりに使用されたと考えられており、巨石の周りに埋納されたものと推定される。		
県	重要文化財(考古資料)	荒神古墳副葬品 金銅装太刀1口(柄頭、つば、はばき、さや、責め金、刀身) 刀身3口 耳輪4個 勾玉9個 切り子玉7個 須臾鍔蓋杯2組 須臾器杯1個	こうじんこふんふくそうひん	27点	福山市西町二丁目県立歴史博物館	昭36.11.1			荒神古墳は、高田郡早田町下小原にある思地古墳群に属している。墳形は円墳で、内部主体は横穴式石室であったと思われるが、明治43年(1910)に発掘され、現在は全壊して規模は不明である。遺物の出土状況は明らかでないが、その一部が指定されたもので、いずれも古墳時代後期(6～7世紀)の特色をもつ資料である。これらのうち金銅装太刀は、主頭(しやうとう)の柄頭(つかがしら)であり県内から出土する例は稀である。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)
県	重要文化財(考古資料)	銅戈	どうか	1口	三原市八幡町宮内	昭38.4.27	青銅製	長さ37cm 茎の長さ1.1cm 区部の幅9.6cm 紐かけの孔一辺1～1.2cm	銅戈は本来柄(え)に対し、直角につけて用いる武器である。本品は中細形で他にあまり例がなく、北部九州で見られる銚戈に近い形をしている。この銅戈は両刃で、身に斜行する内きみの区(まち)に短い茎(なかこらなり、鑢(しのぎ)は明瞭でなく種(い)はない。鋒(むね)は丸味をおび鑑に欠けており実用性に乏しく、儀器として用いられ、弥生時代中期(前1世紀～1世紀頃)頃のものとも推定される。この銅戈は「天逆鋒」と言われて御頭八幡宮宝物として伝えられ、青木充延の「備後八幡雜記」(文化13年(1816)著)では、同社北方の鉾ヶ峰から出土したと記述されている。		関連施設: 御頭八幡宮宝物収蔵庫(0848-65-8652)
県	重要文化財(考古資料)	湖崎山古墳出土三角縁五神四獣鏡及び短冊型鉄斧 1面	でんしおざきやまこふんしゅつどうきんかくぶちこしんしじやうきょうおひたんざがたてつう	1面	福山市新市町相方	昭56.11.6 昭57.2.23(追加指定、名称変更)	三角縁五神四獣鏡ノ白銅製短冊型鉄斧	三角縁五神四獣鏡ノ直径22.0cm、厚さ0.2～0.3cm 短冊型鉄斧ノ長さ24.8cm、幅頭部5.5cm、幅中央部6.0cm、幅刃部7.0～7.5cm、厚さ1～4cm	湖崎山古墳は芦田川の右岸、新市の平地が見渡される丘陵上にあり、現在は個人の墓所となっている。古墳は、前方後円墳の可能性もあるが、全体に削平が著しく、墳形は不明瞭である。この古墳から出土したと伝えられる鏡は三角縁五神四獣鏡で、背面中央に円座紐(えんざごう)をめぐって、内区に神獣の像を彫刻する。銘帯には六福の字格内に「天・王・日・月・天・王」の文字を右まわり外向に配し、跋文帯によりつづれている。内区に銘帯との間は段つきで銚曲文(せうまがま)をめぐらしている。 外区との境にも段つき、銚曲文がめぐらされている。更に内側から銚曲文、跋文(はもん)、銚曲文の順に文帯帯がめぐり、外縁が三角縁となっている。 鋳出はきわめて良好で鑄(さび)や損傷もほとんど見られず、いまでも完好な状態である。また、鉄斧は短冊形である。これら出土品の時期は古墳時代前期(4世紀)であり、大和政権から配布された鏡と考えられている。		関連施設①: 広島県立歴史博物館(084-931-2513) 関連施設②: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(考古資料)	追山第一号古墳出土品	さこやまだいちごうこふんしゅつどうひん	274点	福山市神辺町川北 町立歴史民俗資料館	昭62.3.30			追山第1号古墳は、神辺平野を望む丘陵南斜面に位置し、11基で構成される追山古墳群中、最大規模の壘主的な古墳である。古墳は、径21.5mの円墳で、横穴式石室である。この石室から武器類、馬具類、装身具類、土器類の計274点の多量の遺物が出土した。これらの中で、県内では3例目の練馬環頭大刀(ひんばはかたとしたう)は、柄と鞘に金銅製の金具、柄頭に金銅製の環頭が装着される。環頭の中央には風凰、環体には龍を表現している。その他、鏡象眼鐔付大刀(きんざうがんてい付たがた)、美術工芸品として、また、同一石室からの一括出土品として当時の生活、技術などを上る上で価値が高い。また、環頭大刀は、大和政権から地方豪族を掌握する過程で、政治的・軍事的シンボルとして与えられたものと考えられており、大和政権と備後南部における古墳時代後期(6世紀～7世紀)の政治的動向を示す貴重な資料である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(考古資料)	貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしゅつどのとくしゅつきたいがたとき	1点	尾道市御調町市 御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm、脚部最大径41.1cm、胴部最大径23cm	この特殊器台形土器は、昭和43年(1968)御調町貝ヶ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したといわれる。特殊器台形土器は、特殊器台形土器とともに、弥生時代後期の中頃(2世紀頃)以降に、吉備(岡山県・広島県東部)を中心とした墳墓から出土する。兼落遺跡から出土する日常使用される器台や壺に比べて、極めて大型化すること、鋳造文(きよしもん)・斜格子文(しやうしもん)・連続S字状の文様などの特徴ある文様で飾られること、赤色顔料が表面全体に塗られることなどから大きく相違し、墳墓の葬送に關わる土器と考えられている。本例は特殊器台形土器の中では古式の様相を示すものであるとともに、吉備の中核(岡山県南部)においてもこのような完存に近いものはなく、極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	重要文化財(考古資料)	白鳥古墳出土品 三角縁紋文帝三神三獣鏡 1面 三神三獣鏡 1面 碧玉製勾玉 1点 素環頭大刀 1口	しらどりこふんしゅつどのひん		東広島市高屋町郷	昭62.12.21		三角縁紋文帝三神三獣鏡／ 直径21.8cm 三神三獣鏡／直径16.4cm 碧玉製勾玉／長さ3.1cm 素環頭大刀／現存長69.8cm	白鳥古墳は、東広島市高屋町郷の白鳥山(標高453m)山頂にあつたと言われているが、明治43年(1910)白鳥神社殿造営時に破壊されたものらしく、古墳の規模や形状は明らかでない。この時、三角縁紋文帝三神三獣鏡1面(さんかふちしんじゆもんたいせんしんさんしゅうきょう)、三神三獣鏡1面、碧玉製勾玉(またま)1点、素環頭大刀(そくわんとうちう)1口などが出土したと伝えられている。これらの遺物の年代は、鏡の図文や素環頭大刀の存在などから西暦400年を前後する時期と考えられる。国産の三角縁神獣鏡を含むこの時期の古墳の一括遺物としては、県内では他に例が少なく貴重である。		
県	重要文化財(考古資料)	一ツ町古墳出土亀形須恵器	ひとつまちこふんしゅつどのかめがたすえき	1点	安芸高田市向原町戸島	平2.12.25		長さ18.7cm、幅17.5cm、高さ12.6cm	亀に見立てた平瓶で、胴上半部に甲羅、底部に三本の短脚をつけた、いわゆる裝飾須恵器の一例である。造形的には鳥形須恵器と同一であるが、亀形の平瓶は他に例がない。 向原町の古墳からは、環状提瓶や鳥形須恵器などの裝飾須恵器が多く出土している。亀形須恵器は古墳時代終末期(7世紀)のこの地方を特色づける代表的な資料として貴重である。		
県	重要文化財(考古資料)	石鏡山古墳群出土遺物 【第1号古墳】 斜縁二神二獣鏡 1面 硬玉製勾玉 3箇 琥珀製勾玉 3箇 碧玉製管玉 42箇 鉄やがかな 2本 鉄刀子 2口 鉄鍬 41本 鉄短剣 1口 銅鏃 5本 【第2号古墳】 内行花文鏡破片 2面 鉄刀子 1口 鉄やがかな 1本 土師器片 2箇	いしやまこふんしゅつどのいぶつ	106点	福山市西町二丁目(広島県立歴史民俗資料館保管) 三次市小田幸町(広島県立歴史民俗資料館保管) 広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平5.2.25	第1号古墳／斜縁二神二獣鏡1面、硬玉製勾玉3箇、琥珀製勾玉3箇、碧玉製管玉42箇、鉄[8746]2本、鉄刀子2口、鉄鍬41本、鉄短剣1口、銅鏃5本 第2号古墳／内行花文鏡破片2面、鉄刀子1口、鉄[8746]1本、土師器片2箇	中国の後漢や三国時代の青銅鏡二面を初めとする石鏡山第1号・第2号古墳出土遺物は、各種葬主体ごとに遺物の組成がやや相違するが、いずれも古式の様相を示す。特に斜縁(しやうせん)二神二獣鏡や定角式鉄鍬(じやうがくしきてつぞく)、硬玉製勾玉(こうぎよせいぎまかたま)類は前期古墳の特徴的な遺物として貴重である。広島県内における古墳時代前期(4世紀)の一括遺物として各様相を代表する遺物といえる。			
県	重要文化財(考古資料)	壬生西谷遺跡出土遺物 内行花文鏡 1面 鉄鍬 1本 碧玉製管玉 10箇 弥生式土器 6箇	みぶにしたにいせきしゅつどのいぶつ		三次市小田幸町(広島県立歴史民俗資料館保管) 広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平6.2.28	内行花文鏡1面、鉄鍬1本、碧玉製管玉10箇、弥生式土器6箇	これらの遺物は壬生西谷遺跡(千代田町所在)の墳墓群から出土した中国の後漢鏡、及び鉄鍬、管玉・弥生式土器である。鏡は墳墓群のなかで中心となる埋葬施設から出土したもので、完形の内行花文鏡(ないこうがもんきょう)には「長直子孫(ちやうじそん)」の銘がある。完形の後漢鏡を副葬する弥生時代(前3世紀～3世紀)の墓は中国地方では稀で、被葬者はこの地域の首長クラスと考えられる。この時期の首長一族の存在を示す資料として貴重である。			
県	重要文化財(考古資料)	山崎遺跡出土呪術関連遺物 円形木札(墨書呪符) 2枚 和鏡(蓬萊鏡) 1面 銭貨 27枚 土師質土器 20箇 土師質土器破片 一括	やまさきいせきしゅつどのじゆつつかんれんいぶつ		広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平9.9.30	円形木札／鏡の蓋となる和鏡／銅鏡 銭貨／中世の輸入銭、開元通宝、宣徳通宝など	円形木札／直径108mm、厚さ1.5mm 和鏡／直径108mm、縁高8mm 土師器土器／口径12.8～15.9cm、底径6.3～7.6cm、器高2.6～3.5cm	これらの遺物は、山崎遺跡(三次市大田幸町所在)の土坑(どこう)から出土したものである。円形木札の呪符からみて調伏や悪霊退散のまじないにかかわる可能性が高く、何らかの呪術行為を行った後に一括埋葬されたものと考えられる。中世の呪術関連遺物である。 埋葬された時期は、円形木札に記載された干支の「丁酉(ひのと?)」、和鏡、銭貨、土師質土器からみて天文6年(1537)(室町時代後半)が考えられる。 これらの遺物は、室町時代(1333～1572)の民間信仰の様相や精神文化の一端を解明する上で重要な資料である。		
県	重要文化財(考古資料)	田上第2号古墳出土遺物 脚付裝飾壺(須恵器) 1点 杯蓋(須恵器) 7点 杯身(須恵器) 7点 高杯(須恵器) 4点 椀(須恵器) 1点 平瓶(須恵器) 1点 提瓶(須恵器) 2点 長頸壺(須恵器) 1点 環口壺(須恵器) 1点 小壺(須恵器) 1点 須恵器破片 一括 鉄(鉄製品) 7点 脇片(鉄製品) 7点 刀子(鉄製品) 1点 管玉(玉類) 3点 小玉(玉類) 5点	たがみだいにこうふんしゅつどのいぶつ		福山市西町二丁目(広島県立歴史民俗資料館保管)	平10.9.21		脚付裝飾壺／器高43.3cm、口径12.4～13.1cm	これらの遺物は福山市芦田町に所在する田上第2号古墳の横穴式石室内から出土した。中でも特徴的な遺物として、脚付裝飾壺(きやくつきそうしよくつぼ)は高さ43.3cmと、県内では珍しい大きな裝飾須恵器(すえき)である。肩部に人物や動物の小さい像や小壺が付けられている。全貌は不明であるが、向かい合う男女の性器を表現した全国的にも類例の少ない人物像が含まれており、子孫繁栄か死者再生の願いを込められたと考えられている。 裝飾須恵器の多くは6世紀中葉から7世紀末までにみられるが、この壺は伴同遺物から6世紀後半と考えられる。		
県	重要文化財(考古資料)	隔内遺跡出土遺物 縄文土器(完形復元) 1点 骨製耳飾(耳栓) 1対 縄文土器片465点 けつちきしゅつどのいぶつ 石鏡7点 有柄石七(石匙) 1点 模形石器1点 剥片1点 石鏡S点 磨り石・被石か9点 石器破片 82点	ようらいせきしゅつどのいぶつ		庄原市中本町一丁目	平15.4.21			隔内遺跡(庄原市濁川町隔内)の、縄文時代中期(5000年前)の祭祀(さいし)あるいは埋葬の場所と推定される16基の土壇(どこう)とその周辺の包含層から出土した遺物。 遺物の時代は、縄文時代中期を中心に、早期から後期までである。 完形復元された縄文土器は、口縁部から胴部下半に線(すず)が付着するが、土壇の中をさらに横に掘り込んだ場所から出土したことから、兼清(しんせい)つ用土器を埋葬に再利用したものと推定される。 このほか、日本海沿岸との交流を物語るヤメの骨製耳飾(耳栓)なども出土し、中国山地の縄文時代中期研究の基礎資料となっている。		関連施設:庄原市歴史民俗資料館 (0824-72-1159)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(考古資料)	丸小山経塚出土品 経筒(蓋付) 1口 厨子入り木造十一面観音立像 1躯	まるこやまきよづかしのつどひん	2点	世羅郡世羅町	平22.4.19			本出土品は、経筒と厨子に入った木造十一面観音立像からなる。経筒は16世紀前半を中心にみられる。定型化した六十六部(ろくじゅうろくふ)回国(かいこく)経筒(のきょう)経筒の特徴を備えている。回国経筒に仏像を伴う例は、西日本では少ない。県内では、紀年銘(きねんめい)があって完全な形で残り、出土状況まで確認できる唯一の回国経筒である。 本出土品は、16世紀前半の世羅郡のみでなく、戦国時代の安芸や備後地域の社会を解明するための貴重な考古資料である。		
県	重要文化財(考古資料)	吉川氏城館跡出土品(小倉山城跡、吉川元春館跡、万徳院跡) 土器・土製品654点 木竹製品233点 墨書木製品32点 漆器18点 石製品43点 墨書石製品9点 金属製品157点 繊維製品1点	きっかわしじょうかんあとしつどひん(おくらやましようあと、きっかわとはるやかたあと、まんといんあど)	1,141点	山県郡北広島町	平25.4.30			15世紀から16世紀における、安芸の国人領主(こくじんりょうしゅ)吉川氏の発展段階を示す城跡、館跡、寺跡などで構成される吉川氏城館跡のうち、平成3～17年(1991～2005)に京教委と大朝町、豊平町及び子代田町教育委員会(現 北広島町教育委員会)により、史跡整備事業に伴う発掘調査が行われた。小倉山城跡、吉川元春館跡、万徳院跡からの出土品である。 城跡・館跡・寺跡という各遺跡の性格を特色付ける。種類・質・量共に他を圧倒する豊富な内容を持つとともに、各遺跡の位置する安芸国北部の地域性を明確に示し、年代についても史料による検証結果と矛盾しない。安芸国北部の戦国期から縄文期城館跡の基準となる、中国地方を代表する一括遺物である。		関連施設: 戦国の歴史史館(0826-83-1785)
県	重要文化財(考古資料)	装束裨文銅鐸(黒川遺跡出土)	けさだすきもんどうたく(くろかわいせきしゅうど)	1口	三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館	平成29.12.4		総高28.0cm、最大幅(推定)16.4cm、重量890g	昭和36年、広島県世羅郡世羅西町(現 世羅町)大字黒川字下陰地で農道工事にもなつて偶然発見された。本体の文様は四区装束裨文である。また、鈕(吊り手)の変化に基づく型式分類では、扁平鈕式古段階に分類される。同じ型式の銅鐸は主に岡山県から近畿地方にかけて出土し、兵庫県で群型が出土していることから、兵庫県地域を中心に製作され近畿地方以西に分布した可能性が高い。その中で、本銅鐸は山陽側における分布の西端である。 本銅鐸は、近畿地方の銅鐸祭祀が西方へと広がって行く様子を知らる上で重要であるとともに、広島県地域における弥生文化の受容・展開過程、さらには広島県地域の弥生文化の地域的特色を知る上での極めて重要な資料である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(歴史資料)	金剛用兼禪師被着装束(冬用) 金剛用兼禪師被着装束(夏用) 金剛用兼禪師持物木製持鉢 金剛用兼禪師持物木製長杖	きんこうようけんぜんじかんけいひん	4点	廿日市市佐方	昭60.12.2	装束/綴子、麻持鉢、長杖/漆塗		・金剛用兼禪師被着装束(けさ)(夏用) 洞雲寺(どうんじ)伝の金剛和尚行状記に「金剛和尚装束一領 大宮司以明神御衣所製」とあるもので、麻製の五条装束で、古式のものである。漆塗り木製紐を付けている。 ・金剛用兼禪師被着装束(冬用) 同行状記に「金剛和尚装束一領 嚴島明神所献」とあって、象牙の綴着(けんちやく)の裏装(うらさき)に「豊澤代、京都江道濃色修補」と墨書の七条装束である。材料は、象牙色文を綴り地している綴子製(じゆすけ)で仕上げ、綴(けん)は象牙である。 ・金剛用兼禪師持物木製持鉢(じはつ) 同行状記に「金剛和尚持鉢一口 番木所製」と見るもので、禪僧が鉢に所持し、食料品あるいは布施料を受納する器である。古くは沙波離裂(金属)のものもあり、正倉院に残っている。金剛禪師所持のこの器は、木製で赤色の漆を塗って仕上げたものであるが、底が抜けている。 ・金剛用兼禪師持物木製長杖 木製の長杖の肌面に一面小突起を彫出し、漆塗りに仕上げられる。		
県	重要文化財(歴史資料)	金剛般若波羅密経版木	こんごうはんにはらみつきょうはんぎ	7枚	三原市高坂町許山	平9.5.19	桜材		室町時代の長禄3年(1459)防州(山口県)祥雲寺で開版された版木、僧永賢によって佛通寺に寄進されたと伝えられる。7枚目には刊記と護法華嚴天神像が彫られている。 祥雲寺は佛通寺を本山とする十六派の寺院のひとつで、この版木は中世の地方出版文化を語るうえで重要な資料である。 金剛般若波羅密経は般若経典のひとつである。		
県	重要文化財(歴史資料)	延命地藏菩薩経版木	えんみょうじぼざつきょうはんぎ	2枚	三原市高坂町許山	平9.5.19	桜材		戦国時代の文明10年(1478)開版の版木。2枚目裏に刊記と如意輪観音像が彫られている。中世出版文化の水準を示す貴重な資料である。 延命地藏菩薩経は、地藏菩薩の誓願・功德を説く経典である。		
県	重要文化財(歴史資料)	広島県深安郡山野村役場文書	ひろしまけんふかやすくんやまのむらやくばもんじょ	8,071点	広島市中区千田町三丁目(広島県立図書館 寄託)	平25.1.24		3,400冊、4,099巻、56括、105袋、20包、265通、79枚、8点、2箱、35纏、1折、1本	山野村(現在の福山市山野町)が近代の自治体として存続した期間に、山野村役場で作成及び收受された行政文書を中心とする文書群(もんじょく)である。役場の各職掌が作成した簿冊、国の法令、県・郡の布達類から成り、その後当たる近世の庄屋文書(しやうやもんじょ)及び加茂町山野支所の行政文書なども含む。 明治維新及び第二次世界大戦という二つの大きな社会変革期を含む自治体文書がまとまって伝来している例は、全国的に見ても極めて希少である。 また、役場の全ての職掌で作成された行政文書が連続して伝来しているため、役場の行政事務の変遷、村の現状と課題、国や県とのやり取り、村民の生活など、村と村民の具体像についての時相をとつても多面的に明らかにできるとともに、一つの村を対象にそれらの変遷を解明できるといふ、学術資料として高い価値を有する。 さらに、大正期という早い時期から行われた地元の方々による文書保存活動は、地域住民による資料保存活動の先駆けであり、貴重な例として顕彰することができる。		関連施設: 広島県立図書館(082-245-8444) 写真提供: 広島県立図書館